

ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著

『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その八）

鈴木 満 訳・注

\*凡例

1. ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ伝説集』（一八五三）（略称をDSBとする）の訳・注である本稿の底本には次の版を使用。

*Deutsches Sagenbuch von Ludwig Bechstein. Mit sechzehn Holzschnitten nach Zeichnungen von A. Ehrhardt. Leipzig. Verlag von Georg Wigand, 1853. Reprint. Nabu Press.*

初版リプリント。因みに一〇〇〇篇の伝説を所収。

2. DSB所載伝説の番号・邦訳題名・原題は分載試訳それぞれの冒頭に記す。

3. ヤーコプとウィルヘルムのグリム兄弟編著『ドイツ伝説集』（略称をDSとする）を参照した場合、次の版を使用。

*Deutsche Sagen herausgegeben von Brüdern Grimm. Zwei Bände in einem Band. München. Winkler Verlag, 1981. Vollständige Ausgabe, nach dem Text der dritten Auflage von 1891.*

因みに五八五篇の伝説を所収。

なお稀にはあるが、DSの英語訳である次の版（略称をGLとする）も参照した。

*The German Legends of the Brothers Grimm. Vol. 1/2. Edited and translated by Donald Ward. Institute for the Study of Human*

Issues, Philadelphia, 1981.

4. DSB所載伝説とDS所載伝説の対応関係については、分載試訳冒頭に記すDSBの番号・邦訳題名・原題の下に、ほぼ該当するDSの番号・原題を記す。ただし、DSB所載記事の僅かな部分がDS所載伝説に該当する場合はここには記さず、本文に注番号を附し、「DS\*\*\*に詳しい」と注記するに留める。

5. 地名、人名の注は文脈理解を目的として記した。史実の地名、人名との食い違いが散見されるが、これらについては殊更言及しないことを基本とする。ただし、注でこれが明白になる分はいたしかたない。

6. 語られている事項を、日本に生きる現代人が理解する一助となるかも知れない、と、訳者が判断した場合には、些細に亘り過ぎる弊があるうとも、あえて注に記した。こうした注記における訳者の誤謬へのご指摘、および、このことについても注記が必要、といった高教を賜ることができれば、まことに幸いである。

7. 伝説タイトルのドイツ語綴りは原文のまま。

8. 本文および注における「」内は訳者の補足である。

『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その一)	一	六〇	所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四卷第一・二号一一七〜二三五ページ、平成二十四年十一月
『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その二)	六一	九〇	所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四卷第三号四六三〜五三〇ページ、平成二十五年二月
『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その三)	九一	一三四	所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四卷第四号七五〜一七六ページ、平成二十五年三月
『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その四)	一三五	一八四	所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十五卷第一・二号一五七〜二八五ページ、平成二十五年十一月
『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その五)	一八五	二二五	所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十五卷第三・四号九五〜一八〇ページ、平成二十六年三月
『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その六)	二二六	二八八	所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六卷第一号二〇九〜三三〇ページ、平成二十六年十月

『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その七） 二八九——三三九 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六卷第二号一五一―二四六  
ページ、平成二十六年十二月

\*本分載試訳（その八）の伝説

- 三四〇 法衣の提琴ザインキリン Der Geiger im Chorrock.  
三四一 アルトマルク地方の都市名々の評判 Der Altmärkstädte Name und Ruhm.  
三四二 麴ペ麴レンを拒む犬たち Hunde verschmähen Brot.  
三四三 ローラント柱ヘン Die Rolandsäulen.  
三四四 荒ダイ・ヴェーステン・テュル 廢塔 Die wüsten Thürme.  
三四五 黄金の風シロミ Die goldne Laus.  
三四六 弔鐘 Die Todtenglocke.  
三四七 アルフェンスレーベン家の奥方 Die Frau von Alvensleben. \*DS68 Die Frau von Alvensleben.  
三四八 辺境地方の貴族マルケン Der Adel der Marken.  
三四九 ヴイッテンベルク近傍の姫君 Das Fräulein bei Wittenberge.  
三五〇 奇蹟キザの血 Wunderblut.  
三五一 レムスの墓 Das Grab des Remus.  
三五二 塗り込められた市門 Die vermauertten Thore.  
三五三 駆除された鼠ラッテン Ratten vertrieben.

- 三五四 駆除された蛇 Schlangen vertreiben.
- 三五五 蛙の沈黙 Die stummen Frösche.
- 三五六 テーゲルにはお化けが出る Es spukt in Tegel.
- 三五七 ベルリンの女魔法使いたち Zauberweiber in Berlin. \*DS251 Wetter und Hagel machen.
- 三五八 妖怪刈り取り人夫 Die gespenstigen Mäher.
- 三五九 聖フベルトウスの牡角鹿 Der Hirsch Sankt Huberti.
- 三六〇 白衣の夫人 Die weiße Frau.
- 三六一 強者ヨッヘム Der starke Jochem.
- 三六二 でっかい富籤 Das große Loos.
- 三六三 花の谷 Der Blumenthal.
- 三六四 鎧武者たち Die Geharnischten.
- 三六五 アダム派の踊り手たち Die Adamstänzer.
- 三六六 藁の橋 Die Strohbücke.
- 三六七 金喰い女 Die Geldresserin.
- 三六八 不思議なキリスト像 Das wunderbare Christusbild.
- 三六九 ヴィッテンベルクの幻影 Erscheinungen zu Wittenberg.
- 三七〇 おぶさる小人 Der Männlein auf dem Rücken. \*DS146 Das Männlein auf dem Rücken.
- 三七一 悪魔の蹄鉄 Der Teufels-Hufeisen. \*DS208 Der Teufelshufeisen.

- 三七二 代言人になった悪魔 Der Teufel ein Fürsprech.                   \*DS211 Der Teufel als Fürsprecher.  
三七三 最後のグロッシェン銀貨 Der letzte Groschen.  
三七四 井戸の中の好運 Das Glück im Brunnen.  
三七五 豌豆石 Die Erbsensteine.  
三七六 シュンデル巖と嘘の巖 Sündelstein und Lügenstein.           \*DS200 Sündelstein zu Osnabrück. / \*DS201  
Der Lügenstein.  
三七七 ヴィッテキントの城の数 Die Wittekinds-Burgen.               \*DS454 Wittekinds Flucht.  
三七八 ヴィテッキントの墓と記念物 Wittekinds Grab und Gedächtniß.  
三七九 ゾーストの宝物 Der Soester Schatz.                   \*DS160 Der Soester Schatz.  
三八〇 王女 Die Königs-tochter.                   \*DS92 König Grünewald.  
三八一 緑の科の木と枯れた科の木                   \*DS129 Johann Hübner. / \*DS235 Kindelsberg.  
三八二 二つのグライヒェン城 Die zwei Gleichen.  
三八三 プレッセ城 Burg Plesse.  
三八四 プレッセの静かな民 Das stille Volk zu Plesse.               \*DS30 Das stille Volk zu Plesse.  
三八五 シュヴェックホイザー山の話 Von den Schwackhäuserbergen.  
三八六 穀棹打ちと小人 Der Drescher und der Zwerg.  
三八七 イーザング伯爵 Graf Isang.                   \*DS132 Seeburger See.  
三八八 鐘の湖 Der Glockensee.

- 三八九 ハイニンリヒス・ヴインケンケル Der Heinrichs-Winkel. \*DS228 Das Fräulein von Staufenberg.  
三九〇 ゴスラールの悪魔の穴<sup>トイフェルスロトホ</sup> Das Teufelsloch zu Goslar. \*DS183 Das Teufelsloch zu Goslar.  
三九一 ランメルスベルクとラムベルク Der Rammelsberg und der Rammberg. \*DS475 Der  
Rammelsberg. / \*DS184 Die Teufelsmühle.  
三九二 聖<sup>ヘンテ</sup>アンドレーアスベルクの鉱坑 Die Gruben zu St. Andreasberg. \*DS134 Die verschütteten  
Silbergruben.  
三九三 シヤルツフェルス城の精 Der Geist auf Scharzfels. \*DS204 Der Turm zu Schalfeld.  
三九四 ニクサイと葡萄園の穴<sup>グラインガルテンロトホ</sup> Die Nixei und das Weingartenloch.

三四〇 法衣の提琴<sup>ヴァイオリン</sup>弾き

タンガールミュンデ<sup>(1)</sup>近郊の二つの村東ヘーレンと西ヘーレンは、お互いそう隔たつておらず、両者の間に共同の教会が建っている。さて昔むかしのお話。この教会の司祭さんは陽気な御仁で、空っぽの聖餐杯<sup>せいさんはい</sup>より中身の詰まった酒壇<sup>さかひん</sup>の方が、「教会の」風琴<sup>オルガン</sup>より提琴<sup>ヴァイオリン</sup>の方がお好きと来ていた。司祭自身すこぶる巧妙かつ華やかに提琴<sup>ヴァイオリン</sup>が弾けたし、高位の坊様がたの介添えをして聖務を執り行うより、自分の教会の会衆に踊りの喜びを与える方が遙かに多かつた。さてある年の聖霊降臨祭<sup>プロフィンツステン</sup>のこと、やはりこうして提琴<sup>ヴァイオリン</sup>を弾き、教区民が降臨祭の輪舞をするのの伴奏をしたもの。輪舞は聳え立つ科<sup>リ</sup>の木<sup>デ</sup>の下で賑やかに行われた。と、ひどい雷雨が襲来したが、皆おもしろくて堪<sup>たま</sup>らないものだから、一向気にもしなかつた。この村名物の科<sup>リン</sup>の木<sup>デ</sup>は天蓋のように葉がこんもりと繁<sup>しげ</sup>つていたから、長い間充分雨除けになった。雷が轟<sup>とどろ</sup>き始めても愉快なさんざめきのせいで聞き逃された。なにしろ神父様が、踊りを止めなさい、とおっしゃらないのだから、若い男女が踊ったり、歓呼したりして楽しみ続けたのは当然と申すもの。ところが突然凄<sup>よま</sup>ましい稲妻<sup>いなづま</sup>が科<sup>リン</sup>の木<sup>デ</sup>の根元を一閃、踊っている人人の上に恐ろしい雷が落ち、十二組の踊り手と提琴<sup>ヴァイオリン</sup>を奏<sup>ソウ</sup>でていた司祭を倒した。司祭の提琴<sup>ヴァイオリン</sup>は弓もろとも木っ端微塵<sup>みじん</sup>になり、「司祭の右手——一説によれば右腕全体——が挽<sup>も</sup>ぎ取られた。司祭は二度と再び踊りの伴奏をしなかつた。——シレジアでも似たような事件が起こっている。こちらでは踊っていた仲間全員が雷火に撃たれて死んだ。

三四一 アルトマルク地方の都市名とその評判

シュテンダールはかつてアルトマルク地方の首邑(1)とされていたし、今日でもこの地方の町町の内最も重要であり、常に上席を占めている。アルトマルクの七都市に関する昔の韻律詩があつていまだに民衆の間に伝えられている。これはそれらの住民の一面を詠んだもの。

シュテンダールの衆は葡萄酒(2)がお好き、

ガルデレーゲンの衆は貴族気取り、

タンガームユンデの衆は勇氣凜凜(3)、

ゾルトヴェーデルの衆は財産家、

ゼーフースの衆は冒険家、

ヴェルベン(4)の衆は小麦を高く売りつける、

オスターベルク(5)の衆は威張りたがりよ、

熊(6)と思つて牡牛(7)を突いたで。

草創期のシュテンダールは石ころの多い谷にあつた。そこで昔はシュテンダール〔石谷(8)〕と書いたものである。燦燦(9)と日に照らされる山の斜面は暖かく、葡萄(10)の育成にはもつてこいだつたので、アルブレヒト熊辺(11)境伯の治世下、葡萄栽培に従事するラインラント人が移住してからというもの、この産業が大層盛んになった。シュテン

ダールの市民は拵こしらえた葡萄酒フワインを近隣諸地方に全部供給してしまつたわけではなく、自分たちの飲料にもしたが、これは当たり前の話。一方ガールデレーゲンだが、この町は麦酒醸造業で裕福になつた。この麦酒ビールはガールライと呼ばれた。タンガームユンデの町は何度か重ねた激戦において勇氣と信義の持ち主であることを証明した。ザルトヴェーデルはかつてハンザ同盟都市で、盛んに交易を行つて財産を殖ふやした。ゼーハウスの人たちはもとより好んで海ゼーを家としたわけだが、「伝説にある」かの至福の島を捜し求めたけれども結局徒勞に終わった、と取り沙汰された。ヴェルベンは「イン・デア・ヴィッシエ(12)」と呼ばれるその地域の豊饒ほうじょうさを利用して活潑かつせつな穀物取引を行つた。オスターブルクはなんとも締まらない愚行をやらかした。ここの住民は町に向かつて来た牡牛の群れを熊の群れと勘違いして、槍、堆肥用三叉フォーク、棹さお、干し草用熊手などで武装、物物しく防禦ぼうぎよに掛かつたのである。

シュテンダールがとりわけ有名なのは都市建設者との添デア・シュテツテグラリンダーえ名のあるハインリヒ帝(13)によつて建設されたからである。帝はしばしばここに居住した。その家屋は今日なおこの町の最古の区画に存在する。

### 三四二 麵麩ペを拒む犬たち

人をとことんさげすむ時によく使われる慣用句に、やつはどうしようもない悪党なので、やつからは物乞いだつて一文も貰もらおうとしないし、犬だつて麵麩ペを受け取らない、というのがある。これは教会から破門された者に対する呪詛じゆそに由来する。かつてアルトマルクにハインリヒなる裕福な伯爵がいた。ガールデレーゲン伯ともオスターブルク伯とも伝えられる。彼は若い時から異端児で、マクデブルク大司教管区をひどく悩ました。そこでどうとうマクデブルク大司教は伯爵を破門した。ハインリヒ伯は破門と聞いて度外わがれに嘖はらい飛ばした。破門沙汰などちゃんちゃ

らおかしい、と莫迦ぼかにしたのである。——しかしながら時が経つにつれて教会からの破門が意味する恐ろしい力をじわじわ身に沁みて感じるに至った。伯爵は教会にせよ礼拝堂にせよ立ち入ることはできなかった。伯爵領ではもはや教会の鐘が鳴ることはなかった。民草は彼を避け、召使いたちは彼の許もとから暇を取り、一杯の水にしても持つて来てくれる者がいなくなった。こうなると平然と構えてはられない。「人間なんて道理の通らぬ代物だわい」と伯爵。「わしは動物が好きだ。まったくの話、犬どもの方がもつと物事を心得ておる」。——そして麵麩めんぷを手にとると、犬たちを呼んで、麵麩めんぷを裂いてやった。しかし、飼い犬の群れは、伯爵が叱りつけたり、麵麩めんぷを手にして差し出しても、一向喰くおうとはしなかった。そこで伯爵はのしかかっている破門がいかに深刻かつくづく思い知り、犯した所業を悔い、シユテンダールに壮麗な聖堂を建立する、と誓ちかって贖罪しよぐわいした。かくして破門は解かれ、シユテンダールの大聖堂は美しく巧みを凝らして造営しやうえいなつたしだいである。

### 三四三 ローラント柱ソレ

全ハールツ山地、ブラウンシユヴァイクおよびハノーファー、またアルトマルクやマルク・ブランデンブルク（註）のほとんどにおいて、夥おびただしい市や町——場合によっては村村ですら——の公共広場に、ブレーメンと同様（註）、ローラント像が立っているのに出くわす。いわゆるローラント柱ソレである。その形はたいいて典雅優美だが、奇怪な上にごてごてと彩色され、なんともかとも噴き出したくなるようなものも少なくない。起源は大層古く、カール大帝（註）（「シャルルマーニュ」の甥にして臣將ペカールたる英雄ローラント（「ローラン」）を正義の守護者としてかたどつたものだから、ローラント像といえはまず剣が付き物である。伝説によれば、カール大帝が石造ないし木造でこうした肖像

柱を作り、設置するよう命じたとのことだが、案外これは太古の残響で、文字となっていない知識にまで遡るの  
 かも知れない。この柱の最古のものは今日もはや見つからない。現存の柱は中世騎士風の、あるいは戦神にも似た  
 古代ローマ風の風俗でありながら、これにずっと後代起源の銘文が刻まれている。マルク・ブランデンブルクの多  
 くの町では往昔のローラント像が切断されたり、打ち壊されたり、あるいは埋められたりしている。

シュテンドールやブランデンブルクのプレントラウその他には名高いローラント柱が幾つもあるが、シュテン  
 ダールのローラントはとりわけ巨大で奇怪な恰好かっこうをしている。おそらくこれが最大であろう。そのふくら脛すねは大人  
 の男の背丈ほどもあり、携えている剣の長さは十二肘尺エに及ぶ。臀部でんぶには製作者の気まぐれで、笑う道化の顔が附  
 けられていて、人人はこれをオイレンシュビートル17と呼ぶ。これまで再再あつたことだが、このローラント像は世  
 の中全体の、あるいは個個の愚行があまりにも煩わしくなると、ぐるりと向きを変え18（て、尻の道化の顔を見せつ  
 け）た、あるいは少なくとも顔を背けたのである。最近では「一八」四八年18にこれが起こつた由。

### 三四四 荒 廃 塔

シュテンドールの大聖堂教会にもマリア教会にもそれぞれ二つの美しい塔そなが具わっているが、常に鐘楼として機  
 能しているのは両塔の内片方だけである。鐘が吊られていない方は荒 廃 塔ダイ・ウー・ステン・テウルメと呼ばれている。これら二つの  
 荒廃塔は大聖堂前広場ド・イム・ホーフ、ハル通りシュトラッセ、中央広場の下をすうと抜けている隧道すいどうによって互いに結ばれているのだ、  
 という言い伝えがある。とりわけハル通りシュトラッセは、地下が空ろに反響ハレンするから、そう名付けられている由。しかし長  
 年この抜け道は通行不能と思われ、荒廃塔から荒廃塔まで行き来できるかどうか、しかとは分からなくなっていた。

そこでとことんこの伝承の事実を確かめようという気運が目覚めた。死刑の判決を受けて収監されている罪人にこの通路を歩かせよう、罪人が無事にこれをやつてのけたら、シユテンダールでぶらんこ往生するのは勘弁してやり、いくばくかの金を与え、やつこさんの気随気儘、どこか別の場所でぶらぶらしてもらおう、とあいなつた。で、坑内用洋灯ランプを附けた縁なし帽を被らせ、太鼓を提きげてやり、大聖堂の荒廢塔から隧道に下るし、おおよそどの辺りにいるのか聞こえるように太鼓を叩いて行け、と言いつけた。これはすぐさま実行された。くぐもつた太鼓の音は地下を大聖堂広場の端から端まで響いて行き、次いでハル通りシュトルーゼに入った——しかし通りの途中で音がはたと途絶え——それきりになつた。太鼓叩きの姿は二度と現れなかつたし、彼を捜しに行こうという者などあらばこそ。二つの荒廢塔の間を彷徨さまよい歩くのは昔むかしの聖堂參事コルヘア会員たちの亡靈ばかりなのだ——もしかしたら聖務共唱コルフラウ修道女たちの亡靈(10)もいるかも知れないが。独占している隱微な領域に侵入した者の行く手を突然遮おどろつたのはきつと彼らであろう。

### 三四五 黄金の虱しじみ

ピスマルクの町(20)、もしくは町からそう遠く離れていないところに、一三五〇年天から十字架が落ち、これを押し立ててみるとすぐさま奇蹟が起つた。そこで人人はこの十字架のためにわざわざ教会を建立、天の女王(「聖母マリア」)に奉獻し、聖十字架ツム・ハイリグ・クルツ教会と命名した。聖なる十字架に帰依する者が夥おびただしく増えたので、いやもう悪魔が怒つたのなんの、十字架をおちやらかすために虱かっとうの嗜好おし好をしたばかりでかい生き物を拵こしらえ、教会の丸天井の上にそそり立つ塔の中に置いた。民衆、とりわけ教会にお詣りまいに來た巡禮たちは、これが黄金のように光り輝き、脚をも

ぞもぞ動かして這い回るのを目撃し、聖十字架への信仰を逸らされた。なにせ黄金の巨大風なんてのは余所のどこにも見られないが、聖なる十字架は至るところにあったのだから。風は参拝者や喜捨を十字架よりずっと増やしてくれたので、黄金の帯金を風の胴体に回し、黄金鎖で逃げないように留め、餌として毎日一磅の肉を与えた。毎年巡礼日が巡って来ると、風は九天井の上から下へ降ろされて信者たちの拝観に供された。風は鳩ほどの大きさで、鐘楼の下の壁にその実物大の絵が描かれていた。現在聖十字架教会はとくに存在しないし、聖十字架自体も行方不明である。もっとも教会は瓦礫と化してビスマルク近郊の畑地にぼつんと残骸を曝している。シュテンダールへ向かう街道は昔の巡礼道で、今なお聖場と呼ばれている。風もいなくなってしまったが、その名は教会の廢墟に留まっている。つまり廢墟は今日に至るまで黄金の風、あるいは呪われた風と呼ばれているのだ。

### 三四六 吊鐘

名家アルフエンスレーベンの殿たちの本拠であるミルデ河畔のカルベには「堡壘」——この古い裕福な一族発祥の城はこう呼ばれている——がある。この堡壘には鐘が一つ下がっていた。その鐘はアルフエンスレーベン家に属する何人かが死去する時におのずと鳴り始めたものである。遙か遠くの土地で息を引き取った場合でもそうだった。鐘のかような特性はまことに不思議ではあったが、数知れず枝分かれした一族が夥しく繁栄しているこの家系の生きている人たちにとっては堪ったものではなかった。善美を尽くした朝食か昼餐の真つ最中に突然恐ろしい予告の響きに見舞われるのだから。そこでアルフエンスレーベン家のだれかが鐘を撤去してしまうという簡単かつ巧妙な手段を思いついた。鐘はある時突然行方不明となり、今日に至るまでどこにあるのかとんと分らない。

## 三四七 アルフェンスレーベン家の奥方

年代記の語るところによれば、かつて古きアルフェンスレーベン一族に夫と死別した敬虔な奥方がいた。この婦人はまことに善良で、神を畏れ敬い、優しく情け深かった。とりわけカルベのヴェルター地区で市民の細君たちが難産に苦しんでいる時には進んで手を貸した。ある夜、奥方の住む館の外に一人の使いの女がやって来て、下から奥方にこう叫んだ。どうか起きて身なりを整え、ひどい難産に苦しみ、命も危ない産婦の許へ一緒に来て欲しい。なんとも途方に暮れている。産婦の住まいは近くだが市壁の外なのだ、と。そこで奥方が「だつて真夜中ではありませぬか。市門はどこも閉じているでしょう。いったいどうして外へ出られます」と言葉を返すと、使いの女は、門はちゃんと開いてる、と答えた。そこでアルフェンスレーベンの奥方は同行した。途中使いの女は、何も心配することはないが、あちらで食べ物や飲み物が出されても一切手をつけないように、と囁いた。市門は本当に開いており、外の草地を大して辿らぬうちに一つの山に行き着いた。そして山が開いた。アルフェンスレーベンの奥方は、このお出掛けがなんとも只事ではない、と気付いたが、一向怖がらないで、落ち着いて歩き続けた。とある部屋に案内されると、中に小人の女が横たわっていた。産婆の介添えが緊急に必要だった。アルフェンスレーベンの奥方は小人の女を看護し、首尾良く仕事を果たして、健やかな赤児を出産させると、帰り支度に取り掛かった。とはいえ、普通の産婆がするようなことは何もしなかった。普通の産婆はたいしてたっぷり飲み食いするのが好きだし、出された白麴なども持って帰ったりするものだが、奥方はもてなしに用意された物に一切触れなかった。彼女をここまで案内した例の使いの女がまた連れ戻してくれ、先に立って角灯で照らした。館の門の外まで来ると、女は立ち止まり、産婆役を務めてくれた奥方にもう一度礼を述べ、見事な黄金の指環を取り出してこれを贈り、こ

う語った。「どうかこの指環を神聖な保証として大切にしてください。決してご一族から手放してはなりません。この指環がご一族に保管されている限り、ご繁栄が続きましょう。もし失われましたら、ご一族全体が減びます」。アルフェンスレーベン一族はその後二つの系統に分かれたが、指環はその時まで大事に保管されていた、のと。分かれた折指環も二つに割られたが、どうもまずい結果になった、と言う人人がいる。なにしろ指環の片方は火事に遭って溶け、それを所有していた系統は衰微滅亡してしまい、不幸な境涯に陥っているのだ、と。もつとも、しからず、とする説もあつて、これによれば、指環はいまだに無事に保管されており、安全に守られ続けるように、リューベックのある高貴なお宅に嚴重にしまわれている、とのこと。また、指環は現在に至るまでカルベの一族の手許にあり、ただありきたりの黄金指環と何ら違いはない、と主張する向きもある。

### 三四八 辺境地方の貴族

都市建設者とも呼ばれるハインリヒ捕鳥帝はシュテンダールに宮廷を開いていたので、当時エルベ川の彼方に居住していたヴェンド人に軍を向けようと思ひ、精力的に戦仕度を調べた。ヴェンド人の王ミツイスラも負けず劣らず対抗の姿勢を示した。ブランデンブルクを本拠としていたミツイスラはハインリヒに使節団を派遣したが、その申し入れはすこぶる傲岸不遜だった。そこで皇帝は一頭の獠猛な老犬を使節らの前に牽き出させ、これを散散に鞭打つてから一本の木に吊させた。こうした象徴的回答からハインリヒの意図は十二分に読み取れたしだいである。次いで皇帝は一大地方会議をシュテンダールに開催した。ザクセン人、テューリンゲン人、辺境地方の住民、およびその他の同盟者を悉く呼集すると、公侯・領主階級に属していない大勢の大胆不敵な戦士らを平騎士、平

貴族に任じ、「アーデル（高貴で）、アイト（あり続けよ）」と言ひ渡し、武具と紋章を与えたのである。また、以前から既に隊や軍を率いていた人人は伯爵や殿に叙された。かくして皇帝ハインリヒは、感謝に満ち心服しきつた強大な軍隊を創り出し、これを率いて冬の最中凍結したエルベを渡河、ブランデンブルクへ押し寄せ、水原に野営して町を攻撃、これを占領すると、敵軍を撃滅し、配下の領民のために堅固な基地をオボトリート人の邦に打ち立てた。かるがゆえに辺境地方には、夥しい貴族が、裕福で繁栄している貴族の家系が存在するのである。かるがゆえに浮ついた熱狂の鼓吹するまやかしなどには覆されぬ、決して揺らぐことのない、昔ながらの確固とした、王と王家に対する忠誠が存在するのである。こうした忠誠はただ単に貴族一門ばかりでなく、辺境地方の全住民の中に生き続けており、南国の香具師たちやこれに使われる猿どもが乗り越えることを決して許さない巖であり、境界石となっている。

勝利を贏ちえてから皇帝ハインリヒはハルルンガー山の山上に処女マリアに捧げる丸い教会を建立、更に山の下には防塞を築き、これをヴェルベンと名づけた。彼はそれ以降も同地域で勝利を獲ようとするつもりだったからである。そして事実皇帝は勝利を獲得した。なにしろ新たに貴族に任じられた者たちは由緒ある貴族らと並んで獅子のように奮闘、彼らの勇猛果敢な合戦ぶりが皇帝に勝利を齎したので。

### 三四九 ヴィッテンベルゲ近傍の姫君

ヴェルベンの下手に抜がる地域は「イン・デア・プリーグニッツ」と呼ばれ、現在は畑となっている通称「古い町」という土地があり、ここを見下ろして小高い丘が聳えている。丘の上には昔ヴィッテンベルゲの殿た

ちの城が築かれ、麓にはかつてのヴィッテンベルゲの町があつた(33) そうな。これら荒涼とした故地には不気味な気配が漂い、とりわけ、呪われた姫君が彷徨い歩く、との伝承がある。この姫君は生前さる騎士と婚約していたが、騎士が彼女を置いて出征しなければならなくなると、誓いを破つたのである。恋い焦がれる騎士が帰還してみたら、許嫁は別の男——それもヴィッテンベルゲの殿——の妻になつていた。裏切られた恋人は激怒し、軍兵を糾合し、ヴィッテンベルゲの殿に宣戦布告、城と町を攻撃し、これを占領して破壊した。姫の不実な行いのためにかくも夥しい無辜の人命が損なわれたので、姫は世の終わりまで安息を得ることなく徘徊するよう呪われた。町の住民で逃げられた者は以後別の場所に町を再建し始めた。この新しい町には現在有名な鉄道の停車場ができ、彷徨い歩く姫のことなど憶えている者はいない。

### 三五〇 奇蹟の血

辺境地方には血の雨その他、奇蹟の血に関するたくさん(35) の伝承がある。ベリーリッツでは聖餅(「キリストの体の実体」)が絶えず血を流した。聖餅の苦しみが顕現したからである。そこで夥しい巡礼がここへ訪れた。ツエーデニツクのある女が聖別された聖餅を蜜蠟で包み、それを経営している居酒屋の麦酒樽の注ぎ口の下に埋めたことがある。麦酒の量を増やそうと思つてのこと。アルテンベルクのあの敬虔な修道士が蜜房を増やそうとしたように(D S B 一〇)。しかし女は以来良心が休まる時とて無くなり、犯した罪を懺悔して、人にも打ち明けた。女の行爲が知れ渡ると、人人は彼女の酒蔵に入った。すると聖餅が埋められている場所から血が溢れていた。人人が血に染んだ土を掘り起こし、教会に運ぶと、すぐさまツエーデニツク指して貴賤の別なく大群衆が殺到した。ブランデン

ブルク辺境伯ヨハンネスやオットー(37)ですら、姉のブラウンシユヴァイク||リユーネブルク公爵夫人メヒテイルトやブランデンブルク〔大〕司教ルートゲルスを伴ってこの地へ旅し、懺悔聴聞師ざんげちやうもんしの勧めに応じてツエーデニツクにシトー会派(38)の聖処女修道院を建設した。

プリーグニツツのヴィルスナツクで、ある邪よしまな貴族が村と教会を焼き払った。しかし焰ほのおの真っ只中であつても祭壇は燃えないままだった。そして燈明とうみょうが灯り続け、司祭がしまつておいた三つの聖餅ホステアが——血を浴びて——〔祭壇を覆っている〕亜麻布の中央に載つていた。真夜中にだれとも知れぬ声が続け様に三度、司祭に、燃え落ちた教会に残つた祭壇で弥撒ミサを挙げるよう命じた。司祭が声の言う通りにすると、聖なる聖餅ホステアは幾つもの奇蹟を示し、信心深い人人が北方諸国全土から群れを成して参拝しに來た。

プリッツヴァルクから程遠からぬシェーンハーゲン村のことだが、プリッツケン家(39)のある奥方が亡くなって埋葬された時、「館の壁に掛かつている狩猟記念の」牡角鹿ヒルシユの枝角が一日一夜の間血を流し続けた。この不思議が何を意味するのかだれにも分からなかった。なにしろこの角は十四年このかた同じ場所に〔何事もなのまま〕掛かつていたからである。シユタールガルト地方の村ゲロースマンテルのある女中がこんな具合に三日続けて血を流した時も、世間は驚倒した。

### 三五一 レムスの墓

ラインスベルク(40)の町の近くに湖がある。湖中の島に昔巨大な石の墓があり、墓には巨人の大きな骨が見つかった。墓に用いられている石の中に美しい大理石が一つあり、その上に六羽の青鷹あおたかの図柄と何か銘文が刻まれていた。し

かし銘文は大層ごちゃごちゃしていてもはやだれにも読めなかつた。もつともよくしたものでどこやらから聰明(れいり) 伶俐(れいり) なひねくれ者——こういう手合いが妄想(ぼんそう) を恣(し) にしてザルツヴェーデルに太陽神の神殿を、ガルデレーゲン近郊にイシスの都を造ってしまったのかも知れない——(41) がしゃしゃり出て、あなぐり穿鑿(せんさく) を重ねたあげくこう発表した。いわく「先ず第一にこの碑銘はローマ時代のもの。第二にラインスベルクの町は古代には決してそう記されたのではなく、レムスベルクであった。第三に傍ら(わら) を流れている川もまたラインではなく、さりとてリンとかりンネでもなく、レムであった。かくして第四の結論が明明白白となる。すなわち町の名は昔はレムスといったのだ。ゆえに第五の結論がこれまた天日の照らすごとく明らかとなる。レムス、(42) かのローマ建国者の弟は、できたばかりの市壁(いちかき) を莫迦(ぼか) にして跳び越えてみせたため兄のロームルスに殺された、とは全く事実無根である。レムスはラティウム(43) から真つ直ぐに、若干の仲間とともにここなるマルク・ブランデンブルクのルッピン伯爵領にやって来たのだ。第六。ある者たちが唱えるように、レムスがガリアのランス(44) ないしレムスを建設したなどは虚説に過ぎない。第七。レムスが建設したのは全くもって同名の川の畔なるこのレムスなのであって、彼はここで没し、レム川の島に葬られたのである」。

かつては有り余る知識を大いに浪費して、学識(がくし) ある畸人(きじん) たちがこうした噴飯物のちゃらつぽこをどしどし生産したものである。とは申せ今日でもこうした種族は決して死に絶えてはいない。数個の古代の骨壺(こつぼ) を生涯かけて考察、これを論じたたわごと(たわごと) がぎつしり詰まった挿絵入り本を何巻も(ぼうだい) 膨大な金子(きんす) を費やして執筆・出版する輩(やから) が少なからずある。かの箴言(しんげん) は相も変わらず真理であることが証明される。「なんち愚(おろか) なる者を白(うす) にいれ杵(きね) をもて麦(こむぎ) と偕(とも) にこれを搗(つく) くともその愚(おろか) は去(おろ) ざるなり」。(45)

## 三五二 塗り込められた市門

マルク・ブランデンブルクの多くの町町には奇妙なことがある。開いている市門の傍らにもう一つ第二の塗り込められた門が見られるのだ。しかも、この塗り込められた方がもともとの市門だったことがすぐ分かる。こちらが町の通りに直結、一方現在使われている門の向きは通りとは斜めになっているからだ。ルッピン伯爵領のキューリッツ、ヴェイトシュトック、ヴスターハウゼンにはこうした門があるし、ゾルディンに三つ、フリーデベルクに二つ、モーリンに二つ、ベルリンヒエンに二つ、ケーニスベルクに二つ、シェーンフリースに二つ、ヴァルテ河畔のランツベルク、ベアヴァルデ、ヴォルデンベルク、フェルステンヴァルデ、ミッテンヴァルデ、ベルナウにもやはり二つある。同様のものがグランゼーにも二つある。昔行われたかかる市門改築のしかるべき原因・理由を指摘することはもうできない。グランゼーにはこんな言い伝えがある。元元いたヴェンド人の住民がドイツ人に追い出され、ドイツ人が町を占拠した時、彼らはヴェンド人を甚だ侮つていたので、出て行くヴェンド人の背後で門を塗り込めてしまい、市壁に新たに門を開けたのだ、と。征服されたヴェンド人という種族に対するこうした侮蔑の例は今日に至るまで次のような習俗に残っている。ドイツ人とヴェンド人が雑居している多くの村村では、ヴェンド人が教会に入る場合、小さな脇扉からしか入れない。

三五三 駆除された鼠ネズミ

ノイシュタット・エーバースヴァルデには鼠(17)がない。昔は鼠ネズミどもが数知れず跳梁ちようりょうして、町の粉挽こなひき小屋を喰

い尽くさんばかりだった。そこへ一人の余所者が現れ、この害獣を未来永劫魔法で追っ払って進ぜよう、と申し出た。この伎倆への謝礼はのちほどでけっこう、まず二ターラーを先渡し、八ターラーは一年後、と。この提案にノイシュタット市参事会は全くもって満足だったので、男は伎倆を振るった。ハーメルンの鼠捕り男のように笛を吹いたかどうか伝説は言及していないが、いずれにせよ抜け目なくやってのけた。なにしろハーメルンの鼠ども同様ノイシュタット<sup>II</sup>エーバースヴァルデの鼠どもも群れを成して粉挽き小屋を後にしてフィノウ川に跳び込む気になったのだから。鼠は皆もろともに沈んでしまい、一匹も生還しなかった。さて、男は一年経つとまたやって来て、残金を請求した。そこでノイシュタット市参事会は賢明にもハーメルンの子どもたちがどうなったかを思い出し、喜んで鼠獵師ときっちり勘定を済ませた。その後鼠どもは町にも町の粉挽き小屋にも二度と現れる気配はなかった。

### 三五四 駆除された蛇

プレントラウでもそうだが、ベルナウの町<sup>(48)</sup>の周囲では、耕地の遠くに至るまで、ある鐘の音が響き渡る限りの範囲には一匹の蛇もいない。プレントラウではある男が蛇どもを魔法で追い払ったのだ。この男は死刑の判決を受けていたのだが、このお蔭<sup>かげ</sup>で処刑を免れた。一方ベルナウでの蛇駆除の状況は異なる。市民の鐘の铸造<sup>(50)</sup>が決まると、こうした場合の慣わしで、金属製品ならどんなものでも醸出して欲しい、と市民たちの許に回収班が廻って来た。また人人は自主的に不要金属を持ち寄りもした。さて鑄物師の親方がこれらの金属を溶かしていると、一人の老婆がやって来て、「わたしには喜捨する金物の持ち合わせはないが、ちよいとした品を進せる。これだつて莫迦<sup>ばか</sup>にはならないさ」と言い、生きたまま携えて来た蝮<sup>まむし</sup>と山棟蛇<sup>やまかがし</sup>をどろどろに溶けた金属の中に入れさせ、「できた鐘が鳴っ

たら、「町の外の」畑や原っぱにうようよしてゐる蛇どもはすぐさまみんなどっかへいなくなるだろうよ」と付け加えた。そして、なるほど、その通りになつたのである。鐘の音が鳴り渡る限りの範囲の蛇どもは、いやもうびっくり仰天、仲間みたいに焼け死ぬのを怖がるかのように慌てふためいて正反対の方向へ逃げ出した。随分歳月が経つてからこの鐘に鱗が入り、もはや鳴らすことができなくなつた。それからというもの、蛇どもは群れを成して戻つて来た。そこで市参事会が一六四九年に鐘を鑄直させたところ、なんとまあ、鑄直された鐘が鳴らされた途端、蛇という蛇は——毒のあるのも無いのも——悉くまた改めて逃げ散つたらしい。

### 三五五 蛙の沈黙かえる

オラーニエンブルク(註)近郊のシュヴァンテは高貴な騎士レーデルン一族の本拠である。周囲一帯には殊の外蛙が夥しい。なにしろ近くに広がる森林は沼や池に事欠かないからだ。ある時レーデルンの殿が重病になつた。それなのに蛙どもがよりよつて例の叫び声でなんともおぞましい騒ぎを夜な夜な繰り広げたので、病人はついぞ一夜も安眠できず、容態はどんどん悪化した。ところである日のこと貧者が一人、館にやつて来て、物乞いをした。奥方は手ずから施しをして、涙を流した。そこで男は「なぜお泣きあそばす」と訊いた。奥方が、夫が病に伏せており、恢復は難しいこと、蛙の合唱のせいで束の間のまどろみも味わえないから、と答えると、物乞いのいわく「蛙が黙れば殿様はご本復とのことでしたら、お助け申し上げます」。——そのような奇蹟を起こすことができれば、一人で担げるだけ袋一杯の穀物をあげよう、と約束された物乞いは城から出て行くと、辺り一円蛙の声が城まで聞こえる範囲をぐるりと歩き回り、秘法を駆使した。するとなんと、さしも喧しかった蛙の大合唱がびたりと止み、

二度と口を開かなくなった。そこで貴人はやっと眠りに落ち、熟睡できたのである。そして貧者は袋一杯のライ麦を貰い、別れ際に、「百年は大丈夫でしょうが、それ以上ではありません。——そうしたら他の者がまたやってみるかも知れませぬが」。

シュヴァンテの蛙どもは現在相変わらず黙りこくっている。蛙にとつてはなんとも煩わしいことだが。百年はまだ過ぎていないが、もう間もなくだ。時時一匹二匹が声が出せるかどうか試してみようとするが、すぐにまた、いまだ時節にあらず、と思い返し、口をつぐんでしまう。しかし百年が終わったら、ああ、蛙どもは歓喜してどんなにまあどんちゃん騒ぎをやらかすことだろう。シュヴァンテの皆様、どうかお楽しみに。

### 三五六 テーゲルにはお化けが出る

——「おれたちは世間を啓蒙してやったのになあ。

悪魔の下司めときたら規則など眼中に置きおらん。

おれたちはとても利巧なんだが、それでもテーゲルにはお化けが出る」。

老大家ゲーテは『ファウスト』の中で臀部見霊者なる御仁にこう嘆かせている。さよう、テーゲルにはお化けが盛んに出没したのですぞ。テーゲルとはテーゲル村のことではなく、そこに建っているかつての大選帝侯の狩りの館——その名をテーゲルの館という——を指す。ここには前世紀（「十八世紀」末、ホルターガイスト）末、ホルターガイスト霊が棲みつき、夜も昼も狼藉の限りを尽くし、館の住人は安らぐ暇とてなかった。この妖怪は最初のうちはその天性に従い騒々しい音を立てていたが、次いで人人に石を投げるようになった。その上ご丁寧にもこれらの石は極めて熱く、どうやら地獄の

竈かまどから直行して来たらしい。それからまた部屋部屋をびしりびしりと鞭を鳴らして回る音が聞こえた。こういうしだいでこやつとのつきあいは決して楽ではなかった。このお化けは火を相手にそれこそ危険な火遊びをしたし、食料品にもちよつかいを出さずにはいなかった。ときたま姿を現すこともあり、大きかったり、ちっぽけだったり、黒衣だったり、白装束だったり、単独だったり、二人だったりしたが、三人連れというのがお好みだった。時あたかも啓蒙主義がいとも華やかに活動、全盛を誇っていた頃のことだったが、ベルリン市中はこの噂で持ちきりで、社交界のどの一座サイクルでも話題といえればテーゲルのお化けばかり。これを論じて何冊も本が書かれた。——そしてやつとこさつとこの件くだんのお化けは消え失せた。どこへ行ったものやら皆目不明。テーゲル湖に呪封されたのだ、と唱える人人もいたが、皮肉な連中はこう言い張った。この小さくささやかな狩りの館の当時の所有者、名高い出版業者ニコライ(56)がこやつを自分が主幹である諷刺雑誌「アルゲマイネ・ジツェ・ヒェリオリオテイク」(57)に封じ込めたのであって、テーゲルのお化けは以後この雑誌の中でやりたい放題に暴れ回っているのだ、と。

### 三五七 ベルリンの女魔法使いたち

一五五三年ベルリンに性悪な女魔法使(58)いたちが住んでいた。この女どもは霜と雪、氷と雹ひょうを作り出すことができ、それを使って果実を滅茶滅茶にしたりした。ある時近所の女性から幼い子どもを一人盗み、これを殺して細切れにし、呪われた魔女の釜でぐつぐつ煮た。子どもを失くした母親が不意に女どもの家に入って、釜の中をひよいと覗くと、行方不明の愛児のちいちゃな手足が目に入った。そこで黙ったまま家を出て、市参事会にこの兇行を訴えた。市参事会はすぐさま下役たちを遣わして女たちを急襲、逮捕・拘引した。いかなる意図でこのような煮物をしてい

たのか、と厳しく訊問された女たちは、まず嵐を醸<sup>かも</sup>して、その後氷の張る恐ろしい寒さを招き寄せ、摘果前の果実を台無しにしてやるつもりだった、と白状した。そういうことをしようとしたご褒美として、彼女らは市門から櫓<sup>たぐら</sup>で連れ出され、道すがら灼熱のやつとこで皮肉を掴<sup>つま</sup>む拷問に遭<sup>あ</sup>い、市外の刑場で生きながら火炙<sup>ひあぶ</sup>りとなった。

こうした魔女にして悪魔の可愛い情婦は他にもベルリンに二人いて、一時期ある旅籠屋<sup>はたごや</sup>に一緒に泊まっていた。彼女らはめいめい手桶一杯の水を前にして、これを掻き回し、黒い粉をばらばらと投げ入れながら、なにやら訳の分からない呪文を唱えた。旅籠屋の亭主はこの女どもを全く信用していなかったので、壁に覗<sup>ぞ</sup>き穴を開け、何をやらかしているのか、こっそり盗み見した。すると一人が言うには「どっちにする気だえ。小麦かいな。葡萄<sup>ぶどう</sup>かいな」。「両方どっちも」と相手の返辞。「で、いつにするんだえ」と最初のがまた言う。「明日の朝うんと早く、露が降りる前に」と片方。それから魔女連は寢床に横になった。そこで亭主は女たちの部屋に忍び入り、眠っている女たちに手桶の中身を浴びせ、「両方どっちも」と叫んだ。すると途端に水は氷となり、女たちを閉じ込め、樹皮のように体をくるんだので、二人は凍りついて窒息してしまった。一方小麦畑と葡萄山に被害は無かった。

### 三五八 妖怪刈り取り人夫

一五五九年、燕麦<sup>えんばく</sup>の収穫期のこと、シュブレー河畔<sup>59</sup>のケルンの町近郊で摩訶不思議かつ奇怪至極な幻影が目撃された。突然畑に男たちが十五人現れ、だれが雇ったわけでもないのに、刈り取り人夫として行動した。それから間もなくこの十五人に更に十二人が加わった。最初の連中からしても異様な外見だったが、後から増えたのときたらずっと恐ろしかった。なにしろ最初の十五人はとにかくありきたりの人間並に頭を持っていたが、後の十二人に

は頭がくつついていない上、なんとも身の毛がよだつ、おぞましい恰好かっこうだったのだ。これら二十七人の刈り取り人夫は両手で大鎌おおがまを構え、凄すこい勢いでぎくぎくとばかり燕麦に切り込んで行ったので、本当なら刈られた燕麦の束が累累と横たわるはずだったが、茎一本倒れはせず、燕麦は依然元のまま。その上彼らに踏みつけられても穀物は一向折れたり曲がったりしなかった。この奇妙でぞっとするような出来事の噂は王宮にもベルリン市にも喧伝され、何百もの人人がこれらの刈り取り人夫を見物しようと出向いて来た。こうした中には肝っ玉のあるところを示そうと恐れ気もなく刈り取り人夫らに近づいて、あれこれ質問する者もいた。いわく「あんたがた、どこから来たんだね」。いわく「あんたがた、何なんだい」。いわく「あんたがた、だれにこんな仕事を仰せつかったんだ」。——しかし男たちはいずれの問い掛けにも答えず、燕麦畑の中をずんずん刈り進むだけだった。そのうち最も勇敢な連中が更に接近、刈り取り人夫たちの体を手で掴つかもうとしたが、相手はさながら影のようにするりと抜け出てしまい、燕麦刈り取りとは見掛けだけの不毛な作業を間断なく続行した。こういった幻影は数日眺められたが、その後刈り取り人夫たちは姿を消した。かかる事件がめでたい兆きざしであるわけではない、とは世間おしなべての見解だったので、選帝侯ヨアヒム二世(60)は、この訳の分からぬ現象が何を意味するのか裁定するよう、マルク一円からこの上なく学識豊かな聖職者を召集した。聖職者たちは長い間聖書、預言書、黙示録もくしりくの中からかの現象に適用され得るようなさまざまな箇所を考察、探索、発見した。そうした章句の内、まるで見当外れのものもありはしたが、かなりはうまく当て嵌はまり、結局のところ、これは刈り取り人夫の姿をした恐ろしい死がその穀物(「人間」)を薙なぎ倒す大疫病が襲来するとの予兆であろう、ということと一致した。しかしながらこの予言は実現せず、疫病の流行はなかった。

三五九 聖フベルトウスの牡角鹿<sup>ヘルシュ</sup>

先の話に登場した敬虔な選帝侯ヨアヒム二世の身に起こったことである。一五七二年侯がベルリン近郊に拡がるケーペニツクの曠野<sup>あれの</sup>で狩りをしていたところ、一頭の堂堂たる牡角鹿<sup>ヘルシュ</sup>が目にと留まったので、すぐさま追跡に掛かった。駒を疾駆させている時、侯はふと父ヨアヒム一世<sup>(61)</sup>——その叡智と温良さと尊敬すべき齡<sup>よわ</sup>のゆえにネストールと添え名された——の逸事を思い起こした。父はこれを所も同じケーペニツクの原で体験したのである。扈從<sup>こじやう</sup>を引き離して一人きりになっていたヨアヒム一世に強大な牡猪<sup>おすいのし</sup>が突然襲い掛かった。勇敢な獵人たる選帝侯は野獸に立ち向かい、携えた猪槍<sup>しじやり</sup>を喉の真ん中に突き刺した。ところがなんと、獸の口の中から焰<sup>ほのお</sup>が噴き出し、侯が握っていた猪槍の木製の柄がぱつと燃え上がったのだ。猪は反転して行ってしまったが、追いついた伴の者たちは主君が燃えた猪槍を手に茫然としているのを発見した。この話を選帝侯ヨアヒムは子息によく語ったが、その後一年半して亡くなった。こうした出来事を思い返していたネストール・ヨアヒムの子息の前に不意に例の牡角鹿<sup>ヘルシュ</sup>が立ち塞がり、次いで背<sup>そむ</sup>を向けた。するとなんと、あのあらゆる獵師仲間の守護聖人(「聖フベルトウス」<sup>(62)</sup>)がかつて見たのと全く同じく、輝く十字架がその両の枝角の間にあるのを侯は目の当たりにしたのである。そこで侯は、獵人フベルトウスがしたように、下馬すると跪<sup>ひざまず</sup>いて祈った。牡角鹿<sup>ヘルシュ</sup>は忽然と消えた。この幻影は侯が間もなく逝去することを警告したもので、彼はその翌年没した。その後牡角鹿<sup>ヘルシュ</sup>の姿を見た者はいない。

ケーペニツクの曠野では夜分しばしば狩りのぞわめき——唳<sup>りやうりやう</sup>と響き渡る角笛、犬どもの吠え声、ぴしりぴしりと鳴る鞭音、獵人の叫びなどが聞こえる。とりわけミュッゲル山中やその彼方に。もつともだれが獵をしているのかさっぱり分からない。



## 三六一 強者ヨツヘム

選帝侯ゲオルク<sup>(64)</sup>の治世当時、ベルリンにヨアヒム・フォン・シャペロウという貴族が住んでいた。この人は途方もなく強かつたのでだれもがただ強者ヨツヘムと呼んだ。体軀はまるきり巨人のようではなかったのだが、彼と格闘して勝てる者はいなかった。どこか外国の王侯がベルリンの宮廷へ来たことがある。その供回りにばかりかく力も極めて強い男がいて、やはりだれもこの男を負かせられなかった。王侯は男の強さを殊の外選帝侯に吹聴し、これほどの者はまたとありませんまい、と自慢した。「ふうむ、結局のところ我が方のシャペロウならそちらの力持ちと張り合えましょうな」と選帝侯。かくして王侯がたは互いに小樽四つ——これは二オーム<sup>(65)</sup>に相当——の葡萄酒を賭けた。勝つた方の家臣の主君がこの葡萄酒を貰うということだ。二人の闘士は競技の場に入った。大きい外国人と小さいけれどまことにがっちりしたブランデンブルク人である。闘いが始まり、ちよつと揉み合つたとみるやシャペロウは巨大な敵方を骨も微塵になれとばかり床に投げ飛ばした。相手がなんとか起き上がろうとすると、強者ヨツヘムはぐいと捉まえ、その両手を厳しく取り拉ぎ、さつと担ぎ上げて、窓辺に運び、窓から外に投げ出そうとした。しかしながらこれは選帝侯が止めさせ、シャペロウの骨折りに報いるため、自身宮廷の酒蔵から報償を持つて来るよう命じ、一度に運べるだけの葡萄酒を遣わす、と言つた。強者ヨツヘムにとつてこんなありがたい話はない。彼は酒蔵に下りて行き、酒樽を見渡すと、怯めず臆さず手を伸ばした。選帝侯とその賓客が城の中庭に向いた張り出しに立って、中庭を見下ろしていると、勇ましいヨツヘムが酒蔵に通じる階段から姿を現した。彼は地下であらかじめ小樽二つの栓を抜いておいたのだが、別のたつぷり入つた小樽一つを右脇に、もう一つを左脇に抱え、更に栓を抜いておいた小樽の栓穴に指を突つ込んで右手で一つ、左手で一つぶら下げた。普通は男が一人で小樽半量

分を運べればそれで上上なのである。殿様がたはシャペロウの滑稽ないでたちを見て大笑いだったが、彼の大層な膂力に驚嘆しもした。そこで選帝侯は下の中庭へこう叫んだ。「そちは悪魔か、シャペロウ。それにしても余の賭けの儲けをそちに運び出されては、いったい余の分には何が残る」。「いやあ、殿下」とヨアヒム・フォン・シャペロウは上へ向かつて叫んだ。「それはお蔵に置いてあります」。

### 三六二 でっかい富籤

ベルリンに貧乏な靴職人がいた。あるユダヤ人がこの男に長靴だか短靴だかの代価として現金でなく富籤を一枚押しつけた。男は籤の紙片を窓敷居に置いて、それきり気にもしないでいた。日曜が来ると、男は女房と二人きりで散歩に出掛けた。いろいろ都合もあつたので、子どもたちは家に残したのである。子どもたちは紙切れを糊で貼り付ける遊びを始め、そのための紙を探し回り、窓敷居の富籤を発見、「わあい、絵だ、絵だ。これ持つて、他の絵と一緒にお部屋の戸に貼らなくっちゃ」と声を挙げた。そこでその通りにあいなり、富籤はあまり綺麗じゃない方(「籤の裏側」)にたつぷり糊を塗りたくられ、名高い武将の肖像や一隊の兵士の図などといった、既に部屋の扉をごたませに飾っている安物木版画の数の傍にべったり貼り付けられた。休み明け、靴屋は仕事の用で外出したが、やがて息せき切つて家に駆け戻り、目をぎらぎら光らせて窓辺に突進、例の紙切れを取ろうと手を伸ばした——が、何もない。「どこだ、どこだ、どこだ、富籤は。おれがここに置いといたあの紙切れをどこへやった。ええい、ちくしょうめ」。——いやもう、おかみさんと子どもたちはぶるぶるがたがた。靴屋は怒り狂つて、踏ん張り革をおつ取り、大変な修羅場が持ち上がりそうになつた。その時末っ子のお利巧な小娘が父親の手に縋り、怒

らないでね、と言いながらおすおす部屋の扉を指さした。富籤はちゃんと無事にそこに貼り付いていた。「あれまあ、こりゃ風が吹いてあそこまで飛ばされたのかもしんねえ。おめえは黄金きんみてえな子だよ」と靴屋は子どもを抱き上げて接吻くちづけし、踏ん張り革を放り出した。ところが、富籤はしつかりくつついていて、どうしても剥はがれなかった。水で湿してみようかとも思ったが、そんなことをしたら薄い紙が台無しになりかねない。富籤に当たった幸運な靴屋——というのは抽選ちゆうせんでこの籤が特等になったからだ——はひとまず気を落ち着けると、扉を蝶番ちやうばんから外し、これを背中に担いで、抽選が行われた市庁舎に出掛けた。こうもでっかく重い当たり籤が運び込まれたのにはだれもかれもびつくり仰天したが、万事規則に叶かなっているので、当たり籤の持ち主の扉はただちに賞金計算台に使われた。その後当該靴屋はベルリンの市壁ツァルシュユールーゼ通りに小綺麗な家屋を新築、その戸口の上に、自分が、町の門を担ったかの英雄サムソン(67)ながら——もつともサムソンの方はその後悪い籤を引き当てたわけだが——部屋の扉を背負って運んでいる図を描かせた。この家屋は二十五番地にある。

### 三六三 花フレイシエンタルの谷

ベルリンとオーダーブルフ(68)の間に茫漠ぼうぼくと拡がる森があるが、古いにしへの世ここには町があり、その痕跡がいまなお見られる。しかしながらこの町の発祥、存続、衰退については言い伝えも年代記も存在しない。ただありし日の外壁、街路、市門の名残である巨大な残骸が苔むしているだけ。夜ともなればとうの昔に荒廃してしまつた遺跡の上を鬼火イカヒどもが踊る。この町は花フレイシエンタルの谷という名だった由。そして時時特定の夜、謹直な市民たちが住まう壮麗な姿が再現されることがあるとか。湮滅いんめつした古き町ブルーメンタールの領域をかつて縦横わたに亘わたつて計測した人がいる。そ

れによれば、市門は四つ、大通りはシュトラウスベルクの方向に向かっていた。壁を廻らした広場が四つ、教会が一つ、城塞が一つ、市庁舎が一つ、修道院が一つあった。町の中央には三つの巨大な石塚が鎮座している。数百年以前には市壁がまだ男の背の丈ほどの高さ立っているのが見えた、というが、今日では何もかも芝と草に覆われ、地所には太い樹木の数が聳えている。この往昔の町のために広大な森林地全体がブルーメンタールと呼ばれている。

### 三六四 鎧武者たち

一五五五年のバルトロメウス祭の日のこと、キュストリンにこんなことが起こった。中央広場に突然二人の鎧武者が出現したのである。彼らは全身甲冑に身を固めており、手に手を取って広場をぐるりと回った。一方天には奇怪な前兆が示された。大いなる戦いが繰り広げられ、空中には轟轟たる喧噪と阿鼻叫喚が満ち満ちた。やがて二人の鎧武者のうち一人が不意に悲痛な絶叫を挙げるのが聞こえたかと思うと、二人ながら見守る人人の眼前から消え失せ、上空に展開されていた激戦の光景も雲に閉ざされた。こうした徴が何を意味するのかだれにも分からなかった。これには皆恐れ戦き、さまざまの災厄が起こるに違いないと予言したが、ベルリン近郊における例の妖怪刈り取り人夫出現後と全く同様で——つまるところ何も変事はなかった。これに続く数年キュストリンでは夜空に燃え熾る深淵が現れ、無数の焰が揺らめき、二つの炎炎と輝く柱も見え、「災いなるかな、災いなるかなキリスト教」と叫ぶ声が天から降って来た。——ベルリンでの話と同じく、しばらくしてキュストリンにも二人の呪われた嵐の魔女が在住、忌まわしい魔法袋を用いたことがある。この者たちの悪行をしばしば非難したさる牧師が埋葬さ

れた時、彼女らは霞あられや電ひよう、雷鳴や稲妻をともなつた恐ろしい嵐を起こしたので、人人は最後の審判がもうすぐ訪れる、あるいはもう来ている、と思つたほどだつた。そうこうするうちこの年老いた魔女兩人に嫌疑が掛かり、拘引された。通例に従い、初めは穏やかに、次いで拷問による訊問が行われ、結局二人は、自分らは確かに嵐を召喚した、例の牧師は悪魔と結託していたのでその魂が悪魔に連れ去られたのだ、と世間が思い込むようにそうした、と白状した。かくして彼女らは「法に叶かなつた断罪を受けた」、すなわち火炙あぶりになつた。

### 三六五 アダム派の踊り手たち

マルク・ブランデンブルク、テューリンゲンその他のドイツ各地、ボヘミア(DSB六八〇)、オランダ(「IIネーデルラント」)に一時代、父祖アダムは衣服を身に着けなかつた、との理由で、裸で歩き回る宗派が起つたことがある。この宗派にはいろいろ奇妙なしきたりがあり、他のキリスト教徒を憤慨させ、侮蔑された。自らアダム派アダミッチと称した。彼らは舞踏をも行つたが、その際すっぽんぼんの丸裸で悠悠と跳びはねた。こうした集団がノイマルクのヴィルヒョウ村にも現れたが、提琴ヴァイオリン弾き二人と麦酒店ビールの主人二人を引き連れ、彼ら自身は二人づつ七組になつていた。麦酒店ビールの主人と提琴ヴァイオリン弾きも裸で歩かなければならなかつた。これが行われたのは聖なる聖霊降臨祭プフィンクステン当日——すなわち主しよが神をないがしろにしたコールベックの踊り手たちを懲こらしめた(DSB三一四)のと同じ日——だつた。アダム派の男女は村の外の空き地で冒瀆ぼうとくの輪舞を開始、荒唐しく、罪深く、浅ましい踊りぶりを見せた。しかし三度目に取り掛かつた時、晴れた空で稲妻が一閃、霹靂へきれんが轟き渡り、にわかには夜のように真つ暗になつた。男女の踊り手たちは恐怖の余り血も凍らんばかり、どんどん体が冷え固まって、だれ一人——アダム派の踊り手も

麦酒注ぎも提琴弾きも——手足が動かせなくなった。そして彼らは皆同時に裸の石と化したのである。こうして一世紀、また一世紀とそのまま立っていなければならなくなり、ごくゆつくりとだがだんだんに地中に沈み込んでいく。現在も相変わらず二脚尺から二・五脚尺の高さだが、輪の真ん中にある麦酒店の主人たちはまだ二肘尺残っている。輪の外に位置している楽士たちの手には今なお提琴がそれと見て取れる。民衆は現代に至るまでこれを石の舞踏ないしアダムの踊り手たちと呼んでいる。

アメリカには現在いまだに、かつてのアダム派のように、踊ったり道化のごとく跳びはねることによって神を崇めているのだ、と思ひ込んでいる。夥しい宗派が存在する。

### 三六六 藁の橋

藁束を背負った若い修道士の木彫りや陶器の像を見たことがある人はけっこういるだろう。藁束の上からは悪戯っぽい顔つきの小さな頭が、下からは一對の小さな足が突き出されているあれである。頭も足も別に小人のものではない。——思ひも寄るまいが、ある伝説がこの図柄のもととなっているのだ。

かつてウツカーマルクに天国の門(16)という名の修道院があつた。その近くにモーダーニッツとジドウなる二つの湖があり、これらを結ぶ水路には小さい橋が架かつていた。ヒンメルスフォルテン修道院からリッヒェン村へと通じる道はこの橋を経由。昔むかしヒンメルスフォルテン修道院にまだ修道士たちがいた頃のこと、修道士の一人がリッヒェン村に愛しの恋人を持っていた。彼にとつてこの可愛い子ちゃんは天国への道を開いてくれる現世の真正な天国の門と思われた。そういうしだいで、娘っこを藁束に隠し、背中に担いで修道院へ連れ込もう、

と心を決め、娘にも納得させた。ことはすこぶるうまく運んだ。もつとも藁束は普通の物よりいくらか重かったけれど。さはさりながら、運が悪けりや寢床の中でも腕を折る、とか。かの橋にヒンメルスプフォルテンの峻厳な修道院長が立っていて、藁束を担いでいる修道士が目に入ると、相手がやって来るのを待ち受けた。そこで若き修道士は汗をかき始め——一つには荷が重かったからだだが、怖さのせいも半ば以上——修道院長にいと恭しくお辞儀をした。「何を運んでいるのかな、我が子よ」と修道院長が訊いた。「藁束でござりまする。院長猥下」と修道士は震える声で返辞。「どこで手に入れたのだ」。「かしこのリッヒェン村にて。院長猥下」。「したが、そなたにはいかにも重いように見受けるのう、我が子よ。わしが代わりに運んであげよう」。「おお、とんでもござりませぬ、院長猥下。さようなことをどうしてお願いできませんよう」。「いやいや、そうでない、我が子よ。我らは修道士仲間ではないか。聖書にも記されておる。『なんじら互いに重を負へ』、とな」。懊惱その極に達した若き修道士はもはやいかんともなしがたく、担い紐を外し、藁束を地面に滑り落とした。二本の可愛いあんよが地面に触れたとたん、藁束は走れる限りの速さで橋から跳び出し、リッヒェン指して一目散。修道院長はというと、十字を切つて、「悪魔ヨ、立ち去れ」。こはいかなる徴ぞや」と叫んだ。修道士は院長の足許にくずおれ、「お許しを、院長猥下。この藁束は喜捨されたものではござりませなんだ。やつがれはあれを——盗みましたので」と大声を挙げた。修道院長は、そのような大罪を二度と犯さぬよう、修道士を穏やかに叱責した。ところで橋の下にはたまたま一人の農婦がいて、盗んで来たとかいふ藁束が命を授かって元来た方へと走り去つた奇蹟を目撃、人人に触れ歩いた。以来リッヒェンとヒンメルスプフォルテン間のこの橋は藁の橋と呼ばれるようになった。

同類の伝説がハールツのさる修道院についてもある。

## 三六七 金喰い女

一五三六年のこと、フランクフルト・アン・デア・オーダー<sup>(79)</sup>で摩訶不思議な事態が起こった。漁師のマルクスなる男の娘ゲルトルートはレブス<sup>(80)</sup>で女中奉公をしていたが、悪魔の情人になった。地獄の色男は颯爽とした軍人に化けて彼女の許に通つて来た。どうもゲルトルートの身心はとことんこの悪魔に乗っ取られてしまったらしい。そしてほどなく彼女に憑いたのは金の悪魔であることが明らかになった。壁であれ、机であれ、長腰掛<sup>ベレンチ</sup>であれ、人の上衣であれ、袖であれ、角帽<sup>ペレット</sup>であれ、彼女が掴むと、そこから貨幣が出て来るのだ。手に一杯ということもしばしば。当時流通していた銀貨や銅貨——グロツシエンやらプフェニヒなどで、ゲルトルートはこれをすぐさま口へ持つて行き、ばりばり噛み砕き、もぐもぐやつて呑み込むのだった。そこでレブスから故郷のフランクフルトに連れ戻され、ご祈禱<sup>キトウ</sup>を挙げてもらったが、帰つてからもこうした奇怪な金喰い行為を続けた。縫い針や留め針も嗜食<sup>シヤク</sup>。また突然高地ドイツ語を話すようになった。以前はいつもお国ぶりの方言しか喋らなかつたのに。悪魔祓<sup>ハハ</sup>いのために祓魔師<sup>ハツマシ</sup>が招聘<sup>シヨウメイ</sup>されたが、お聖水も咎<sup>トガ</sup>も、ご祈禱<sup>キトウ</sup>も呪文も効果が無かつた。アンドレーアス・エーバ<sup>(81)</sup>ト殿がシレジアのグリューネベルクからわざわざヴェイツテンベルク<sup>(82)</sup>のルター博士にこの絶望的症例に関して問い合<sup>(83)</sup>わせを行い、博士の勧めに従つて悪魔に憑かれたゲルトルートを自分の説教の聴衆の中に連れて来させ、全会衆とともに金喰い女のために祈りを捧げたところ、グリューネベルクの御仁に敬意を表してやつと悪魔がゲルトルートの身心から立ち去った。もつとも教会堂では泣いたり喚<sup>わめ</sup>いたりの一騒動があつたのだが。結局この哀れな娘は自分が何が起こつたのかまるで知らずじまいだった。そしてぶりかえすこともなく、その後多年に亘り元氣<sup>もとけ</sup>潑<sup>はつ</sup>瀾<sup>らん</sup>、フランクフルト・アン・デア・オーダーで奉公し続けた。

三六八 不思議なキリスト像

ヴィッテンベルクにはなんとも不思議なキリスト像がある。どんな人よりも一時ツォール大きいように見えるのだ。並の男より身の丈の高い男がこの像の前に来ると、像は一時ツォールまた一時ツォールと伸び、更に一時ツォール男より高くなる。反対に小柄な男が歩み寄ると、像は男の身長に近づけて縮んで行くが、一時ツォールだけ高いところで止まる。異なった背丈の者が数人近づいても、それぞれの目には自分自身の身長より一時ツォール高く見える。こうなるのは、人工の技芸によるものか、神の御業みわざのしからしむるところか、いまだにだれも解明できない。

三六九 ヴィッテンベルクの幻影

一五五三年の夜、燃える男が城の塔の尖りとんがが始まる辺りをしばらく歩き回った。信頼の置ける人人がたくさんこれを目撃、事実であることを保証している。その後間もなく同じこの城に雪白の衣装を纏まとった三人の男が出現、ほぼ三時間徘徊はいかい、手摺てすりと胸壁から身を乗り出し、城の中庭を見下ろし、次いで黙りこくったまま厳めしい面持ちで君侯の部屋部屋を悉ことごとくく通り抜けた。これを見た人は多い。

同じ年、ザクセン選帝侯モーリッツ(85)が死を迎えたジーファースハウゼンの戦いの直前、ヴィッテンベルク城の大広間に明るい焰ほのおが燃え上がった。下からこの焰を発見した人人は、火事を消し止めよう、と急いで駆け上がったが、上に来てみると、何事もなかった。しかしまた下に降りると大広間が炎炎と燃え熾さかっているのが見えたのである。この現象は三度起こった。

## 三七〇 おぶさる小人

田舎歩きをしていたトルガウの縄作り職人が、故郷へ帰ろうと旅をしていたところ、野原で一人の少年に出くわした。この子は地べたに坐りこんで、遊戯盤を前に置き、これで遊んでいた。道は広くもなく、この小坊主はほば道の真ん中におみこしを据えていたので、縄作りは跨ぐはずみに盤に足をぶつけてしまい、石が幾つもずれた。すると少年が「なんだっておいらの遊びの邪魔をするんだ。見てろ、父ちゃんがおめえに礼をするぞ」と叫んだ。そして石を並べ直したので、縄作りは道中を続けた。ほどなく——さよう百歩も歩いた頃、おっそろしく歳を取った白髪の爺さんに追いついた。爺さんは疲れきった様子だった。そして「わしゃあ、えろうくたびれとる。おめえさま、わしを背負っちゃくれめえか」と声を掛けた。縄作りは顎が外れるほど大笑いした。「ちびすけどん、おれを駱駝扱しようつてのか。なんだっておれがこんな老耄れ猿公を担がにやあならねえんだ」と。「背負わにやならんぞ、背負わにやならんぞ。わしのちいぢやな倅の遊びの邪魔をしたでな」と小人は怒鳴り、ひよいと縄作りの背中に跳び乗った。いやもう、その重いこと、重いこと。しかし、どんなに揺すぶっても、この爺さん小人を振り落とすことはできなかつた。こうしてトルガウの市門の前まで背負って行ったわけだが、そこまで来ると小人は胡桃の袋みたいにとんと落っこちて、ぱっと消え失せた。縄作りは家へ帰つたものの、腹が立つやら怖いやら疲労困憊するやらで体を壊して病気になる、十日後に息を引き取つた。縄作りにはまだ年少の息子がいたが、これがもうどうしようもないほど嘆き悲しんでいると、その父親に遊戯の邪魔をされた例の男の子がやって来て「泣きわめくのは止しにしな。おまえのお父つっあんはあれで良かったんだよ。おまえもおまえのおつ母さんもうすぐ後を追うはずだ。だってな、これからプロイセン、マイセン、ロイセンじゃあごく悪いご時世になって、死んだ

者より増しだなんて連中はなくなるからさ」。——一六六九年にまさにそれが起こり、それからまたすぐ戦争沙汰の数がたつぷりこれら諸地方に荒れ狂った。かのブランデンブルク選帝侯が歩騎合わせて二万二千の軍勢を引き連れて進発、ドイツに侵攻したフランス軍と相まみえ、ドイツの他の諸邦も選帝侯と同盟したからである。

### 三七一 悪魔の蹄鉄

温良デアムロスマニエツクの公グと添え名された選帝侯ヨーハン・フリードリヒ(80)が虜囚とりこにされた会戦で有名になったミュールベルクとトルガウとの間にある小都市ベルゲルンでのこと、ある麦酒店の女主人——売る麦酒は極上だが、その量りよときたらきちきちきつきつき——に奇妙奇天烈きてれつな事件が起こった。ベルゲルンではその昔——現在もそうかも知れない——殊の外旨い麦酒ビールが醸造された。トルガウ産麦酒についてはこんな俚諺りげんがあったもの。いわく「トルガウ産麦酒は貧乏人のマルヴォアジー葡萄酒(90)なり」。ひとえに、言うに言われぬ芳香と風味があったからで。ベルゲルン産麦酒にもこんなラテン語の銘句が当てられた。いわく「べるげるん産麦酒ハナベテノ人ノ体ニヨシ(91)」。一方ウィッテンベルクの麦酒は郭公鳥クワックと呼ばれ、この鳥の喉は時時醸造者連に長く伸ばされ過ぎる、と誇そられた。ところでかの麦酒店の女主人だが、悪魔のご機嫌を損ねたせい、あるいは悪魔と仲良くし過ぎたためか、どちらとも分らないが、とにかく、ある夜更け、悪魔は馬の姿に変えたこのご婦人にうちまたがって鍛冶屋かじやの作業場に乗り付け、騒ぎ立てて鍛冶屋を起こし、「この馬に蹄鉄ていてつを打つてくれ」と命じた。鍛冶屋は急いで仕事に掛かったが、馬の右前脚を持ち上げたところ、麦酒店の女主人——これは鍛冶屋の代母だった——は相手の耳にこう囁ささいた。「ねえ、名付けの父さん(92)、そんなに慌てて仕事をしないでいいのよ。——いやもう、死ぬほど仰天した鍛冶屋は「あれまあ、

名付けのおつ母さん、あなたに乗つかつて来たなあ悪魔なんで」と応じた。「もちろんそうよ」と馬。「かつきり丁度、かつきり丁度。入れ過ぎはだめ、入れ過ぎはだめ」。——こう言われて震え上がった鍛冶屋は手足が強張り、蹄鉄を取り落として作業場に跳び込み、なんとも長い間がたがたあげく、「釘がどうしても見つからねえ」、それから「炭がどうしても燃え上がらねえ」と言った。そうこうするうち雄鶏が刻を告げると、ひゅっ、馬の乗り手と牝馬はかき消えた。翌日女主人は病気で寝床から出られず、長いこと恢復しなかった。店先には普通の麦酒店の看板の代わりに蹄鉄が四つぶら下がり、だれかがこれを取り下ろそうとしたら、両手をしたたかに火傷した。

同様の伝説はラステンブルク近郊のシユヴァルツェンシユタイン村でも語られている。同地の話では、鍛冶屋は本当に蹄鉄を二つ（馬の前脚の蹄に）嵌めてしまったそう。蹄鉄は次の日麦酒店の女主人の両手に打ち込まれているのが見つかった。苦勞して外したそれらは教会に奉納された。

### 三七二 代言人になった悪魔

一人の傭兵がマルク地方を旅していた。ある町で煩って寝込んだので、所持の膨らんだ財布を旅籠のおかみに預けた。おかみはこの金が欲しくて堪らなくなり、夫と心を合わせて、頬被りを決め込むことにした。やがて傭兵が恢復して、旅を続けようとし、預けた金を返してくれ、と頼んだ。するとおかみは、「この人はありもしないことを言い立てるよう。いったいどういふつもりだい。あたしやあそんなお金のことなんぞまるきり知りやしない。あなたから何も受け取つてない」と叫び立て、さんざんに傭兵を罵つた。傭兵の方も「なんてまあ破廉恥な泥棒女だ」と言い返した。すると旅籠の主人が出て来て、妻に加勢、傭兵を家の外へ突き出した。傭兵は剣を革鞆から引き抜



いて扉に切りつけ、家を攻撃。すると亭主が「ご近所の衆」と大声を挙げ、すぐさま何人もがわらわらと馳せ集まり、傭兵は高手小手に縛られて、牢獄に連行された。やがて裁判が行われ、住居侵入および都市の安寧秩序壊乱の廉により、公権力ニ基ツキ、お情け深くも斬首刑に処されそうな成り行きとなつた。すると悪魔が囚人の許に出現、こう語り掛けた。「おぬしがこのわしに身を委せれば、おぬしの首を救つてしんぜる。応じなければ、この訴訟、おぬし自身の命が代償だて」。しかしこの傭兵は悪評高い傭兵仲間一般とは違つて正直律儀だつたし、自分が潔白なことはよくよく心得ていたので、悪魔のお蔭で自由の身になるより、十回も死んだ方が増しだ、と返答した。悪魔は傭兵がこれから味わうことになる死の苦しみを述べ立てたが、一向甲斐もなく、相手は毅然とした態度を貫いた。そこでとうとう悪魔はこう申し出た。「それでもわしはおぬしに力を貸そう。一切条件抜きでな。おぬしから何の約束も礼も要求せん。悪魔つてものはおぬしが考えるほど真つ黒げじゃなくて、公平無私にもなれるつてことが分かるだろうさ。それでな、おぬしが判決を受けるために法廷へ呼び出されたら、弁護士を、弁論してくれる代言人を付けてくれ、と言うのだ。わしは白い羽根を飾つた青い帽子を被つて近くにおる。他の弁護士連のうち混じつての。あやつらはたいいて哀れ憫然たるごろつき手合いの弁護士ノ悪魔野郎よ。だが、このわしはそうじゃなくて弁護スル悪魔ちゆうわけだな」。——傭兵にしてみれば悪魔のこうした親切な申し出が神様に背くものとは思へなかつたし、だれだつて自分の首は可愛いから、提言をありがたく受け入れ、代言人を付けて欲しい、と主張、青い帽子の御仁を指し示した。悪魔は裁判官一同に向かつて慰懃にお辞儀をすると、発言をお許し戴きたい、と求め、これが認められると、反対弁論を開始した。訴訟全体をもう一度最初からお洩いし、実直な傭兵の信頼が旅籠の不実なおかみになんともむごたらしく裏切られたのだ、旅籠の主人は偶然口論の現場に合合わせたわけではなく、邪な女房とあらかじめ示し合せており、もともと待ち構えていたのだ、と言明。それから更に、旅籠の主人

——ちなみにこの男は妻とともに法廷に出席していた——の方がまず傭兵に肉体的暴力を振るって、家から放り出したのだが、傭兵はだれにも襲い掛かったわけではなく、ただ所持の剣で宿の扉に切りつけ、取るに足らぬ傷を何箇所か付けたに過ぎない。これはひとえに彼に加えられた不正不義に対する正当な怒りに駆られたからである。それゆえ公権力の行使は全く彼に適用せられるべきではない。少なくとも死刑などとはもつてのほかである、と述べ立てた。

すると旅籠の主人が立ち上がり、悪魔に対し荒っぽい言葉遣いで憤懣をぶちまけた。いわく。なにもかも手練手管で、掟の捻じ曲げもいところである。たぶんだれもがこんな諺を知っている。「弁護士なんて悪魔の焙き肉〔＝悪党〕」(左側の傍聴人からはぶうぶう、右側からは喝采)。万一、自分ないし妻が傭兵から金を預かった、あるいは、傭兵がそういう金を持っているのを見たのであれば、自分(旅籠の主人)を生きながらただちに悪魔が連れ去るがいい。賢明なる当法廷のお歴々がもつとも至極なご判断をよも惑わされることはあるまいが、こんなやつのだわごとなんぞで……。ここで裁判長が旅籠の主人に、言葉を慎むように、と命じなければ、悪魔殿はまだまだ結構な肩書をたっぷり浴びせ掛けられたことだろう。傭兵の代言人はにっこり微笑んだ。そしてもう一度裁判官一同にお辞儀をし、再度の発言を求めた。「わたしの依頼人は」と悪魔は口を切った。「所持していた財布の特徵をその中身と合わせ、わたしにかように説明してくれました。当該物件は鹿革製で、長いこと使用したため綺麗とは申せませぬ。その締め紐には真鍮の小さな環が附いております。財布の中にある金貨は以下の通り。ブランドンブルク選帝侯が鑄造させた五十五枚のターラー銀貨。肖像はヨアヒム公。ライン・グルデン金貨が六枚、シユレットンベルク銀貨が二十枚、ザクセンの小グロッシエン銀貨が十三枚、更にフェリペ王の肖像が附いたイスパニアのドブロン金貨が一枚、バイエルン公リヒアルトとライン宮中伯の二ドウカート金貨がそれぞれ一枚、それか

ら記念牌が二つありまして、一つはマクシミリアン皇帝の、もう一つはカール五世の肖像です。最後に銅の模造貨幣が一箇。これにはこう記されております。『苦境にありても信義を破るなかれ。むしろ死に赴くべし』とな」。

並み居る傍聴人は代言人の素晴らしい記憶力に驚嘆した。一番びくりしたのは傭兵自身だった。なにしろ自分の財布の中身について悪魔にこれっぽっちも言いはしなかったし、貨幣のことをそんなに詳しく憶えてはおらず、どんな文字が刻まれているか気付かなかったのだから。一字も読めなかったもので。

「幸いにも裁判官諸賢が」と代言人は続けた。「信頼できる廷吏を兩名、この罪が無いとか申す旅籠の主人の家にご派遣あそばすなら、そのお使いたちはこうするだけでよろしい。宿の後屋にあるどんづまりの煙突ですが、その右側後ろ、三肘尺と一指尺の高さのところに手を突っ込んでみなされ。そうすると両手一杯の胡桃があらましよう。この胡桃の下に我が依頼人のかの財布が見つかるでござろう」。

旅籠の女房は一声悲鳴を挙げ、亭主は膝をがくがく震わせ始めた。二人とも血の気が引いて白堊のような顔色になり、へなへなと跪いた。廷吏たちが出発すると、悪魔いわく「裁判官の皆様、ごめんこうむって申し上げます。ご一同の慣わしには背きますが、手っ取り早い審理にいたしましょうや。この悪人どもが白状したも同然なのはやつらのいたらくでお見通しのはず。——さて、わたしは男を一人頂戴しなくては。泊り客か宿の主か、どつちかをな。女の方はあなたがたにお任せする。ありゃあわたしの手にゃ負えん。ところで旅籠の主人はわたしに誓いを立てましたな。それは皆様全員が証人だ」。こう言ったかと思うと、旅籠の主人を鉤爪で引つ捉え、もろともに窓から外へ飛び出し、中央広場の空高く連れ去った。どこへ連れて行ったのかはだれにも分からなかったが、容易に類推できた。こうして傭兵は正しいことを認められ、所持金をも取り戻した。

## 三七三 最後のグロッシエン銀貨

マルク地方もポーランド方面でのこと。飢饉ききんの際、一人のひどく貧乏な小百姓こびやくしやうが貴族の夫人の許もとにやって来て、そのどんぞこの窮乏ぶりを訴え、「わしんとこじやあ女房は煩わづらっているうえ、小さい子どもがうじゃうじゃおりますが、連中にもわしにも食い物がまるきしありましねえ。どうか奥方様、お慈悲をもちまして、穀物を一シェツフェル(註)、後払いで譲ゆづってくださいまし」と頼たのんだ。奥方はきっぱり断り、現金と引き替かえでなければ穀物はあげられない、と言いった。男は引き下がり、物乞ものこいや借金に努め、大骨折おほほねつて掻かき集めたが、どうしても一グロッシエン足りなかつた。ともあれまたまた貴族の夫人のところへ行き、持もつて来た金子きんすを並べてみせた。「だけどもまだ一グロッシエン足りないじゃないの」と奥方は冷ややかに言い放はなつた。貧乏人は、どうかお願いだからこれで穀物を売うって欲しい、この金を集めるにはこの上ない苦勞くるわうをした、もう一グロッシエン手に入れることなどできない、と哀訴あいそ願ねがひした。けれどもとりつく島のあらばこそ、奥方は、どうしてももう一枚グロッシエン銀貨ぎんががなくなつては、と頑強がんきやうに譲らぬ。涙を流しながら引き下がくだつた貧乏人は腹はらべこのまままた物乞ものこいを始め——やつこのことで最後のグロッシエンにありつき、これを冷酷な女主人に渡わたした。ところがこの銀貨ぎんがが手から落ちたので、彼女は拾ひろい上げようとさもしく慌あわてて身を屈まめた。するとグロッシエン銀貨はおぞましい大きな蛇へびに変わり、手からするりと抜ぬけて奥方の腕うでに巻き付き、何度もひどく咬かみついた。その痛さといつたらない。「主しゅなる神よ」、「おお、神よ」といくら叫こゑんでも無益むえき。蛇は奥方の腕うでから離はなれず、絶えず咬かみ続けて苦しめたので、奥方は三日後狂くるい死しにした。

## 三七四 井戸の中の好運

トルガウ管区のシルダ(註)と申せば、この市民(註)一同が「シルダのお歴史」と呼ばれて有名なところ。この小さな都市は住民の愉快な言動のせいで世に遍あまねく知られているわけだが、一五三三年に以下のような事件が本当に起こった。同地に住まう市民のウルバン・エルムトラウトなる御仁は家の中庭に深い井戸を所有していた。もともと水量が乏しいので、もっと深く掘り下げたい、と思い、ヘムベルクという壁工にそれを請け負わせた。ヘムベルクは十一月十八日水面の上方に足場を組み、梯子はしこを掛けた。それから井戸の外へ上がって、朝飯を平らげた。しかし、どうしたって先に麦酒ビールを一杯引っかけなけりゃあ、また仕事に取り掛かるこたあできねえ、と思った。が、これは手許てもとにない。「で、飲みに行こうとした」。けれども鈍ハチを下に置き忘れたので、とりあえず取って来よう、ともう一度井戸に降りた。降りたとたん土が崩れて、井戸側の石が幾つも外れ、雷のような音とともに井戸が全壊、縁まで瓦礫がれきで一杯になってしまった。トルガウ中がびっくり仰天。「こりゃあそつとしておこうではないか」と賢明なるシルダのお歴史はのたもつた。「あの男はそのまま埋葬だ」。一旦はそれで片づけられた。ところが市参事会は市民たちよりもっと賢明で、会議を開き、延延と意見を交換したあげく、ついに次のような意見が通った。「まかりならぬ。井戸は掘り返して、埋もれた哀れなヘムベルクを引き揚げ、それからキリスト教徒として憩やすみうにふさわしい場所に埋葬しなければ」。これが決まったのが冬月(十一月)二十一日のこと。かくして漸おそく鉾山ほこやまのように掘削が開始され、縦坑たてあなが伸びて行つた。翌日の昼過ぎ、二時に人夫たちは大きな石に行き当たつた。この石の下に穴がぼつかり開いていたので、彼らは、これがどれほど深いか調べようと、棹さおを突っ込んだ。すると——「痛いたえ、おれの鼻だぞ」と悲鳴が上がって来た。これすなわち、埋もれた男はまだ生きていたのであって、この棹で不快な

探られかたを感じ、「おおい、後生だからこの冷たい穴の中から救いだしてくれえ、下のここはなんとも  
 ありがたくねえとこだ」と怒鳴った。これを聞いて、ヘムベルクがまだ生きていることが分かった人夫たちはしゃ  
 かりきに働いた。そこで夜の十時になると、男の姿が見えた。彼は梯子の下に立っていた。この梯子が落ちて来た  
 石から防いでくれたのである。けれども下半身は土に埋まっていた。ヘムベルクはこう叫んで来た。「女房に伝え  
 てくん、麦酒汁ビエアズプを拵こしらえておけて。なにしろおれは腹がぺこぺこなんだ」ところがこう叫んでいる最中人夫た  
 ちの足許で土が崩れ、どざりと男の上へ落ちて、改めてまたすっかり埋めてしまった。「これでもうおしまいだ。  
 仕事じまいにしようや」と人夫たちは言つて、のんびり井戸の外へ上がつて来た。しかしながら上にはシルダの市  
 長ヤーコプ・シュミット殿が立つていて、仕事を止めないよう命じた。いわく「この小さな町を種にして、ああだ、  
 こうだ、と与太よた噺ばなしがしこたま蔭かげで喋しゃべられておるが、これに加えて、シルダじゃあ井戸に人間を埋葬する、なんて  
 言わせたくない」。こうして望みはないまま掘り返しが再開された。けれども真夜中頃埋まっていた男に辿り着くと、  
 向こうは訊きいた。「麦酒汁ビエアズプの仕度はできてるかあ」。一同はびんびんしている男を地面に上げた。彼は四日、三夜と  
 半夜、しめて八十八時間井戸の中にいたことになる。そしてトルガウ産香味麦酒ツメルツビエで作った汁ズスを賞味し、神様を讃  
 え奉まつった。彼は神のいや高き奇くしき御力みを暗黒の中で身に沁みて知ったのである。詩篇八十八篇十三節(13)にあるよう  
 に。

### 三七五 豌豆石えんどういし

大飢饉だいききんの折、こんなことが起こった。マルク地方のある裕福な農夫が、まだいくらか穀物の蓄えがあったのに、

飢え死にするに違いない、と思込んだ。しみつたれな人間はよくふいっとこんな風にびくつくもの。そこで、穀物を増やして値段を下げさせたくなかったものだから、このごうつくばり、畑に豌豆を播くことにした。ただし、それもごくごくこっそりと。そして播きながら言うことには、

わしが播くのは豌豆だぞや。

神も世間も気付かぬように。

けれども本当に豌豆が必要だった隣人が、同様に豌豆を播いており、この文句を耳にして、畑にいる男に向こうからこう叫んで来た。

お隣さんや、このわしも豌豆をやはり播いておる。

だけんど、神様、世間の衆、どうかそれをば知っとくれ。

するとまことに不思議なことながら、隣人の農夫が植えた豌豆の種は芽吹いて嬉しげに青青となったが、ごうつくばりの種は畑土ごと石になってしまった。この石に変じた豌豆は今日なお存在し、いわば莢から取り出すように石化した畑土から豌豆を拾うことができる。莢そのものも巖塊から外れるが、これも石である。

もつとも、このような豌豆石はマルク地方ばかりではなく、テューリンゲンやヴェストファーレンにもある。テューリンゲン山地がフランケン地方に向かって下って行く山裾のアイスフェルトとクロックの中間にこうした

豌豆畑があるが、これに関する伝承は全く異なる。いやまた、形を変えた同種の伝説がパレスチナから聞こえて来  
もする。そもそもこうした言い伝えは、自然の不可思議な造形を素朴な幻想が詩的に解釈・説明しようとして納  
得した土地であれば、どこでもお目に懸かるもの。とりわけそうした幻想が力を発揮したのはあの石の国である。  
(DSB七二五)。(註)

### 三七六 ジュンデル巖と嘘の巖

悪魔というやつ、とかく巨石をいじくりたがるものである。オスナブリュック近郊にこの類の巖があつて、地  
面から一三英尺の高さにそそり立っている。農民たちはこう語り伝える。どこやらにあるなんとか教会を打ち壊す  
ため、悪魔がこの巖に鎖を結んで空中を運んで行こうとした。で、ある礼拝堂でも小手調べをしようとしたところ、  
清浄潔白な司祭が祈禱を捧げたので、悪魔は巖を落とさざるを得なくなつたのだ、と。農夫たちは今でも、ここ  
に鎖が繋がっていたのだ、と巖のその箇所を指す。彼らはこの石をジュンデル巖と呼んでいる。(註)

ハルバーシュタットの大聖堂広場には似たような巖がある。嘘の父である悪魔がこれを用いて大聖堂の建設に留  
めを刺そうとした。しかし棟梁がこうした意図に気付き、大聖堂が完成ししたい、その隣に居酒屋を作る、と大急  
ぎで悪魔に約束した。そこで悪魔は巖を投げ捨てた。いまなおこの巖には灼熱の親指の痕が見られる。その後棟梁  
は約束を守らなかつた。そこで石の名は嘘の巖という。

ガイスマール山地にあるミュンデン硝子製作所の近くにも、ある軍司令官が坐つた痕跡を残す巖がある。この将  
軍は自らの好運を疑い、勝利の可能性はこの巖が柔らかくなるほど少ない、と考えた。するとなんと、巖が柔らか

くなり、その上世にも不思議なことが起こった。

### 三七七 ヴィツテキントの城の数

ザクセン公〔「ザクセン族の軍司令官」だった英傑ヴィツテキント<sup>(19)</sup>、あるいはヴィドゥキントはミンデン地方の美しい山——ここからヴェーザー山地が始まり、この地方のある魅惑的な場所は<sup>ホルタ・ヴェストフーリカ</sup>ぐえすとふありあノ門と呼ばれる——に城塞を築いた。この城の名はヴィツテキント<sup>ブルク</sup>城〔「ヴィツテキントの城」ないしヴェキングス城<sup>(20)</sup>〔「ヴェキングの城」、またはヴィツティゲンシュタインという。ヘルフォルトのヴェレ川がヴェーザー川に流入するところにある川中島にもう一つ城塞が建っていた。更に三番目をヴィツテキントは今日のリュッベケ市の近くに設けた。この城の名はバビュロニー。ヴェストフアーレンではこの三つ全てに伝説が語られている。いわく。ミンデン近郊の城塞、あるいはミンデン自体は初めフィジゲンと呼ばれ、ヴィツテキントがキリスト教徒になった時、カール大帝〔「シヤルマーニュ」はそこに司教座を設けようとし、事実設けた。それだけの場所は充分あったからである。なにしろ昔の人たちは今日の人間より大きくて強かったが、今日の人間より遙かに僅かな場所しか必要としなかった。そこでヴィツテキントは司教に向かつてこう言った由。「ヴェーザー河畔の我がフィジゲン城は余にもそちにも同じ権利があるとし、余の<sup>マイン</sup>のかそちの<sup>ダ</sup>ものか争わぬことにいたそう」と。マインかダイン、つまりミン・デイン。かくして新たな司教座はミンデイン<sup>(21)</sup>と呼ばれるようになり、やがて後世ミンデンに発展したのだ、と。ザクセンの君侯一統発祥の城ヴェッティン<sup>(22)</sup>もヴィツテキントが建設したそう。ヴィツテンベルクの創設もやはり彼のお蔭<sup>かげ</sup>である。

前記川中島に築かれた城近くの深い森の中で、英傑ヴィットキンントは狩猟中白髪の子クリスト教僧侶に出逢った、といわれる。僧侶は彼に、キリスト教と永遠の神の御力を信じよ、と告げた。そこでこの異教徒の英傑が、その力の徴を示すよう要求すると、僧侶は神に祈りを捧げ、そのような徴を下したまえ、と願った。「この巖から水を逆らせてみよ。さすれば余は洗礼を受けようぞ」とヴィットキンントが叫ぶと、乗馬が棹立ちになり、前脚の片方の蹄で巖を叩いた。すると巖からどつと水が流れ出したとか。英傑は馬から下り、祈り、その後この聖なる場所に教会を一字建立した。やがてこの教会は山の教会と呼ばれるようになった。そして教会の下から今日なお滾滾と湧いている泉はヴィットキンツ泉(「ヴィットキンントの泉」という)。

さて雄雄しき戦いに満ち満ちた生涯を送ったヴィットキンントが死ぬと(シユヴァーベン公ガーヴァルトとの会戦で斃れた、と唱える者が少なくない)、その亡骸はエンガー——彼はここにも城を持っていた——に埋葬されたが、それからも多くの人間が彼の姿を見た。こんな言い伝えがある。ヴィットテンフェルトの会戦では勇敢な戦士がまことに夥しく命を失い、かの英雄はどうとうエラーブルフ指して退却した。軍の輜重隊には連れて行くことのできない女子どもが大勢いた。そこで「もぐれや、もぐれ(穴に入れ)、世間は酷いぞ」という諺通りになつてしまつた由。——そしてバビュロニー城まで来ると、城山の麓がぼっかり開き、ヴィットキンントは敗走の全軍および扈從の者全員もろとも山の胎内へ潜り込み、永久に呪封されたそうなる。時代はさまざまだが、彼が選り抜きの伴を従え、白馬にまたがり、ヴェーザー山地を騎行するのが見られた。彼はまた所有した城塞を訪れる。率いる軍勢が槍をきらめかせ騒然と行軍するさまも目撃され、更には軍馬の嘶き、角笛の響きも聞こえてくるのである。ヴィットキンントがバビュロニー城から進発するのは、戦が始まる徴だ、と住民は言っている。ローデンシュタイン城およびシユネラート城の類縁の伝説が流布しているわけである。それから「底無しの水溜まり」と呼ばれるヴェストファー

レンのある沼沢周辺では、夜、ヴィッテキントの軍勢が亡霊となつて出現、荒れ果てた廢墟はいきよとなつてゐるヴィーデーケス城フルク〔「ヴィーデーケの城」〕へと進軍する。

### 三七八 ヴィッテキントの墓と記念物

ザクセンの偉大な英傑ヴィッテキント——皇帝カール〔「シヤルルマーニユ」〕に対抗して自民族の自由を擁護したのは一人彼にのみなし得たことだが——が死ぬと、その墓は最初、彼自身が建立したエンゲルンの教会しつらに設えられた。しかしながら、その遺骨は生前の彼同様あまり休息を得られない定めだつたようだ。その後遺骨はエンゲルンからヘルフォルトに運ばれて粗末な櫃ひつに納められ、それからまたエンゲルンに戻つたからで。ともあれヴィッテキントの遺骨はすぐに聖人のものとして尊ばれ、その記念物も初期のドイツの公侯や勇者では他に類を見ないほど渴仰された。なにしろかつてザクセンの諸侯はおしなべてその名がヴィッテキントまで遡さかのぼることを誇りとしたものである。そればかりではない。昔日せきじつのバイエルン公、シュヴァーベン公、フランス王国カペー朝の諸王、オルデンブルク公国とデンマーク王国の支配者、サヴォイ公国の君侯も全く同様だつた。皆こぞつて、ヴィッテキントの子孫だ、と主張したのである。神聖ローマ皇帝カール四世（四）はこの英傑の墓石を崇敬し、修復させた。墓石の上部には十字架状の碑文と英傑の像——古代ローマ風で、真珠を鑲ちりばめた靴を履き、緋色の下着トウニカの上に宝石と星を一面に散らしたごく見事な外套マントを纏い、王冠に似た被り物かぶを被つてゐる——が刻まれてゐる。

## 三七九 ゴーストの宝物

ヴェストファーレンのゴースト<sup>(13)</sup>から程遠からぬところに廃墟<sup>はいきよ</sup>となった古い家屋がある。城跡とおぼしき壁が残っているのみ。昔の伝説によれば、中には鉄の櫃<sup>ひつ</sup>に入った莫大な宝物が、呪封<sup>じゆふう</sup>された乙女と一頭の黒犬に守られて、隠されているとか。いつの日にか、と更に伝説は語る。一度も女の乳を吸ったことのない外国の王子がやって来るにちがいない。そして乙女を救済し、宝物の櫃を我が物とし、それを燃え熾<sup>さか</sup>る鍵で開くことだろう、と。こうもはつきりと予言されているにも関わらず、さまざまな宝探したち、遍歴<sup>へんれき</sup>学生<sup>(14)</sup>ら、祓魔師<sup>ふまし</sup>等々の流れ者<sup>ヴアザレント</sup>連中が大勢宝物発掘に挑んだ。しかしいづれも失敗。なにしろ彼らは数数の奇怪な幻影を見せつけられ、ひどいあしらいを蒙<sup>こうむ</sup>って、再び試みようという気などさらさら無くなった。——ある時こんなことがあった。近くの村のうら若い娘が数匹の山羊の番をしていたところ、全くの偶然でこの崩れかけた壁に囲まれた内庭に入り込んだ。すると不意に一人の乙女がこの子に歩み寄り、「おまえは何をしているの」と問い掛けた。娘は「自分じゃ苺<sup>いちじく</sup>や桜んぼ、この山羊たちには餌<sup>えさ</sup>になる草を探しているんです」と返辞した。すると乙女は小籠<sup>こかご</sup>一杯の桜桃を見せて、こう言った。「この籠から桜んぼをお取り。でもね、二度とここに来てはいけません。さもないとおまえの身に良くないことが起こるからね」。女の子は仰天して、こわごわ桜桃に手を伸ばし、七つだけ取ると、急いで壁の外に出た。外に出てから桜んぼを食べようとしたら、どれも純金に変わっていた。——とところでかの乙女は夥<sup>おびただ</sup>しい姉妹たちと運命を共にしているのだという。彼女はいまだに救済されていないそうな。

## 三八〇 王女

上<sup>オーパー</sup>へッセンにクリステンベルク<sup>クリステンベルク</sup>の山なる山がある。頂きにその昔城が建っていて、王が住んでいた。王には素晴らしく天豊かな一人娘があった。王には敵がいて、これが軍勢を引き連れて来寇<sup>らいこう</sup>、王の城を攻囲した。そうしたある日、姫が外に目を遣<sup>や</sup>ると、森が一つ城を目指して押し寄せて来るので、こ<sup>こ</sup>う叫んだ。

父上、虜囚<sup>とりこ</sup>になられませ。

グリュエヴァルト<sup>グリュエヴァルト</sup>の森が迫ります。

ちなみに城攻めを受けていた王の敵はやはりグリュエヴァルトという名だった。つまり王の息女の言ったことは掛詞<sup>かごし</sup>になっていたわけ。さて彼女は極めて聡明だったので、父王は軍使として姫を敵陣に送った。交渉の結果、王女は束縛を受けず城から退去してよい、並びに驢馬<sup>ろば</sup>一頭が運べるだけのものを持ち去ることができる、となった。そこで姫は父王と他にかなりの財宝の包みをその驢馬に乗せ、自分は歩いて驢馬を牽<sup>ひ</sup>き、城から立ち去った。城から充分な距離遠ざかると、王女はくたびれたし、驢馬はもつとへこたれた。そこである気持ちの好い場所で立ち止まり、「<sup>こ</sup>こでちよつと休みましよう」と言った。——一行は元気を恢復<sup>かいふく</sup>すると、再び歩き始め、荒れ野を抜けて山地<sup>たに</sup>に辿り着き、そこに村を見つけた。そこで娘いわく「<sup>こ</sup>こに畑<sup>はたけ</sup>があるわ」。——一行はそこに留まり、城を造り、これをハッツフェルト<sup>ハッツフェルト</sup>と呼んだ。それからヴォルマール村の名だが、これは例の休息を取った場所から附けられた。

## 三八一 緑の科の木と枯れた科の木

ヴェストファーレンのガイセンベルク——この頂きにはその昔悪評高い盗賊ども、とりわけ隻眼でいつも鉄の胴着を纏っていたヨーハン・ヒュブナーが城塞を構えていた——の奥には三つの峰を持つキンデルスベルクが聳えている。かつてこの山上にも城があり、城はそのお隣さんのガイセンベルクの盗賊同様奸悪な騎士たちで満ちていた。ただしこちらは産出量の多い銀鉱を所有していて裕福だった。しかしながら、他でもないこの富のせいで彼らは傲慢不遜になった。テューリンゲンはザールフェルト近郊の金持ち村(D S B 五三八)の住民のように金銀の柱や玉で九柱戯遊びをしたばかりか、馬車の車輪ほども大きい分厚い菓子を白麴麩の材料で焼き、穴を開け、これに車軸を通したもの。飢饉の時節で、人人は麴麩にありつけなかったのにも関わらず。やがて騎士どもの冒瀆と罪業に対する神の寛容も尽き果て、応報が始まった。ある日の晩方、白装束の男の小人がキンデルスベルク城内に姿を現し、神を恐れぬ城の住人たちは悉く死滅するであろう、ただ二人ながら敬虔な生活を送っている末子と息女のみは命が助かるであろう、その徴として、明日の朝、城の厩で孕み牛が二匹の仔羊を産むであろう、と予言した。小人は、たわけたことを申すな、と嗤い飛ばされ、嘲りの裡に城から追っ払われた。翌日例の牝牛は仔牛ではなく仔羊を産んだ。皆ひどく驚き、怖じ恐れた。そして三日目、黒死病のような急激な疾病に襲われ、神を畏れぬ者たちは全て斃れ去った。生き残った末子は妹の婚約者である若い辺境伯と戦に赴いた。この妹にはガイセンベルクの盗賊騎士も——叶わぬ望みではあったが——結婚を申し込んだ。この騎士の名は黒馬の騎士としか伝えられていない。姫は黒馬の騎士の求愛を断り、こう言った。「わたくしの部屋の前に立つ科の木が枯れて、もはや緑でなくなるようなことがあつたら、おんみを愛してもするでしょうが」と。そこで盗賊騎士はひそかに緑なす科の木を掘り

捨て、代わりに枯れた科の木を植えた。それから、既に一度拒まれたのにまたしても姫の手を求めた。すると彼女は「わたくしはどうしてもおんみを愛することはできません。たとえ部屋の外が枯れた科の木で埋め尽くされましようとも」と応じた。そこで騎士は剣を抜いて姫の心臓を刺した。その日のうちに婚約者の伯爵が彼女の兄とともに戦から戻り、許嫁が殺されているのを発見、復讐を誓い、ガイセンベルクへ出掛けて行って、黒馬の騎士を討ち果たした。そして乙女の亡骸をその兄と一緒に埋葬、墓の畔に緑したたる科の木を植え、墓の上に大きな石を据えた。この石はいまだに存在する。

### 三八二 二つのグライヒェン城

ゲッティンゲンから程遠からぬ、とある山の頂きに、古グライヒェン、新グライヒェンと呼ばれる二つの城の廃墟がある。伝説によれば、遙かな昔、ザクセンの地からやって来た二人の伯爵がこれらの城を築き、やがてここを根拠地として周辺を抑圧・劫略したので、神聖ローマ皇帝オットー四世の時代、この地方の住民に攻撃・駆逐され、城塞は破却された。その後二人の伯爵はテューリンゲンへ向かい、その地に三グライヒェンなる呼称で知られる城を建設したのだ、とのこと。しかしながらこれは全て、伝説としてならおもしろい話に基づいているに過ぎない。(「こんな言い伝えもある」)。ゲッティンゲン近郊のこのかつては壮麗だった隣同士の城郭はエッティーケ・フォン・ラインハウゼンとエレ・フォン・ラインハウゼンなる二人の名門貴族の所有だった。兄弟の後者、すなわちエーレは雄雄しい家系の祖となった。その子孫の一人はヒルデスハイムの司教冠でその頭を飾っている。けれどもこの家系は遂に断絶し、二つの城郭は後にウスラール家の手に渡った。この一門は二系統に分かれた。一系統の首長は

四分の三の支配権を持ち、かつ古<sup>アルテ</sup>グライヒエンの城主、もう一方の首長は新<sup>ノイエン</sup>グライヒエンに住んでいたが、グライヒエン城の四分の一の支配権しか持っていなかった。こうした不均衡のせいで二人の殿はお互い親しみ合うことはできず、徹底的に憎み合った。そして憎しみが嵩<sup>こも</sup>じたあげく、矢で相手を射殺してしまおう、と決心するに至った。こうした忌まわしい考えを二人は同時に悪魔から吹き込まれ、憎しみの度も同じなグライヒエン〔Ⅱ〕「同じ」という意がある〕城主らは全く同じ日の朝隣人にして敵なる相手を片づけてしまおう、と考えた。悪魔はおのおのが相手の心臓に箭<sup>や</sup>を射込むように仕向けたので、彼らは、隣合ったラインの城に住んでいたかの騎士たち——兄弟だった、と言われる——(DSB九七)同様、両者とも死んでしまった。

### 三八三 プレッセ城

ゲッティンゲンから一時間半隔たったプレッセ<sup>ペッサ</sup>山の頂きにかつての山城プレッセ<sup>(16)</sup>の廃墟<sup>はいきょ</sup>がある。この城塞<sup>(16)</sup>についてはまことにさまざまな話が伝えられている。この城が築かれた時、子どもが一人城壁の中に生きながら埋められた。往古<sup>いにしへ</sup>の陋習<sup>ろうじゅう</sup>に従い、難攻不落にするためである。五十年前骨の入った小さな柩<sup>ひつぎ</sup>が見つかった。城の背後には地中深くまで掘られた巖井戸<sup>いわいど</sup>があり、井戸の内壁には城の内部まで通じる地下通路の入口がひそかに隠されていた。お蔭で敵軍に攻囲されても城から水を取りに行くことができた。ある雄雄しい騎士の一族はこの城にちなんで、プレッセの殿、と自称した。堂堂たる城郭は既に瓦礫<sup>がれき</sup>と化しているが、騎士の亡霊はかつての棲処<sup>すまか</sup>を警護している。ある壁工が山下で使おうと城壁から石を砕き取っていたところ、奇怪な轟音<sup>こうおん</sup>に驚愕、意識を失った。結局は蒼惶<sup>そうこう</sup>としてそこから逃げ出したが、二度と再び城址<sup>しろむす</sup>に登ろうとしなかったし、城の石材を欲しがろうとしなかった。プ

レッセの最後の殿はデイートリヒ四世で、一五七一年五月二十二日この人を以て一族は死に絶えた。それからすぐさまプレッセ城はブラウンシュヴァイクとヘッセン間の不和の林檎（「争いの種」となり、数数の抗争を閲して、とどのつまりこの城はハノーファーの領有に帰した。かつてプレッセ山の地表には偉大で剛胆な騎士たちが居を構えていたわけだが、同じくこの地底にはちっぽけな小人族が棲んでいた。この小人族についてはまことに不思議な物語が伝えられている。

### 三八四 プレッセの静かな民

城山プレッセの地中深くには物静かな小人族が棲んでいる。人間に援助を惜しまず、善行を施す。自分の姿を見えなくすることができ、また、鍵の掛かった扉でも壁でも思いのままに通り抜けられる。かの深い巖井戸のところ、この静かな民が暮らす地下の国へ通じる主要な入口がある。ゲッティンゲンの大学生諸賢は両グライヒエンや殊の外優美なプレッセの城址を好んで訪れるが、一七四三年のこと、一人の学生がやはりこうしてゲッティンゲンからここへやって来た。この学生は本を一冊携えており、さながら絵のような樹木の快い蔭に取り巻かれている城の敷地にたつた独りなのが分かって、芝草の上に寝そべると読書を始めた。やがて車葉草、鈴蘭、接骨木の花などの甘やかな香りに包まれてうとうとした。長いこと眠っていた彼は、雷鳴と篠突くような雨にはっと目を覚ました。辺りは暗く、時折閃く稲妻がその青白い輝きで廢墟の瓦礫を照らし出すだけだった。学生がひたすら祈りを捧げていると——なにしろその頃は大学生たちもまだ祈るのが普通だったのだ。昨今はどうもほとんどやらぬやうだが——灯火が一つ近づいて来た。それを掲げているのは白髯の年老いた小人で、学生に、随いて来るように、

と言った。小人が若者を連れて行ったのは井戸で、井戸の中には木の足場があった。二人が足場に乗ると、これは芝居小屋のごく巧妙な迫りせのようにしずしずと下降し、水面で止まった。そこには洞穴がほっかり口を開けており、中は乾いていて清潔だった。そして小人はこう言った。「上の風が過ぎるまで、この乾いた場所にいるのもよし、それともわしと一緒に地下の住人の国へ行くのもよし、どちらでも好きになされ」。学生は、何も危険がないなら、後の方を選びたい、と答えた。別に怖いことは起らない、と白髯の小人が請け合ってくれたので、学生は案内人役に従って天井の低い狭い通路を抜けて行った。この通路は小人にとっては縦横ともに充分だったが、学生殿には到底快適とはいえなかつたので、どうにも気分が悪くなった。やつのことで通路から足を踏み出すと、なんと目の前には広広とした景色が開けた。さらさらと音を立てて流れるせせらぎが貫流し、中国風にちっほけで鶉小屋のようにとりどりの色を塗られた家家ばかりの村がそちこちに点在していた。これら可愛らしい家の中でも最も見事な一軒に二人が入ると、中には白髯しろひげ小人の家族がいて、ゲッティンゲンの神学生殿は彼らに引き合わされ、これに対し家族一同は物静かにお辞儀をした。次いで小人は家族を一人一人学生に紹介。まず父親だが、これは雪白の髪だった。同じく母親。兩人ともごく年老いているので、椅子に坐っているのがやつと、もはや立ったり歩いたりするのは叶かわなかつた。祖父と祖母。この二人はもう頭に一本の毛もなく、体は肉がすっかり落ちて骨と皮。そしてただ横よこになっていただけ。小人の妻——これはもう二十代は出ていて六十代に入ったところ(18)。三十から四十歳ぐらいの彼女の子。それから十四・五ほどの小さな孫たち。紹介が済むと、老いた祖父が二言三言歓迎の言葉ことばを述べ、上の世界から来たお客人は怖がらずに一渡り見物なさつていかれるがよい、と勧め、一番末の娘で、一靴尺シューレくらい(19)の背丈しかないけれど十三歳なのが、「お食事の仕度が調ととのいました」と告げた。学生は、この静かな小人族も食事を用意する、と聞いて嬉しかった。食膳は豪華だった。調度はと申せば、卓テラブル布クロスは火流布織り、皿と

匙<sup>スプーン</sup>は黄金<sup>ゴウゴン</sup>、小刀<sup>コウボウ</sup>と肉叉<sup>ニクシ</sup>又は白銀<sup>シロガネ</sup>といった具合。食事は上等で美味だった。飲み物については、学生には素晴らしい葡萄酒<sup>ワウイン</sup>のように思えたが、小人たちは、ただの水だ、と言いつ張った。食後小人の極老の父はこの地下の国の仕組みについて学生にいろいろ話してくれた。「わしとわしの一族はこの国の生まれながらの領主なので、全ての者が自ら進んで従ってくれる。この国には等族議會<sup>ワウラシヤン</sup>なるものは存在せず、支配者であるわしは大臣を持たぬ。大臣などというものはどれもこれも費用は高<sup>カ</sup>むし、役立たずだでな。この静かな国にあるのは平和と満足と好意のみ。だれもが命じられなくとも義務を果たす。不和も戦もいわゆる政治なるものもない。ここ地面の下では人心を攪乱<sup>カクラン</sup>する掘り返し屋〔扇動家〕など知られておらぬ。土竜<sup>ムクラ</sup>と蝮<sup>ヘビ</sup>と蜈蚣<sup>ケムシ</sup>は別だがの。もつともあの連中は元来この地下王国の一統ではないて。——老人がな何か語り掛けた時、嚙<sup>カミ</sup>と鳴り響く角笛が聞こえた。祈禱<sup>キトウ</sup>の合図である。皆両の手を組み合わせ、跪<sup>ヒツキ</sup>くと、ひっそりと低声<sup>コソコソ</sup>で祈った。暮れ方となり、大きな白銀の枝型燭台に載せた灯りが運ばれ、一同別室に移った。——これまで見聞きし、気付いたこと全てが大学生の好奇心をそそり立てたので、古きヘッセンの地底に抜がるこの良く整った国について、故人ニールス・クリム<sup>ニールス・クリム</sup>の掣<sup>ヒキ</sup>みに倣<sup>なま</sup>い、旅行記を執筆・出版、地表の世界の福祉に供するのは悪い考えではあるまい、と思ひ、覚え書き<sup>オモエガキ</sup>を書いては紙入れに入れ始めた。すると老小人はこれを妨げて、こう言った。「止めなされ。地面の上のあんたがたは幸せになることを一向覚えぬ。あんたがたは心得ようが悪く、従うより命じる方がよい、と思つておる。さあ、もう行くがよからう。そして神を憚<sup>はば</sup>り、主君と法律を尊<sup>た</sup>び、何人<sup>なんひと</sup>も恐れるな」。学生は、一旦招いた客人に、帰れ、と命じるとは妙だ、とは思つたものの、言われた通りにするほかなかつた。彼は更に幾つかの贈り物を土産に貰<sup>もら</sup>ひ、突然また井戸の上のプレッセの城跡に戻された。既に夜は壮麗に明け初<sup>は</sup>め、城の森には鳥の囀<sup>なげ</sup>りが響き渡つていた。学生が贈り物を調べると、莫大な値打ちの黄金<sup>おうごん</sup>と宝石であることが分かつた。これだけの富を上手に賢く活用すれば、生涯を送るのに充分だった。

三八五 シュヴェックホイザー山ベルクの話

ゲッティンゲン地方の三つの村村、ヴァーケ、ランドルフスハウゼン、マッケンローデ——これらはちようど三角形を作っている——の間に、やはり三つの丘陵があり、纏まとめてシュヴェックホイザー山と呼ばれている。この三つの高みの一つは、人の世ではよくあることだが、いくらか長く伸びており、長いシュヴェックホイザーベルクと呼ばれている。かつてこの山の頂きには騎士の城があった。その廢墟はいきよはもう残っていないが、右に名を挙げた三つの村の住民は、とりわけ復活祭オーステルンの初日にこの峰に登るのが好きで、打ち開けた自然と美しい見晴らしを楽しみ、これらの山山についての次のようなさまざまの物語や伝説を語り合う。昔この山の上には青銅の巨人像があった。カツセルのヴァイルヘルムヴァイルヘルムスヘーエの丘にあるヘラクレス像(註)のように中は空ろだった。異教の祭司たちはこの像をあらゆる詐欺・瞞まんぢやく着に利用、自身教えを説く代わりに、「像の中に潜り込んで」この金物の像に喋しゃべらせたそうなの。さてまた、山の胎内には小人族が棲すんでいた。こうした小人の一人がある羊飼いの娘と逢引あひびきしたが、娘の方はとうから頼み甲斐のある牧人を愛して、こんな手合いは真まつ平御免びごめんだった。わけてもこの小人、ちび助なばかりじゃない、体の前にも後ろにも目立つ癩しびの種(註)「II瘤」(註)が突き出ており、目は小さくって豚のよう、唇はひどく厚ぼったく、だらりとした垂れ耳、顔は灰色、魅力たっぷり(註)の緑の歯、鼻ときたら、昔話のあのシユピーゲルシユヴァーブ(註)なんぞのように、年がら年中ぐじゅぐじゅ濡ぬれていた。しかしながらこの小人には大層な美点(註)が一つあった。途方もなく裕福で気前が良く、贈り物をするとなるとはずむもないところ。そして、右に述べた娘っこ——名はロールヒエンといった——の母親はこうした贈り物(註)を突っ返したりしなかつたから、小人としては何か権利があるように思い込んだ。そこでとうとう単刀直入、老母にこう宣言した。「いいかね、あんたの娘はわしの家内になるんだ。

——もつともな、あんたがわしの名前を言い当てることができりやあ、話は別だて。わしが今度来た時、あんたにそれができりやあ、お伽話にある通り、わしは引つ込む。引つ込んでロールヒエンにやあ好き勝手に結婚相手を選ばせてやる。雛菊ひなぎく占うらないみたい、貴族キゾク、物乞モノグシい、靴屋シュールマフアスタの親方、牧師フアラさん、てな具合で」。こう言い捨てるなり小人はご機嫌斜ごきげんざめで引き揚げた。——こんな話、聞きたくもなかった娘むすめつこのおつ母かさんは、娘の恋人に泣きつき、あんたとあんたの可愛いあの子のために、後生だから小人の名前を調べ出しておくれ、と頼み込んだ。若者わかものはもちろん、なんとも難しい依頼だ、と思ったし、事実その通りだった。なにしろねえ、小妖精サイトリスはライン河一円からプロイセンだ、ロイセンだ、なんてところに至るまであちらこちらになんだかうようよいあるらしいし、諸邦しよばんを悉く訊ね回たずつても、こうした罰当たりのできそこないの名前を耳にしたためしはありやしない。——それでも羊飼ひつぎいはせつせつせつと捜し歩き、ある時姿を現した小人の後をそつと跟つけた。ところが小人はどこやらいの巖いわの傍そばまで来るとひよいと消え失なせた。羊飼ひつぎいがその巖いわに近づくと、巖頭がんとうには綺麗な赤い花が一輪咲いており、巖いわの中からトントンカンと錠打じやうつ響ひびきが聞こえてきた。小人は鍛冶かじ仕事に励みながらこう歌っていた。

わしが家さで、わしや金貨造る、

わしの名前はホルツリユールライン、ボンネフールライン。

あのおつ母かあがこりよ知つたなら、

娘のリユールラインをやらずに済むだて。

これをしつかり聞き及んだ羊飼ひつぎいは急いで恋人とその母親に知らせた。その後問もなく小人がまたやって来て、

「わしの名前が分かったかな」と訊いた。老母いわく「おやまあ、あたしにどうしてお名前が分かりましょう。もしかしてフィッツリプツリとでもおっしゃる」。「うんにゃ、そんな名前じゃねえ」と小人はがらが声を張り上げた。「それじゃペーター・ネッフエルト」と老母はなおもからかつて当てっこ遊びを続ける。「いいや、てんから違うだよ」と小人。「さあて訊くがな、これで三度目、そうして最後だ。わしゃあなんちゅう名前かの」。すると老母はこう歌った。

あんたの家で、あんたは金貨造る、

あんたの名前はホルツリユールライン、ボンネフールライン。

このお母あがそりよ知つとるで、

娘のリユールラインはあんたにゃ貰えん。

「悪魔が教えやがったな、このばばあ」と小人はかんかんに怒って絶叫、どこかへいなくなってしまう、二度と再び現れなかった。羊飼いはロールヒエンと結婚し、二人ともごく幸せになった。

### 三八六 穀棹打ちと小人

昔シユヴェックハウゼン城の納屋の打穀場で二人の穀棹打ちが豌豆を叩いて莢を取っていた。打穀が済むと豌豆を空中に投げ上げ〔て莢と分け〕た。ところがもうすぐ仕事が終わろうというのに、一向豌豆が積もっていない

のに気付いた。豌豆は空中に飛び、莢が落ちて来たが、打穀場には豌豆が何もなくあったのである。——「おい、どうもこいつは面妖だぜ」と一人が相棒に言えば、相棒も「こりゃあ悪魔がちよっかい出してやがるな」と応じて、投げ上げ円匙をこれまで豌豆を投げていた方向へ放り上げた。すると突然小人が一人彼らの前に姿を現した。こやつは大きく口を開けた袋を手にしていた。この袋の中へ豌豆がすっかり飛び込んでいたのである。しかし、投げ上げ円匙が命中して隠れ頭巾が小人の頭からもぎ取られたので、姿が見えてしまったわけ。そこでこの下男は突進して頭巾を奪い、もう一人は脇に置いてあった穀棒を引つ掴むなり、小人をぶん殴ろうとした。けれども小人は慌て逃亡、豌豆の入った袋と隠れ頭巾を残して行った。隠れ頭巾はその後長いこと城に保管され、城の殿たちはこれを使っていろいろな悪戯を働いた。

### 三八七 イーザング伯爵

シュヴェックハウゼン城の最後の城主には名をベルタというこよなく美しい娘があった。この姫に粗暴な荒武者のイーザング伯爵が求婚した。伯爵の城はベルルスハウゼンとゼーブルクの間(9)にあつた。彼もまたその一族の末裔で、これまで筆舌に尽くし難い非道を数多犯していた。麗しのベルタはイーザング伯爵の申込みなどから受けつけようとしなかつた。しかし強大な魔法使いだつた伯爵の母親がこの娘に呪いを掛けたので、彼女は夜な夜な城の林苑を徘徊し、「わたしを助けて、わたしを助けて」と息も絶え絶えにかきくどく羽目に陥つた。これはだれかが「神様がそなたをお助けになりますよう」と言つてやるまで続くのだとか。けれどもそれでもまだ救済されない、との説もある。ある女が再婚で儲けた男の子が、大学で神学を学んで聖職者となり、最初の説教をする

時まだ純潔であれば、ベルタを解放できるのだ云云。<sup>うんぬん</sup> やれやれ、これではベルタはかわいそうに極めて長い間浮かばれずにいなければならなかった。

イーザング伯爵はそれからというものですます兇悪になる一方で、罪に罪を、業に業を重ね続けた。ある日のこと料理番が彼の許に一匹の銀白の鰻——(実は白蛇)<sup>白蛇</sup>——を持って来た。伯爵はそれが食べたくて堪らなくなり、召使いのだれかれが僭越にもそれを味わう気を起こさないよう堅く禁じた。さて鰻料理を口にした伯爵が城の中庭に下りて行くと、夥しい声<sup>おびただ</sup>を耳にした。動物たちが喋るのが聞こえ、その言葉の意味が分かったのである。しかしイーザング伯爵が聴いたことは嬉しい内容ではなかった。雌鷄連のコッコッコは「さっさと、さっさと、さっさと行くのよ」。雄鷄は羽ばたいて、伯爵にこう啼いた。「逃げろや逃げろ。逃げろや逃げろ」。鳩たちのグルグルルは「お城、お城、お城が滅びる」。鷺鳥ども家鴨どもはお互いにギャックギャック。「イーザング伯爵、イーザング伯爵。おしまい、おしまい、おしまい。お館が今日建つているところ、明日になれば水、水、水、水」。伯爵は鳥たちがこう語るのを聴いて、ぞつと身の毛がよだつた。そこへ下僕の一人が息せき切つて駆けつけ、こう叫んだ。「殿、お聞きで。殿、お聞きで。犬たちがこう吠えております。『さあ、さあ、さあ。お館があつという間に、あつという間に沈んじやう、消えちまう』と」。——そこで伯爵はかつと激怒し、剣を鞘から引き抜いて怒鳴った。「きさまこそ犬めだ。わしは、あの白鰻を喰つてはいかん、と一同に申しつけたのに、きさまは喰らいおつたな。だもので、きさま、たわごとを耳にして、それを鸚鵡返しに取り次ぎおるわ。地獄へまいれ、このやくざ鴉のぺちやくちや野郎」。言うなり伯爵は下僕の頭を真つ二つにし、馬にまたがると城から抜け出し、(ゲッティンゲンとノルトハイムの間にある)小さな町ギーボルデハウゼンを目指した。その背後で百雷が落ちたような大音響とともに大地が震動し、伯爵の居城は地中に沈み、代わりに深い湖が出現し

た。イーザング伯爵はギーボルデハウゼンにあつた修道院に入り、もろもろの罪を痛切に懺悔し、その資産から莫大な寄進を行った。シユヴェックハウゼン城のかわいそうなベルタも後に——もつとも随分経つてからだが——飛び切り高德な若い聖職者によつて呪いを解かれた。

### 三八八 鐘の湖

ノルトハイムとウスラールの間のモーリンゲンの町に庭園があつて、中の小さな湖は生贄の池と呼ばれている。昔神殿騎士諸卿はモーリンゲンに拠点と修道院を持つていた。より後世にはこの池の傍に生えている柏の古木の下で裁判が行われ、有罪とされた者たちは正義の贖罪の生贄として殺されてから、あるいは生きながらこの池に沈められた。そこで生贄の池というのだ。この池は大きくはないが、大層深い。地下から湧く水源が幾つかあり、流れ込む水流は見当たらない。

神殿騎士館がまだ建つていた頃、修道士(「神殿騎士」)たちは新たに鐘を鑄造、教会の鐘楼に吊した。しかし通例の慣わしに背いて、鐘にあらかじめ洗礼を施さずじまいだった。神殿騎士たちがしたこと、しなかつたことはいくらもあるが、どちらも彼らの悪評の基となつてゐる。それゆえ降誕祭の深夜弥撒に初めてこの鐘が鳴らされた時、鐘は悲鳴のような響きを発し、鐘楼の穴からまっしぐらに小さな深い湖に跳び出した。そしていまだに湖底にある。かくして湖は鐘の湖とも呼ばれるようになった。降誕祭の夜ともなれば毎年この鐘はまるまる一時間鳴り続ける。天気が良いと、時折鐘が湖底に横たわつて緑金色に輝いてるのが見える。湖中に魚は棲んでいない。鐘のせいで生きていられないのである。——ハノーファーから程遠からぬリクリンゲン近傍には水が満ち溢れた底知れぬ地溝

がある。これぞまさしく悪魔の穴(66)ともいふべきものだが、昔悪魔がここに教会をまるごと落としした。その鐘が復活祭オイステルンと聖霊降臨祭プフイングステンに鳴るのがいまなお聞こえる。

### 三八九 ハイインリヒの隠れ処

ハールツの小さな町ギツテル(66)デ——ガッテルデと書いたりギツテルと発音したりする者も少なくないし、古い昔にはガテイラと書かれている——からシュタウフエン城ブルクの方向へ少し行つた、さほど奥まっていなところ(68)に名所がある。ここは鳥捕りデア、フイクラと綽名あだなされたザクセン公ハイインリヒの囿場おとりばだつた。王国の使節団が彼を捜し当て帝冠(68)を捧げた時のことである。ハイインリヒは奥方とともに緑の枝葉で覆われた静かな隠れ処に潜んでいた。使節団が近寄るのを見た公は何の用か分からぬまま、鳥網を引き絞るまで待つよう手で合図した。そこは今日に至るまでハイインリヒの隠れ処ゲルと呼ばれている。公はギツテルデ近くに小さな城を持つていた。これがあつた場所を土地の者はいまだに示し、あそこはお城デア、ブルクと申します、と言う。その傍の草地は皇帝カイザーのお庭なる名である。ハイインリヒはそこに庭園ヒツを設しつえていた。なおハイインリヒは、こうしたお気に入りの場所の他、周辺に狩猟用の館やぐたを幾つも持つていた。後世シュタウフエン城ブルクが築かれた山上に一つ、ギツテルデに一つ、ゼーゼンに一つ、ヘルツベルクに一つ、シャルツフェルスに一つ、シルトベルクに一つ、ハールツブルクベルクに一つだつた。フォーゲルスベルクと呼ばれる丘陵が後にフォーゲルスベックと唱えられるようになった村を見下ろす位置にあつた。ここでハイネマン・フォン・ギツテルデなる郷土ユンクが公をひどく悩ました熊クマを斃たおし、手厚い賞詞と褒美褒らを貰つた。ハイインリヒは熊が仕留められた場所に礼拝堂を建立したが、坊さんたちはそこで弥撒ミサを執り行つと祭壇の前に絨毯じゅうたんのように敷かれたこの

熊の皮の上を歩かなければならなかった。——後に皇帝ハインリヒ一世はまことに壮麗なシュタウフェン城ブルクを起工かつ竣工しゅんこうさせ、大いに巔ひびきにして滞在した。時が下るとシュタウフェン城ブルクはさまざまの内緒事の舞台となり、その城壁は極端な愛の快樂けらくと極端な愛の苦悩を相次いで見届けた。この城はブラウンシュヴァイク公ハインリヒ——愛人エーファ・フォン・トロット(10)をここに住ませ、匿かくまった——にとつてまことに気の置けない「ハインリヒの隠れ処」そのものになったのである。——また城山の絶壁の上に女性の足跡が深く刻み込まれているのがいまだに見える。ある麗人がしばしば長い間この場所に佇たずみ、焦がれる眼差しで最愛のひとの到来を、今か今かと見張つたのだ。昔日のドイツの名匠がこの上もなく美しいマリアの姿をそう描いたように、黄金色の巻き毛を靡なびかせた麗人の姿を見た、と主張する人人が今日になつてもまだ存在する。

### 三九〇 ゴスラールの悪魔トイムカスロフホの穴

ゴスラール(11)大聖堂内の柱の一つだが、下から教肘尺エシのところになんとしても取れない血痕が長い間あった。一〇六三年皇帝ハインリヒ四世(12)がゴスラールに行幸した折、ヒルデスハイムの司教ホルツイロとフルダの修道院長ヴィーデラートの間に、どちらの位が上か、より尊貴か、を巡つて席次争いが起こつた。この争いは、憤激した対抗者が二人ながら武装した男たちを教会内へ呼び寄せて、争いの的の座席を腕に掛けても手に入れよう、という事態にまで発展。悪魔マカが咬をかしたので、教会内で鋭利な武器を揮つての闘いが本当に始まり、列柱の周囲に血が飛び散り、教会の扉から庭にまで流れ出すしまつた。これには悪魔は心底こぞ満悦で、教会の壁をつついて穴を開け、闘士たちの前に姿を現し、彼らを煽あおり立て、この瀆神とくしんの呪わしい闘争で斃たおれた連中の魂を手中に収めた。こうした

殺し合いがやつとのもので止み——降誕祭クリスマスの三日間続いたとか。また一説には聖霊降臨祭プフィンツステンの前のことだった由——祭壇の司祭が「コノ日ヲ栄エアルモノニナシタマイシハ汝ナレ」と詠唱すると、自分が拵こしらえた穴に頭を突つ込んだ悪魔が、火のように赤い舌を腕ほどの長さ突き出し、「コノ日ヲ血ミドロノ争イニナセシハ我ワレ」と大きなながらがら声でがなった。——人人は後にその穴を塞ふごうとしたが、開いたままだった。聖水を注いでも、聖水で溶いた灰泥モルタルを用いてもだめだった。一旦閉じても、最後の石が再三転げ出してしまふのだった。ちょうどフランクフルトのメイン川に架かる橋の穴みたいに（DSB六九）。とうとうブラウンシュヴァイク公に懇請された何人かの棟梁がこの悪魔トイエルスコフホの穴に一匹の黒猫を塗り込め、最後の石を嵌はめる前にこう唱えた。「神の御名みなにおいて動かずにいるつもりがないなら、悪魔の名において動かずにいる」。——するとこの石は保もった。保ちはしたが、壁にはまたしても一筋裂け目が走った。この裂け目はやはり補修できなかつた。

ゴスラールの中央広場マルクトにある古風な市庁舎の前にとても大きな金属製鏡鉞シンバルがある。これは悪魔の造つたものだそう。な。真夜中にこれを叩く者は悪魔を呼べるとか。もつとも本当に悪魔が来るかどうかとは分からない。その響きは素晴らしく、町に火事が起こった時にはこれが打たれる。このように警鐘の代わりに使われている。

### 三九一 ランメルスベルクとラムベルク

ゴスラール近郊の資源豊かなランメルスベルク鉞山⑩には数多くの伝説がある。山の胎内には坑道の支柱として「ゴスラール全市よりもたくさん

の材木があるとか。皇帝オットー二世に仕える獵師でその名をラムという男がゴザなる妻を持つていた。皇帝はこの夫婦を大層重んじていたので、ハールツ山地縁辺⑪の地域——今日のゴスラール

とランメルスベルクが位置する部分を含むばかりか、更に遠くアンドレーアスベルクとハールツゲローデにまで及ぶ——をそっくり下賜した。夫妻はそこに幾つも都市を建設、採鉱をも開始した。ランメルスベルク鉱山の名はこの獵師に因むし、その妻ゴーザからゴーゼ川が、同じくゴスラール市と味わった者には名高い同市の麦酒ゴーゼが由来している。フランケンベルクの教会墓地にある聖アウグステイヌス礼拝堂内には夫妻の墓碑が見られる。獵師は片手に剣を掲げ、ゴーザ夫人は冠を被っている。初めて鉱脈の存在を発見したのは獵師ラムだった。一頭の牝鹿を追っていた彼は馬上では森の繁みに入れなかつたので、乗って来た馬を木に繋いで、自分は鹿の足跡を追った。戻って来ると、馬は足掻いたあげく値打ちのある鉱石を蹄で幾つも掘り出していた。ラムはこれらの鉱石を皇帝の許に持参した。

鉱山経営が始まると、悪魔も鉱坑を一つ手に入れた。その権利はあらかた悪魔のもので、銀が大層豊富だった。なにしろこうでもしなければ、こやつと契約した連中にやらなければならぬあした多額の金を稼げなかつたのでね。そういうしだい悪魔は坑夫たちをたつぷり働かせ、他の鉱坑経営者と同様毎週賃金を支払った。ところでランメルスベルクの産出物は全て一括売却——この遣り方を同地では惣管理と称した——後、総売り上げが鉱坑の持ち主の間で分配されたのだが、一度悪魔以外の経営者たちが「共謀して」悪魔を騙そうと考えた。これに悪魔はかんかんになり、自分の所有する坑道を崩壊させ、だれにも入れないようにした。そこで約千人が落下する岩石のため惨死した。崩落した箇所は今日に至るまで悪魔の鉱坑と呼ばれている。

ハールツゲローデを見下ろす「ランメルスベルクと」名前の似たラムベルクの山頂には一面夥しい巖塊が散乱している。土地の者はこれを悪魔の粉挽き小屋と呼んでいる。ある粉挽きだが、自分の風車小屋の位置があまり高くもないし開けたところでもなかつたので、風には決して事欠かないラムベルクの頂きに一軒欲しい、と思つた。

悪魔が彼になんとも素敵な仕組みの建物を約束した。いわく、たった一晚で、一番鶏が啼く前に造って進ぜる、その代わりおもしろおかしく三十年暮らしたら粉挽きの魂は悪魔のものとなるのだ、と。さりながら、この契約締結の際両契約者は双方とも見込み違いをやらかした。なるほど悪魔は風車小屋を仕上げたが、見せられた粉挽きは、まだ一つ石の碾ひき臼うすが足りないじゃないか、と指摘した。悪魔は碾ひき臼うすを取りに行こうと急いで立ち去ったが、宙を飛んで戻って来ると、眼下の風車小屋の屋根でもう雄鶏おんどりが刻とぎを告げた。これに恐ろしく腹を立てた悪魔は——粉挽きの魂たまごがよつぽど大事だったに違いない——ただちにできたばかりの仕組みをそっくり全部、風車の翼も、風車の輪も、回転軸も、運んで来た石の碾ひき臼うすで木っ端微塵みじんにぶち壊し、石臼自体もほとんどばらばらにしてラムベルクの天辺全体に撒き散らした。粉挽きは分別を取り戻し、今度は己おのが魂を神に委ね、二度と再び危険な高みに風車小屋を建てようとはしなかった。

### 三九二 聖ザンクトアンドレーアスベルクの鉱坑

ハールツ山地ザレヒル深くに山の町ザンクト聖ザンクトアンドレーアスベルクがある。この町は以前採鉱に恵まれていた。数ある鉱坑——残念ながら現在極めて多くが既に廢坑になっている——の中でも「聖ザンクトアンドレーアス」、「サムソン」、「カトリネ・ノイファング」、「大デア ヨーハン」そして「黄金の祭壇」が最も豊饒デア・ゲローセ・アルターだった。さほど豊饒ではないが綺麗な名を持つ鉱坑もあった。たとえば「曙モルゲンレデー」、「夕映えアイベントレデー」、「千万忝トイアーダルクない」、「天使の城エンゲルスブルク」、「三つの指環ドライ・リンゲ」、「葡萄の樹ヴァインシュトック」等等まだまだたくさん。鉱坑の中には山の精たちもいた。ホーエンシュタイン伯爵に仕える律儀者の坑夫頭——もう高齢で、髪も髭ひげも雪白だった——がこうした山の精ベルクガストの一人に出くわした。すると山の精ベルクガストは坑夫頭

にはっと息を吹きかけたのである。そこで老人はおかしな気分になり、自分ももうすぐ死ぬのだ、と思ひ込んだ。地表に戻ると、彼はキリスト教徒らしく間近な死の準備をした。なにしろ髪の毛も悉く抜け落ちてしまい、つるつるの禿頭になっていたことだし。——ところがなんと、命長らえたばかりではない。新たに見事な黒い髭と頭の毛が生えそろう、見る見る若返り、堂堂たる男前になった。そこでまたしても求婚し、子どもを四人授かり、極老になって漸く亡くなった。彼の子孫はその後長い間鉦山監督官としてグルーベンハーゲン採鉦場の指揮を立派に執った。

これはまた別の坑夫頭だが、この男は、採鉦量がたっぷりあった時期、大 ヨーハンと黄金の祭壇にある鉦脈豊かな採掘切羽の幾つかを取りのけておいた。いつか生産量が低下した場合補充に供しようと手を着けないことにしたのである。しかしながらこれに気付いた仲間、坑夫頭がこれらの切羽を己のために隠匿したので、と思ひ、横領着服の廉で告訴した。横領罪は当時死刑に該当したので、男は哀れにもさつさと片を付けられてしまった。斬首されるため処刑場に跪いた坑夫頭は、その前にこう叫んだ。「わしの無実がはつきり分かるよう、神様は御徴をお示しになるだろう。あれらの鉦坑に呪いが降り掛かれ。硝子の目と鹿の脚を持った伯爵が生まれ、生き長らえるまでなあ」。死刑執行人が剣を揮い、無実の男の首が落ちたが、胴体からは血ではなく二筋の乳が迸った。これこそ神が示した徴だったのであり、同時に遠雷のごとき響きが聞こえ、ために大地が揺れ動いた。坑夫頭がその名を口にした鉦坑〔大 ヨーハンと黄金の祭壇〕が崩壊し、もはや決して入れなくなったのだ。後にとうとう〔鉦坑の持ち主である〕伯爵家の御曹司が硝子の目と鹿の脚を持つて誕生、埋没した鉦坑から再び採鉦できるかと思われたが、望みはあえなく潰えた。この奇態な子どもは生き続けることはできず、息を引き取ったので、鉦坑は永遠に埋もれたままである。

## 三九三 シャルツフェルス城の精

ハールツのシャルツフェルス城は本<sup>(原)</sup>当の巖石城だったが、十一世紀ここにルッターベルクないしシャルツフェルトなる高貴な伯爵一族が居を構えていた。皇帝ハインリヒ四世の時代に生きたその家系の一人が美しい奥方を持っていた。皇帝はこの伯爵夫人が途轍もなくお気に召した。ところで城には帽子小人や鬚くちや小人的性格の家の精(「ココーボルト」)が一人棲んでいた。もつともその名は忘れられているが。この精はシャルツフェルスを巖から研り出し、築き上げる時に既に力を貸してくれた存在で、しばしば体つきのへんでこなちいちゃい爺様の姿で出現した。身なりは坑夫か土方といったところ。棲処は望楼だった。城の住人の許に現れるのは慶事の前か、凶事の前で、慶事が間近な時は生き生きとして嬉しそう、凶事が起こりそうな時はしょんぼりした様子なのである。そういう場合、姿を見られるのは厨房か中庭か厩だった。さて、いつのことか、伯爵と奥方がゴスラールで開かれた宮中御宴——皇帝に招待されたもの——から居城へ戻り、城門から中へ入ろうとした時、城の精が悲しげに目一杯涙を溜めているのを目撃し、凶事を予感した。その後間もなくシャルツフェルス一家と昵懇の間柄である修道士がペルデ修道院からやって来て、皇帝の使い、と名乗り、伯爵の主君たる皇帝が修道院で彼を待っている、と伝えた。どこか遠方へ伯爵を使節として派遣するためだ、と。伯爵がいなくなると、その後間もなく、偶然を装って皇帝が城へと登って来た。騎馬で狩猟の最中風に遭ったので避難場所を求めて、という口実。腹心のかの修道士も伴をしていた。こやつの手助けで皇帝は無邪気な伯爵夫人に対する浅ましい計画を実行に移したわけ。伯爵夫人の方は皇帝の臨御がこうもおぞましい底意があつてのことなどはこれっぽっちも気付かないでいた。けれども(「犯罪が行われると」)すぐさま城で恐ろしい騒ぎが持ち上がった。例の精が塔の屋根を剥ぎ取って投げ落とし、皇帝と

その幫助者である下劣な修道士がやらかしたことを高いところからそこいら中にわめき散らしたのである。更に精はこの坊主をせつせせつせと追っかけ回し、したたかに苛めたので、修道士はとうとうハールツの川オーダーの巖壁を見下ろす高みで縊死した。この場所は今なお汚辱の城と呼ばれている。皇帝は生涯己が所業を悔いた。その後精はシャルツフェルス城の塔に屋根があるのを決して許さなかった。なお皇帝ハインリヒがかように王侯らしからぬ態度で接したのは、ルッターベルクないしシャルツフェルト伯爵夫人ではなく——フォン・デア・ヘルデンなる名の騎士の夫人だ、と語る者も少なくない。

### 三九四 ニクサイと葡萄酒の穴

ツァインガルテンロツホ

かつてのシャルツフェルス城から一時間、オスターハーゲン村近傍に噂の高い洞窟がある。ここから流れ出す小川をヌーマという。この流れはときどき赤く染まる。これはある女の水の精の血なのだ。この女の精は諸所の他の女の水の精と同様人間に恋をしたので不幸になったのである。流れはやがて水の精の池と呼ばれる小さな湖を作る。その近くにある農場はニクサイという。ここで女の水の精は恋人——ある巨人の息子——と何度も逢引をしていたが、とうとう恋人の父親で残忍粗暴な山の巨人がこれに気づき、ひどく脅してこの情事を断ち切った。以来かわいそうに女の精はあの大きく恐ろしい水晶の洞窟に閉じこめられてしまい、いまだになんとかそこから逃れようとしている。こうした甲斐無い努力の際に彼女の血が洞窟——葡萄酒の穴と呼ばれる——から湧き出る水に混じるのである。ニクサイの近くに幾つか採石場があるが、ヴァルケンリート修道院は悉皆この石で作られた由。言い伝えによれば洞窟自体に莫大な財宝が隠されている。ただしこれを手に入れるにはなまじなことでは済



まない。これを企てて死を遂げた者は多い。山の精、山小人、さては山の修道士などが洞窟内を徘徊しているし、奇怪な声が諸所で響くし、さまざまな金属鉱脈が語り掛けるし、洞窟内は入り組んだ迷路になっているので滅多に戻って来られないし、迷わないで済んでも事故に遭うのだ。また五十年も経たないが、アインベックの男がやって来て、洞窟でつかい山を当てるやうとしたことがある。周到に準備を調べた上、ラウターブルクから何人か協力者も連れて来た。そして男が潜り込んだわけだが、無理やり通り抜けようとした通路の一つにぎゅっと嵌まり込んでしまい、前へ進むことも、後ろへ下がることもできなくなった。坑夫たちが鶴嘴や円匙でなんとか救い出すよう指示されたが徒勞に終わり、シルダの井戸に埋められた例の壁工（DSB三七四）みたいにはうまく行かなかった。男は遂に、どうか殺してくれ、と切願した。なにしろ状況は絶望的で恐ろしいものだったから。——そこで非常手段を取るようになった。つまり胴体に綱を括り付けて、死ぬか生きるか天に委ねて引つ張り出そうというものである。さよう、死ぬことになったのだが。なにしろ、力一杯綱を引き、一気にぐいとやると、男の体が転げ出した。転げ出したのはいいが、残念ながら頭がもげてしまっていた。

洞窟内では地下を流れる水の上に大きな梁が横たわり、その奥に悪魔が金銀の山を傍らにして坐っている。これを手に入れたければ三人連れで入り、だれが悪魔のものになるか籤で決めねばならない。それで二人は無事に洞窟から外へ出られ、運べるだけの富を取ることを許される。凶の籤を引き当てた三人目は悪魔によってずたずたに引き裂かれるのだ。一組の余所者がしげしげやって来たことがある。この連中はヴェネツィア人で黒魔術を心得ていた。そして人人を洞窟へ同行するよう誘い、いかさまに掛けてこの人たちに死の籤、すなわち悪魔の籤を掴ませ、自分らはいつも心軽やか、もつともお宝の方はずっしり重いのを背負って穴から出て来たらしい。さて、こやつらはまたしてもある男——その名をシュロツサーといい、オスターハーゲンの出——を言葉巧みに説き、金貨をたく

さん提供した。男はすこぶる貧乏で、八人も子どもがあつたが、怖じ気づいた。けれども男には賢い妻がいて、この妻が、心配しないであの人たちと一緒にお行きなさい、と勧めた。「あたしはね、あんたが戻って来られるように、ちゃんと用意をしときます」と。そして夫の上着に褐色の茉夭刺那を縫い込み、神の御名ミナにおいて行つてらっしゃい、と送り出した。この魔法の草は男を護まもつた。ヴェネツィア人たちは狡賢く立ち回つたが、籤は男ではなく、連中の一人に当たつた。シュロツサーは財宝をたつぷり持つて洞窟から帰還し、アンドレーアスベルクに引越し、そこに綺麗な家を建てた。けれども洞窟内で目の当たりにした、悪魔がヴェネツィア人の片割れを生きながら引き裂く恐ろしい光景を、生涯忘れることができなかった。

訳注

- (1) タンガームونده Tangermünde. 現ザクセン＝アンハルト州シュテングール郡南部にある小都市。エルベ河畔に位置する。
- (2) 輪舞は聳そびえ立つ科リンデの木の下で賑やかに行われた *der sich unter der hohen Linde lustig drehte*. 村落の農民たちばかりでなく、町住まいの市民たちも科リンデの木の下でこのように踊りを楽しんだ。裕福な身なりの男女が科リンデの木の下で手を繋ぎ合い、傍に楽士たちを待らせている十六世紀の木版画がある。
- (3) シュテングール Stendal. 現ザクセン＝アンハルト州アルトマルク地方シュテングール郡庁所在地の中都市。エルベ川を去る西方にあり、さほど離れていない。ベルリンとの距離は一二〇キロ。
- (4) アルトマルク地方 Altmärk. 現ザクセン＝アンハルト州北部の地方。西のドラヴェーンから東はエルベ河畔まで歴史的文化的景観が拡がっている。
- (5) ガルデレーゲン Gardelügen. 現ザクセン＝アンハルト州アルトマルク郡ザルツヴェーデルの中都市。面積ではドイツ第三位。アルトマルク地方南西部、マクデブルク北方にある。
- (6) ゴルトヴェーデル Salzwedel. 現ザクセン＝アンハルト州アルトマルク郡郡庁所在地の中都市ザルツヴェーデル Salzwedel (後段にはこの名称で出る)。

- (7) ゼーフース Seehus. 後段では「ゼーハウス」Seehausと表記されている。現ザクセン＝アンハルト州アルトマルク地方シュテンダール郡の町ゼーハウゼン Seehausen。エルベ河の支流アーラント川河畔に位する。名称の由来は近くに湖があったから。一三五八—一四八八年ハンザ同盟に所屬。
- (8) ヴェルベン Werben. 現ザクセン＝アンハルト州アルトマルク地方シュテンダール郡最北に位置する小邑。エルベ河左岸にある。ドイツ最小の都市Stadtの一つ。かつてハンザ同盟に所屬。
- (9) オスターベルク Osterberg. 現ザクセン＝アンハルト州アルトマルク地方シュテンダール郡の小都市オスターベルク Osterburg(後段にはこの名称で出る)。僅かな期間ハンザ同盟に所屬している。三十年戦争時代に劫略され、一六四四年には荒廢した。一七六一年には三分の二が火災に遭った。鉄道敷設とともに繁榮を取り戻す。
- (10) シュテンダールの衆は葡萄酒がお好き、／ガルデレーゲンの衆は貴族気取り、／タンゲーミュンデの衆は勇氣凛凜、／ブルトヴェーデルの衆は財産家、／ゼーフースの衆は冒險家、／ヴェルベンの衆は小麦を高く売りつける、／オスターベルクの衆は威張りたがりよ、／熊と思つて牡牛を突いたよ。 De Stendaler trinken gerne Win. De Gardeleger wollen Jonker sin. De Tangermünder hebben den Moth. De Soltwedler hebben der Goth. De Seehuser det sind Ehentur. De Werhner geben den Weiten dhur. De Osterberger wollen sich reken. Und deden den Bullen vor den Bären streken. 原文は上記の通り。
- (11) アルブレヒト熊辺境伯 Albrecht der Bär. 初代ブランデンブルク辺境伯アルブレヒト一世(在位一一五七—一七〇)。ドイツ人の東方進出を大いに促進した。「熊」という添え名の由来は未詳の由。尤も、J・K・A・ムゼーウスの「三姉妹物語」Die Bücher der Chronika der drei Schweslern——鈴木満訳・注・解題「リュューベツァールの物語 ドイツ人の民話」Volsmärchen der Deutschen(国書刊行会、平成十七年)所収——では、魔法で熊に変えられていた貴公子が魔法が解かれた後この地位に就いたから「熊伯」なのだ云々です。
- (12) ヴィッシェ Wische. 「草原」Wieseに相当する低地ドイツ語に由来。現ザクセン＝アンハルト州アルトマルク北西部にある地域の名称。かつてのエルベ川の氾濫原。
- (13) 都市建設者との添え名のあるハインリッヒ帝 Kaiser Heinrich der Städtegründer. ザクセン公(在位九一一—一三二六)、東フランク王ヒドイッ王(在位九一九—一三六)。捕鳥王 der Finkler の異名もある。皇帝には戴冠していない。彼の子であるオットー一世(大帝)から神聖ローマ皇帝。DSB三四八、DSB三八九にも出る。三八九では詳しい注を記した。
- (14) マルク・ブランデンブルク Mark Brandenburg. 一一五七年ドイツ北東部に設置されたブランデンブルク辺境伯領(神聖ローマ帝國所屬)を起源とする地方。現ブランデンブルク州の大部分とベルリン、ポーランドの一部を合わせたものに相当する。DSBが

- 編著された時代にはプロイセン王国十州の一つブランデンブルク州。  
 プレーメンと同様 gleichwie zu Bremen. DSB三〇六参照。「ローラント柱」の歴史の意味についてもこの伝説の内容と注を参照。  
 (16)(15) プレンツラウ Prenzlau. 現ブランデンブルク州ウッカーマルク郡の郡庁所在地。中世にはベルリン＝ケルン(やがてベルリンに成長する、シュプレー川に隔てられた隣接する二つの町)、フランクフルト・アン・デア・オーダー、シュテンドールと並んでブランデンブルク辺境伯領の四大都市の一つだった。  
 オイレンシユビエーゲル Eulenspiegel. DSB二〇五参照。  
 (18)(17) 四八年 Anno achtundvierzig. 一八四八年フランス王国パリでの二月革命(国王ルイ・フィリップが退位、第二共和制開始)、オーストリア帝国ウィーンでの三月革命(ウィーン体制の崩壊)、プロイセン王国ベルリンでの同時期の暴動、イタリアのヴェネチア(オーストリア帝国支配下)での民族主義蜂起等等を指しているよう。ペヒシュタインは保守的な立憲君主主義者なので、労働者階級の革命運動に——おそらくドイツ系が支配する国家における少数民族の民族主義運動にも——反感を示すのである。一八四八年についてはDSB四三二でまた「丁寧」に言及がある。  
 (19) 聖務共唱<sup>キルヒンゲング</sup>修道女たち Chorfrauen. 聖堂参事<sup>キルヒンレヒト</sup>会員と同様、大聖堂内陣で聖務に携わる尼僧であろう。しかしながら識者の「高教を俟つ」。  
 (20) ビスマルクの町 Bismark. 現ザクセン＝アンハルト州シュテンドール郡の小さな町。  
 (21) アルフェンスレーベン Alvensleben. DSB三二九参照。  
 (22) ミルデ河畔のカルズ Calbe an der Milde. DSB三二九参照。  
 (23) 「堡壘」<sup>フェルテン</sup> das „feste Haus“. 上記のように記されている。訳語は類推。  
 (24) カルズのヴェルター地区 zu Calbe im Werther. WertherはDSでは「Werder」となっている。Werderには「川の中州」の意があるが、ヴェルターにしてもヴェルターにしても地区名と考えた。識者の「高教を俟つ」。  
 (25) 白麵<sup>ヴァイゼン</sup> Weck. 「ヴェッテン」Wecken、「ゼンメル」Semmelとも。南ドイツやオーストリアにおける小型の白パンの名称。北ドイツや中部ドイツのプレーチェンBrötchenに当たる。近代までヨーロッパでは白パン(小麦)は黒パン(ライ麦。あるいはライ麦と小麦の混合)に比して上等とされた。  
 (26)(27) ヴェンド人の王ミツィスラ Wendenkönig Mizisla. 未詳。「ヴェンド人」はバルト海南岸に居住していたスラヴ族。  
 ブランデンブルク Brandenburg. ここではブランデンブルク・アン・デア・ハーフェル(ハーフェル河畔のブランデンブルク)のこと。現ブランデンブルク州では人口で第三位、面積で第一位の都市。

- (29)(28) オポトリート人の邦 Obotritenland。「オポトリート人」は「ヴェンド人」の一部族。DSB二二三をも参照。南国の香具師たちやこれに使われる猿ども die wälschen Gaukler und ihre Affen。ベヒシュタインの脳裡には一八四八年ヨーロッパ各地に澎湃と起こった自由主義 民族主義の鼓吹があったのであろう。彼は立憲君主政体に忠実な保守主義者。DSB三四三、三三四、四三二、四四一等を参照。
- (30) ハルルンガー山 Harlungenberg。ハルルンガー山あるいはマリリーエン山は、ブランデンブルク・アン・デア・ハーフェルの高地であり、マルク・ブランデンブルクの文化史的に極めて重要な場所の一つ。
- (31) ヴェルベン Werben。現ザクセン＝アンハルト州シュテングター郡最北部の小さな町。エルベ川左岸にある。
- (32)(31) プリーゲニッツ Prienitz。現ブランデンブルク州北西部の歴史的地方。いくらかは現メクレンブルク＝フォアポンメルン州およびザクセン＝アンハルト州にもまたがっている。
- (33) ヴィッテンベルゲ Wittenberge。現ブランデンブルク州北西部にあるエルベ右岸の小都市。郡から独立している。プリーゲニッツ地方では最も人口が多い。
- (34) 有名な鉄道の停車場 eine berühmte Eisenbahnstation。一八四六年ベルリン＝ハンブルク間鉄道に接続、更に一八四七年から一八五一年に掛けてマクデブルクまで路線が延長された。
- (35) ベーリッツ Belitz。ベヒシュタインは上記のごとく綴っているが、現在は「Belitz」である。現ブランデンブルク州ポツダム＝ミッテルマルクの小都市。
- (36) ツェーデニック Zehdenick。現ブランデンブルク州オーバーハーフェル郡の小都市。
- (37) ブランデンブルク辺境伯ヨハンネスやオットー die Markgrafen Johannes und Otto von Brandenburg。共にブランデンブルク辺境伯アルブレヒト二世の子息で、ブランデンブルク辺境伯領を共同統治した。兄はヨーハン一世（在位一二一〇―一六六）、弟は敬虔伯と添え名されたオットー三世（在位一二一〇―一六七）。
- (38) シトー会 Cisterzienser。ドイツ語「ツイスターツイエンザー」。フランスのシトー修道院L'abbaye de Cîteaux創立者ベネディクト会派修道士ロベールに倣い、祈禱と読書と労働の生活を送る修道士・修道女の宗団。
- (39) プリッツケン家 Haus von Pritzen。「プリッツケ」Brizkeあるいは「ブリーツケ」Brizkeはマクデブルクの極めて古い貴族の家柄。
- (40) ラインスベルク Rheinsberg。現ブランデンブルク州オストプリーゲニッツ＝ルッピン郡の町でリン川河畔にある。大小のたくさん湖と変化に富んだ丘陵の間に位置する。

- (41) こういう手合いが妄想を恣恣ににしてザルツヴェーデルに太陽神の神殿を、ガルデレーゲン近郊にイシスの都を造ってしまったのかも知れない。derselbe viellicht, der in Salzwedel den Sonnentempel und bei Gardelegen die Isisburg kraft seiner Phantasie gründete. Dsb III 19, III 10 参照。
- (42) レムス Rens, ロームルスとレムスは双子の兄弟で、伝説によれば、軍神マルスとヴェスタの巫女レリア・シルウィアの間に生まれた、という。ロームルスはローマの建設者で初代の王とされる。実は兄弟のどちらが王になるか、鳥占いで決めることになったが、レムスの許には六羽の、ロームルスの許には十二羽の禿鷹が来たので、後者が勝ちとされたとか(異説もいろいろ)。また、ロームルスが建設させた市壁をレムスが、こんなもの、と嘲って跳び越えたので、怒ったロームルスがレムスを殺した由(これも異説まちまち)。
- (43) ラティウム Latium, イタリア中部、西海岸地方で、古代ローマ発祥の地とされる。
- (44) ランス Rheims, 現フランス・シャンパーニュ地方の歴史ある中心都市(マルヌ県)。
- (45) なんぢ愚なる者を白にいれ杵をもて麦と偕ともにこれを搗とぐともその愚愚は去らざるなり wenn du den Narren im Mörser zerstießest mit dem Stempel, wie Grütze, so liebe doch seine Nartheit nicht von ihm. 旧約聖書箴言二十七章二十二節。邦訳は日本聖書協会刊文語訳聖書に従った。ただし、( ) に記したペヒシュタインのドイツ語原文はマルティン・ルターのドイツ語訳と殆ど同じであるが、これを訳すと「麦と偕ともに」とはならず「挽き割り」麦のごとくに」となる。案ずるにこちらの方が筋が通るようだ。すなわち箴言の意味するところは「愚かな人間を臼で搗といても、麦が精白されるのとは異なり、愚かさは取れない」ということであろうから。
- (46) ヴェンド人の住民 Wendenbevölkerung, ヴェンド人 Wende はドイツ北東部に居住していた、あるいは、居住している西スラヴ系の民族。
- (47) ノイシュタット・ハーバースヴァルデ Neustadt-Berswalde, 現ブランデンブルク州北東部バルニム郡郡庁所在地の都市ハーバースヴァルデ。
- (48) ベルナウ Bernau, 現ブランデンブルク州ベルニム郡の中心都市。ベルリン北東約一〇キロ。
- (49) ベルナウでの in Bernau. 底本では「Prenzlaウでは」in Prenzlau となっている。明らかに誤りなので、訂正しておく。
- (50) 市民の鐘 Bürgerlocke, 事ある場合市民を召集するための鐘。時鐘に使われることもある。通常市庁舎に吊される。
- (51) オラーニエンブルク Oranienburg, 現ブランデンブルク州オーバーハーフェル郡の郡庁所在地の都市。ブランデンブルク州の中心地の一つ。

- (52) テーゲル Tegel. 現ベルリン・ライニツケンドルフ区の一部。テーゲル湖の周囲に拡がる。ただし、ここでベヒシュタインが指しているのは、すぐ次に記されているように、「テーゲルの館」Schloß Tegelのこと。  
 おれたちは世間を啓蒙してやったのになあ。／悪魔の下司めときたら規則など眼中に置きおらん。／おれたちはとても利巧なんだが、それでもテーゲルにはお化けが出る Wir haben ja aufgekärt / Das Teufelspack, es fragt nach keiner Regel / Wir sind so klug, und dennoch spukts in Tegel. ゲーテ「ファウスト」第一部。四一五九―四一六一行。
- (54) 警部見霊者 Proktophantamist. すなわち「尻で魘魅魘魘を見る人」Steißgeisterscherである。ゲーテはこんな造語で同時代人の啓蒙主義作家にして出版業者クリストフ・フリードリヒ・ニコライ（一七三三―一八一）をからかっている。ゲーテはかねてニコライを含むところがあつたのである。ニコライは、テーゲルにあつた当時フォン・フンボルト家所有——一七六六年以降——の邸宅（テーゲルの館。現フンボルト博物館。ヴィルヘルムとアレクサンダーのフォン・フンボルト兄弟は多年ここに住んだ。兄弟の母の死によりヴィルヘルムの所有に帰したのは一七九七年以降）にお化けが出る、という噂に言及、自分も幻覚に悩まされたことがある（一七九一年春のこと）が、警部に水蛭を付けて瀉血したら治った、とベルリン科学アカデミーで講演もし、雑誌にも発表した。
- (55) 大選帝侯の des großen Kurfürsten. プランデンブルク大選帝侯にしてプロイセン公フリードリヒ・ヴィルヘルム（在位一六四〇―一八八）。「大選帝侯」と称された。
- (56) ニコライ Nicolai. 前掲クリストフ・フリードリヒ・ニコライ Christoph Friedrich Nicolai (Nikolaiとも綴る) のこと。尤もニコライがテーゲルの館の所有者だつたこととはない。
- (57) 「公共独逸文庫」 Allgemeine deutsche Bibliothek. フリードリヒ・ニコライが発行した批評雑誌の一つ。一七六五―一八〇六年。季刊。
- (58) 女魔法使い Zauberin. 二つでは「魔女」Hexeと同義に用いられている。それもいわゆる「風の魔女」Wetterhexe である。この類の魔女は、この話にあるように、悪天候を招き寄せて、穀物や果実の収穫を台無しにする。別に魔女に利益があるわけではなく、ただただ世間一般に対する悪意からそうする由。
- (59) シュプレー河畔のケルンの町 die Stadt Köln an der Spree. 通常、Cölln」と綴る。シュプレー川でベルリンと隔てられた町だったが、後にベルリンと合して現在のベルリンに於て成長。
- (60) 選帝侯ヨアヒム二世 Kurfürst Joachim der andere. ホーエントォレルン家出身のプランデンブルク選帝侯ヨアヒム二世（在位一五三三―一五七二）。ヘクトールの添え名がある。一五三九年マルク・プランデンブルクに宗教改革を導入したことで有名。一五〇五年シュ

- (61) プレー河畔のケルンに生まれ、一五七一年一月三日ケーベニック(現ベルリン南東部の行政区トレプトウ<sup>ツ</sup>ケーベニック)に死す。彼は狩猟仲間と共に年を越えて同地の城(ヨアヒム二世の命で狩りの館代わりに使用されていた)に滞在していたが、急死した。ヨアヒム一世 Joachim der erste。ホーエンツォレルン家出身のブランデンブルク選帝侯ヨアヒム一世(在位一四九九―一五三五)。前掲ヨアヒム二世はその長子。ネストールの添え名がある。ネストールは『イーリアス』に登場するギリシア軍の将領の一人。高齡のため闘いには参加しないが、その知恵は作戦上重んじられた。
- (62) 聖<sup>†</sup>フェルトゥス St. Hubertus。狩猟好きが嵩じて、あろうことが復活祭に狩りに出掛けたトゥールーズ公ベルトランの長子ユベールは、射ようとした牡角鹿の枝角の間に十字架を見て改心し、聖職を志し、マーストリヒト、後にリエージュの司教になった由。
- (63) 十一世紀以降獵人、森番(山林官)、射撃組合員等々の守護聖人。かのオルラミュンデ伯爵夫人 Jene Gräfin von Orlamünde。オルラミュンデ伯オットーの寡婦クニグンデはニュルンベルク城<sup>ベルグ</sup>伯フリードリヒ四世の子息で美男の間こえ高かったアルブレヒトに惚れ込んだ。すると、アルブレヒトが、四つの目の障害がなければ結婚するのに、と言った、とかの風聞が立った。障害となる四つの目はアルブレヒトの両親を指していたのだそうだが、クニグンデは自分自身の子どもたち―二歳の女の子と三歳の男の子のことと誤解し、針で子どもたちの頭を刺して殺した。アルブレヒトは彼女と絶縁。前非を悔いたクニグンデはさまざま贖罪を自らに課したが、贖罪行の一つを行っている途中力尽きて死んだ。彼女が城主だったブラッセン城・オブ・クルムパッハにその亡霊が出る、という。これは最も有名な白衣の夫人伝説である。DS 五八五参照。
- (64) 選帝侯ゲオルク ブランデンブルク選帝侯ヨハン・ゲオルク(在位一五七二―一九八)。
- (65) オーム Ohm。昔の液量単位。一三〇―一六〇リットルに当たる。
- (66) 踏ん張り革 Kniemen。靴屋が膝の上で靴を固定するための革。この靴屋さん、もちろん、これで女房子どもをひっぱたこうとしたわけ。
- (67) 町の門を担ったかの英雄サムソンをながら dem Helden Simson ähnlich, der gar ein Stadthor trug。旧約聖書士師記十六章三節参照。
- (68) オーダーブルフ Oderbruch。現ブランデンブルク州メルキッシェ<sup>ル</sup>オーダーラント郡とポーランドに広がるオーダー川の内陸三角州。「アルフ」は「沼沢地」の意。
- (69) シュトラウスベルク Straußberg。現在は Strausberg と綴る。現ブランデンブルク州メルキッシェ<sup>ル</sup>オーダーラント郡の中都市。バルトロメウス祭の日 Bartholomäustag。十二使徒の一人バルトロメウス(バルトロマイ)の祝日。八月二十四日。ドイツの農民

- (71) と羊飼いとどつては伝統的に夏の終わりを意味する日。  
 キュストリン Cüstrin. 上記は一九二八年までの綴り。以降第二次世界大戦終了時まで Küstrin。ブランデンブルク州の都市キュストリン・アン・デア・オーダー(オーダー河畔のキュストリン)。現在はポーランド西部ルブシユ(ルブスキエ)県に属する小都市コストシン・ナド・オドロン Kostzyn nad Odrą。
- (72) ベルリン近郊における例の妖怪刈り取り人夫出現 das Erscheinen der gespenstigen Mäher bei Berlin. D S B三五八参照。  
 (73) ベルリンでの話と同じく Wie in Berlin. D S B三五七参照。  
 (74) アダム派 Adamiten. 墮罪以前のアダムとエーファのように一糸纏わぬ状態に戻ろうと志したキリスト教諸分派に対する蔑称。この名称が最初に現れるのは二世紀北アフリカにおけるグノーシス派の一集団に対して。下つては十五世紀ポヘミア(現チェコ)のフス派における最も矯激な一分派タボル派に属する「自由精神の兄弟姉妹団」も所かり。彼らはキリスト教の全ての宗教的形式を拒み、私有財産を否定、自由恋愛を主張、多くの者が日常衣服を着けないで暮らしたとか。近代では一八四九年ポヘミアの町フルディムに現れ、町の名に因んでフルディム派と呼ばれた集団もアダム派とされる。  
 (75) ノイマルク Neumark. 「新辺境」とでも邦訳できよう。オーダー川東側の歴史的な地方名。今日その大部分はポーランド西部ルブシユ(ルブスキエ)県に属する。「アルトマルク」Altmark (D S B三四一注参照) に対応するか。現在では普通「Uckermark」なので片仮名表記はこれに従った。現在その大部分はブランデンブルク州に、一部がメックレンブルク＝フォアポンメルン州に属する。  
 (76) ウッカーマルク Uckermark. ベヒシュタインは上記のことく綴っているが、現在では普通「Uckermark」なので片仮名表記はこれに従った。現在その大部分はブランデンブルク州に、一部がメックレンブルク＝フォアポンメルン州に属する。  
 (77) 「なんじら互いに重を負く」 einer trage des andern Last. 新約聖書ガラテヤ書六章二節。  
 (78) 悪魔ヨ、立ち去れ! apage Satan! ベヒシュタインは上記のことく綴っているが、中世カトリック教会の悪魔祓いの呪文では「アパゲ・サタナス」Apaga satanas!。  
 (79) フランクフルト・アン・デア・オーダー Frankfurt an der Oder. オーダー河畔のフランクフルト(現ヘッセン州の大都市フランクフルト・アム・マイン(マイン河畔のフランクフルト)と区別するためこの名がある)。現ポーランドとの国境を成すオーダー川西岸の都市。現ブランデンブルク州。ベヒシュタイン在世時にはプロイセン王国の中心部に位する重要な交易都市として栄えた。市場は中世には既にオーダー川の両岸に拡がっていたが、第二次世界大戦後オーダー川東岸はポーランド領とされたため、フランクフルトの東側市場はポーランド共和国の都市スウビツェ Stubice) となった。  
 レブス Lebus. 現ブランデンブルク州メルキッシェ＝オーダーラント郡の小さな町。  
 (81) アンドレーアス・エーバート殿 Herr Andreas Ebert. シレジアのシエポロッタウ Sprottau 生まれ。一四七九—一五五七年。カ

- (81) トリックの司祭だったが宗教改革に賛同。ブランデンブルク選帝侯ヨアヒム二世によってヴリートツェン Wrietzen・アン・デア・オーダーの牧師にして監督教区長に任命される。フランクフルト・アン・デア・オーダーを改革派教会に変えたのはこの人とされる。改革派の認める聖職者の結婚自由を利用、一五四五年、すなわち六十六歳で結婚、晩婚だったにも関わらず数人の子を儲けた。
- (82) ヴイッテンベルク Wittenberg. 現ザクセン・ハルト州の大都市(正式名称ルターシユタット・ヴイッテンベルク)。マルティン・ルターが学び、神学教授として在任、宗教改革の中心となったことで有名。
- (83) ルター博士 Dr. Luther. 宗教改革の創始者マルティン・ルター(一四八三—一五四六)。エアフルト大学で哲学を学んだが、ある時落雷の恐怖に遭い、修道士となる誓いを立てる。聖アウグスチノ修道会に入り、司祭にも叙品されるが、心の平安を得られなかった。ヴイッテンベルク大学で神学博士号を取得。やがて「義しい者は信仰によって生きる」との光明を受け、漸く平安を得る。こうした悟りから発した贖宥状(いわゆる免罪符)販売に対するルターの疑義がドイツに流布し、宗教改革の端緒となる。
- (84) 時<sup>Zeit</sup> Zoll. 地方により異なるが約二・五四センチ。
- (85) ザクセン選帝侯モーリッツ Kurfürst Moritz von Sachsen. ザクセン公(在位一五四一—一五三三)、ザガン公(一五四一—一四九)、選帝侯(一五四七—一五三三)。宗教改革の際カトリック教会を擁護した神聖ローマ皇帝カール五世の最も重要な対抗者だった。一五五三年七月九日レーレルテ近郊ジーファーハウゼンの戦いで、ブランデンブルク辺境伯アルブレヒト・アルツイビアデスの軍勢を撃破して勝利を贏ちえはしたが、背後から銃撃された下腹部の重傷が原因で、戦いの二日後野営地で死亡した。
- (86) トルガウ Torgau. 現ザクセン州ノルト・ザクセン郡の郡庁所在地の都市。エルベ川左岸に位置する。
- (87) Reußen. かつて東プロイセン州モールンゲン郡に属する一地域だった。一九四五年以降ポーランド領。
- (88) かのブランデンブルク選帝侯 der Kurfürst von Brandenburg. については「大<sup>große</sup>選<sup>Wahl</sup>帝<sup>Kaiser</sup>侯<sup>erbk. Fürst</sup>」フリードリヒ・ヴィルヘルム(在位一六四〇—一八八)を指す。初出DSB三五六。
- (89) 温<sup>Warm</sup>良<sup>her</sup>公<sup>Herzog</sup>と添え名された選帝侯ヨージハン・フリードリヒ Kurfürst Johann Friedrich der Großmütige. ザクセン選帝侯にしてザクセン公ヨージハン・フリードリヒ一世(在位一五三三—一四七)。一五四七年神聖ローマ皇帝カール五世の部隊に捕虜とされ、やがて死刑の判決を受けた。しかし終身刑に変更され、これも五年禁獄されただけで一五五二年釈放された。最晩年はヴァイマルで暮らし、一五五四年同地で没する。
- (90) マルヴォア<sup>Malvoisie</sup>ジュー<sup>de</sup>葡萄酒<sup>Rotweine</sup> Malvasier. 元来はギリシア産の、リキュールのように甘く濃厚な上質の白ワイン。しかし、他地方の、似た風味の酒もそう呼ばれた。
- (91) へる<sup>ber</sup>げる<sup>ende</sup>る<sup>nde</sup>産<sup>erzeugte</sup>麦<sup>Malz</sup>酒<sup>biere</sup>ハナベテノ人ノ体ニヨシ Cerevisia Belgrana omnibus sana. フィリップ・メランピトンの評語 Belgrana est

- omnibus sana.」をヘビシユタインが補足したか。「ケレウイシア」はガリアの住民が愛飲していたアルコール飲料に対するローマ人の呼称。すなわちビールラのラテン語名称。
- (92) 郭公鳥 Kuckuk. ヘビシユタインは上記のごとく綴っているが、普通 Kuckuck. 「郭公鳥ビール」とは醸造釜も醸造場も持たない醸造者が大きなビール醸造所を賃借して醸したビールのこと。こういう醸造者を「郭公鳥醸造者」Kuckucksbrauer と称する。郭公はその卵を他の鳥の巣に産み付け、卵を孵すのも雛を育てるのも他の鳥にさせる（＝託卵）からである。
- (93) この鳥の喉は時時醸造者連に長く伸ばされ過ぎる diesem Vogel unterweilen von den Brauern der Hals alzu lang gedehnt werde. 醸造時に水を多く入れ過ぎる、とでもいうことか。「(郭公鳥の)首を長く伸ばす」(Kuckucks) Hals lang dehnen という慣用句でもあるのか。識者のご高教を俟つ。
- (94) 名付けの父さん Gevattersmann. 庶民の間では名付け親と名付け子が互にこうした親密な呼び合いをして、どちらが名付け親なのか端からは分からないことが多かったそう。DS二〇八では鍛冶屋がビール店の女主人の名付けの父親(代父)だった、となっている。
- (95) ラステンブルク Rastenburg. 東プロイセン州の小都市。近くにヒトラーの東部戦線大本営ヴォルフスシャンツェが置かれたので有名。一九四五年以降ポーランド共和国ヴァルミア・マズールイ県ケントシン Ketrzyn。
- (96) 傭兵 Landsknecht. 「ランツクネヒト」とは十五世紀後期ローマ王(後神聖ローマ皇帝)マキミリアン一世がスイス傭兵をモデルとして徴募・育成したのを嚆矢とする、十六世紀を通じて、やがて三十年戦争においても活躍したおおそドイツ系の歩兵傭兵。基本的武器は銃槍、両手持ち長剣などが、火器の採用と発展にともない、火縄銃をも装備した。神聖ローマ帝国のランツクネヒトは元来ハプスブルク家の皇帝に徴募されたにも関わらず、極めてさまざまな王侯の下で闘った。市民兵と違いよく訓練され、優れた兵器を駆使できたので、戦闘力は折り紙付きだったが、戦時の略奪・暴行は一般的だった。平和時、給料支払いの上解雇されると、集団で地方を劫略して回ることもあった。尤もこの話では独りぼっちだし、気の毒な被害者である。
- (97) 公権力ニ基ツキ propter vim publicam. ラテン語。ローマ法の言い回し。
- (98) ディアボルス・アドヴォカトゥム Diabolus Advocatum. ラテン語。直前に出る「アドヴォカトゥス・ディアボリ」Advocatus Diaboli をもじったヘビシユタイン一流のおまけ。中世ラテン語だろうから、「アドヴォ」とせず「アドヴォ」と片仮名表記した。「悪魔」Teufel は「悪党」「やこ」くらいの意味でよく用いられる。「惨めなやこ」ein armer Teufel のやこ。
- (99) 公権力 vis publica. ラテン語。ローマ法の用語。
- (100) ライン・グルデン金貨が六枚 sechs rheinische Goldgulden. 「ライン・グルデン金貨」についてはDSB二〇七注参照。

- (101) シュレッケンベルク銀貨 Schreckenberger. 一四九八—一五七一年に鑄造された銀貨。鑄造当初は三十六プフェニヒの価値があり、七枚でグルデン金貨一枚、一五〇〇年以降は一ターラーに相当する」とされた。
- (102) イスパニアのドブロン金貨 spanische Doppelkron. 「ドブロン金貨」はドゥカート金貨二枚分の価値を持っていたので、「ドブロン」doblon(「ダブル」と称された。イスパニア帝国絶頂期のフェリペ二世(在位一五五六—一五九八)の治世下一五六六年に初めて鑄造された良質の金貨。尤もこの頃はドイツ語で「ドゥベルクローネ」とあるのを意識した。
- (103) 二ドゥカート金貨 Doppelkaten. 三十年戦争時代に幾つかの王侯領で鑄造された由。なお、「ドゥカート金貨」は元来一二八四年ヴェネツィア共和国で鑄造されたのを嚆矢とする高品質の金貨。
- (104) 模造貨幣 Schaupfennig. Adlungの辞典には「Schaugeld」とあるのでこう訳したが、よく分からない。識者のご高教を俟つ。
- (105) 指尺 Spanne. 親指と小指を一杯に stretched 長さ。約二〇センチ。
- (106) ありゃあわたしの手にゃ負えん das ist mir zu gefährlich. 民間伝承の悪魔は女性恐怖症であることがしばしばである。
- (107) シェッフェル Scheffel. 穀量単位。地方により異なるが、五〇—一八〇リットル。
- (108) グロツシェン Groschen. 大雑把に言つて十九世紀プロイセンでもまだ銀貨で、プフェニヒ銅貨十二枚に相当した。ポーランドではその半分、六プフェニヒの銀貨だったようだ。中世ドイツでは分厚い良質の銀貨だったが、この話ではさほどの価値があるとは思えない。
- (109) けれどどどりつく鳥のあらば、Aber da leuchtete kein Stern. 直訳「しかし星は輝かなかつた」。「輝く星なんぞありやしない」  
Da ist kein Stern, der leuchtet. ところのは、前途にちかとも光明の見えない絶望しきつた者の悲嘆の叫びである。
- (110) シルダ Schida. 「シルダの市民」Schidbürger といへば、その愚行を笑ひ話の種にされているが、この都市名は架空。DSB一九〇注参照。しかし、この話のように特定される。ただし、シルダではなく、現ザクセン州北ザクセン郡ベルゲルン<sup>ベルゲルン</sup>シルダウの一部となつてゐるかつての都市シルダウ<sup>シルダウ</sup>Schidau. シルダウはトルガウの南西、ダーレーナー曠野の北辺に位置し、完全に森で囲まれてゐる。
- (111) 麦酒汁 Biersuppe. ドイツ語圏の田舎では十九世紀に入つても朝食として大人にも子どもにも好まれた。アルコールがほとんどない薄ビールが用いられることもあつた。現在では洗練されたレシビが数多く手に入るが、十九世紀の基本的な作り方ではこんなところか。「焼いてから時間の経つたパン数枚を小さく刻み、二壺の褐色ビールと茶匙一杯の姫尚香<sup>ヘンリッヒ</sup>を混ぜ、蓋をして煮る。パンが柔らかくなるまではあまり掻き混ぜないこと。裏漉しに掛けてから掻き回し、バター一塊、好みの量の砂糖と塩を加え、もう一度煮らるる」。

- (112) 香味麦酒 *Witzbier*: 今日「香味」「薬味」としてビールに添加されるのは、いうまでもなくホップ（西洋唐花草）の毬果だが、かつて主婦の自家醸造が普通だったドイツ語圏の田舎ではこれ以外のさまざまな香草（たとえばクマリンの香りを添える車葉草など）も加えられた由。自家醸造の香味ビールは—現在もスカンディナヴィア（ところによるが）のクリスマス・ビールに見られる。「トルガウ産香味麦酒」にどういふ香味が入っていたかは不明。
- (113) 詩篇八十八篇十三節に *im 88. Psalm V. 13* 旧約聖書詩篇八十八篇十三節は下記の通り。「汝のくすしきみわざは幽暗になんじの義は忘失の国に知らるることあらんや」
- (114) *DSB* 七一一五 *Sage Nr. 715* この伝説ではアイスフェルト近くのクロック村にある豌豆の形をした石の粒の由来と、パレスチナの伝説（こちらは「弘法大師と石芋」伝説の類話）が紹介されている。「石の国」*das Reich der Steine* とはパレスチナを指すのであろうか。
- (115) オスナブリュック *Osnabrück* 現ニーダーザクセン州第三の都市。
- (116) ジュンデル巖 *Sindelstein* *DSB* 二〇〇では *Sintelstein* と表記されており、原注には「おそらく聖人の巖のことだろう」*Wohl Heiligenstein* であろう。
- (117) ハルバーシュタット *Halberstadt* 現ザクセン＝アンハルト州ハールツ郡郡庁所在地の都市。ハールツ山地北方二〇キロにある。
- (118) ガイスマール山地 *Geismar-Wald* ガイスマールは現ニーダーザクセン州の大都市ゲッティンゲンの最南部の地区となっている。
- (119) ガイスマール山地はゲッティンゲン西方、ヴェーザー川東側に抜がる森に覆われたなかなかな山地。
- ヴァイツェキント *Wittekind* 普通「ヴァイドゥッキント」*Widukind* ヴェストファーレンの貴族の出で、「ドゥックス・サクソヌム」*dux Saxonum*、すなわちザクセン公（＝ザクセン族の軍司令官）*Herzog von Sachsen* として七十七年から七八五年に掛けてカール大帝に對抗した。しかしながら結局ザクセン族はフランク族の軍事支配に服し、現ドイツ西部はカロリング王国の一部となり、キリスト教化された。八一〇年（？）死す。ヴァイツェキントの名は *DSB* 一六二に既出。
- (120) ミンデン *Minden* 現ノルトライン＝ヴェストファーレン州の都市。
- (121) ぐえすとふありありノ門 *porta Westfalica* ラテン語。現ノルトライン＝ヴェストファーレン州北東部、ヴァーエン山地とヴェーザー山地の間にヴェーザー川が開いた谷間。民衆はただ「ポルタ」とか「ヴェーザーの切れ込み」*Wesserscharte* と呼ぶ。
- (122) ヘルフォルト *Herfort* 現ノルトライン＝ヴェストファーレン州ヘルフォルト郡郡庁所在地。
- (123) リュベケ *Lübbecke* 現ノルトライン＝ヴェストファーレン州の都市。現在の綴りは *Lübbecke*。
- (124) ヴェツェティン *Wettin* 現ザクセン＝アンハルト州ザーレ郡ヴェツェティン＝レーベユーンの一部。この小さな都市はとりわけ王・

- (125) 公侯の家系ヴェッティン家(十世紀頃からこの地を占有)によってその名を知られた。ヴェッティン一族の血はザクセン辺境伯、ザクセン選帝侯、ザクセン王ばかりか、英国、ベルギー、ブルガリア、ポーランドの王家にも継承された。
- (126) エンガー Enger. 現ノルトライン＝ヴェストファーレン州ヘルフォルト郡南西部の都市。この司教座聖堂にはヴィドゥキンントの墓(石棺)があるので「ヴィドゥキンント都市」と呼ばれる。
- (127) ヴィッテンフェルトの会戦 Schlacht auf dem Wittenfelde. 現ニーダーザクセン州オスナブリュック近郊でヴィッテキンント率いるザクセン軍がフランク軍に打ち負かされた七八三年の会戦。DS四五四参照。
- (128) エラーブルフ Ellerbruch. 現ニーダーザクセン州クックスハーフェン郡の町ヴィングストの一部。
- (129) 軍の輜重隊 Heeresstab. 近世まで実戦部隊の後を追う輜重隊には、兵士の妻、あるいは妻と称する女たち、その子どもらなどが士官黙認のもとで随従していた。酒保商人や浮浪の陣中雀どもの居場所もここだった。古代、中世の部族の軍勢では、輜重隊というべきものはなくても、やはり従軍非戦闘員が多数行動を共にしていたことだろう。
- (130) そこで「もぐれや、もぐれ(穴に入れ)、世間は酷いぞ」という諺ことわざ通りになってしまった由 da habe sich das Sprüchwort erfüllt: Krupp unter Krupp unter (krieche ein), die Welt ist dir gram. っれただけでは読者には意味不通であろう。DS四五四では「随いて来られなくなった一人の老婆を、ザクセン族の戦士たちがこう唱えながら、生きたまま埋めた」とある。ペヒシュタインは、老婆一人ではなく、多くの子どもを、敵のフランク軍の手に渡さぬため、生き埋めにした、と速回しに記しているのである。
- (131) ローデンシュタイン城およびシュネラート城の von Rodenstein und Schnellert. DSB五三参照。
- (132) エンゲルン Engern. 前出「エンガー」の誤り。
- (133) 神聖ローマ皇帝カール四世 Kaiser Karl IV. ドイツ王(在位一三四六―七八)、ボヘミア王(カレル一世。在位一三四七―七八)、神聖ローマ皇帝(在位一三五五―七八)。
- (134) 十字架状の碑文 eine Schrit in Kreuzesform. エンガーの司教座聖堂内にあるヴィドゥキンントの墓(石棺)の蓋にはその像と碑文が刻まれている。碑文は像の両側および頭部と足許にある。十字架状には見えない。
- (135) ゴースト Soest. 現ノルトライン＝ヴェストファーレン州ゴースト郡庁所在地の都市。東西にそれぞれほぼ五〇キロ離れてバーターボルトとドルトムントがある。
- 遍歴学生ら fahrende Schüler. 「遍歴学生」fahrender Schülerとは学校・大学で学問を修めつつある学生で、あるいは、学問を修めはしたがしかるべき世俗の職業あるいは聖職に就かずについて、放浪の旅をしている者のこと。この階層は、ラテン語を含め読み書きに堪能だし、医療・魔術を含めさまざまな技能を心得ている、と庶民に考えられ、都会でも村落でも住民の日常生活に関わっ

- て臨時取入を得ることができた。杖を携え、法衣を纏ったその姿は素朴な人人に尊敬されたのである。尤も、一部の学生は詐欺的な犯罪に手を染めることもあり、この階層に悪評を呼ぶ原因ともなった。中世盛期・後期の物語文学や伝説にしばしば登場する。たとえばDSB二二ではスイスの高原牧場を荒廃させた怪物を退治する有効な方法を教えているが、単に楽天的なのらくら者、娘っ子の誘惑者という小悪党的役割を演ずるに過ぎないこともある。「ショラー」Scholer (ラテン語「学問」<sup>スコラ</sup>scholaから)、「ゴリアー」Goliardとも呼ばれた。
- (136) 森が一つ城を目指して押し寄せて来る einen Wald sich gegen das Schloß bewegen. 人数の多寡を察知されないように、兵士に木の枝を持たせて進撃させたので、森が動いて来るように見えたのである。シェイクスピア『マクベス』にもあるモティーフ。
- (137) ハッツフェルト Hatfeld. 現ヘッセン州西部ヴァルデック＝フランケンベルクの町。マールブルク北方、エーダー川の河谷にある。一三四二年ハッツフェルト城のある城山の麓に築かれた。貴族ハッツフェルト家の発祥地。
- (138) ヴォルマール村 Dorf Wollmar. 現ヘッセン州マールブルク＝ビーデンコプフ郡の自治体ミュンヒハウゼン・アム・クリステンベルク(マールブルク北方二〇キロ)を構成する五地区の一つとなっている。五地区はミュンヒハウゼン、ニーターアスフェ、オーバーアスフェ、ジムツハウゼン、ヴォルマールで、一九七四年それまで独立した町村だったものが合併した。
- (139) ガイセンベルク Geisenberg. ベヒシュタインは上記のことく綴っているが、DS二一九、DS二三五ではGeißenberg<sup>ゲイゼンベルク</sup>となっているので、片仮名表記はこちらに従う。現ノルトライン＝ヴェストファーレン州、ピンゲンより下流のライン両岸に連なるライン片岩山地の一部ロートハールゲビルゲの峰の一つ。
- (140) ヨーハン・ヒュプナー Johann Hübnar. この盗賊騎士Raubritterの行状とその最期についてはDS二一九に詳しい。
- (141) キンデルスベルク Kindelsberg. 現ノルトライン＝ヴェストファーレン州、ピンゲンより下流のライン両岸に連なるライン片岩山地の一部ロートハールゲビルゲの峰の一つ。標高六一八メートル。
- (142) ゲッティンゲン Göttingen. 現ニーダーザクセン州ゲッティンゲン郡の著名な大学都市。
- (143) 神聖ローマ皇帝オットー四世 Kaiser Otto IV. 在位二〇九―一八年。
- (144) ミュンヒェン die drei Gleichen. テューリンゲンの古い町ゴータ南東九キロ、アルンシュタット北西五キロにある互いに近接している三つの城山。ヴァンダースレーベン村近くのグライヒェン城Burg Gleichen、その南、ミュールベルク村近くのミュールブルクMühlburg、ミュールベルク東方、ホルツハウゼン村近くのヴァクセンブルクWachsenburgを三グライヒェンと称する。テューリンゲンの豪族グライヒェン伯爵家はその一番目の城山に因んで名付けられた。この城がおそらく一〇八八年古文書にその名が挙がっているグライヒェン城であり、トンナ伯爵家の分家がここの城主となってグライヒェン伯爵と名乗った。この伯爵家は二人の

- 妻を持った伯爵の伝説 (D S 五八一) —— 一五三九年には既に完成していた——で有名になった。テューリンゲンの文人 J・K・A・ムゼーウスはこの伝説を素材として長編メルヒェン「メレクザーラ」Melechsala——鈴木満訳・注・解題『メレクザーラ ドイツ人の民話』*Volksmärchen der Deutschen* (国書刊行会、十九年) 所収——を書いた。伝説そのものについても同書の鈴木満の解題を参照されたい。またベヒシュタインは、私淑する郷土の大先輩ムゼーウスのこの物語を枕に振って初期の四短編集の一つ「ゼリンデ」Selinde (鈴木満訳・注・解題、「武蔵大学人文学会雑誌」第三十九巻第三号) ——「テューリンゲンの民話」*Thüringische Volksmärchen* 所収——を書いた。
- (145) 山城ブレッセ Bergschloß Plesse. 現ニーターザクセン州南部、ゲッティンゲンの北ほぼ七キロにある中世の山城の廃墟。  
子どもが一人城壁の中に生きながら埋められた Ein Kind ward lebendig in der Mauer beigesetzt. 日本にもあったという「人柱」の習俗。
- (146) 車葉草 Waldmeister. 茜科の多年草。五月から七月に掛けて芳香を放つ白い漏斗状の花を咲かせる。葉草、香草として用いられ、ビール<sup>ビール</sup>の賦香料ともなる。この植物の有名な含有要素はクマリン。なお「ヴァルトマイスター」は「森番」の意。
- (147) これはもう二十代は出ていて六十代に入ったといっている auch schon aus den zwanzigen und etwa in den sechzig. なんとか訳してみたが、ちて一向びんと来ません。
- (148) 靴尺 Schuh. 昔の長さの単位。約三〇センチ。
- (149) 故人ニールス・クリム weiland Niis Klimm. 一七四一年ラテン語で書かれた『にこらうす・くりみうすノ地底旅行』*Nicolaus Klimm Her Subterraneum* (『ニールス・クリム Niis Klimm の地底旅行』) が出版された。これは諷刺的 SF で、著者はノルウェイ系デンマーク人(当時ノルウェイはデンマーク王国に属す)の文人・歴史家・哲学者・劇作家ルートヴィ・ホルベア Ludvig Horberg (ホルベア男爵ルートヴィ。一六八四—一七五四)である。このように故事や当時のニュースを書き込むのは、もとより伝説の忠実な再録とはいえない。ただし読み物としてはおもしろくなる。ベヒシュタインはこうした手法を彼が尊敬して已まなかった郷党の文人 J・K・A・ムゼーウスから借りたのである。この伝説一篇も同タイトルである D S 三〇の単純素朴な内容とはまるで異なり、伝説を素材とした近代風短編とでもいうべきものとなっている。
- (152) カッセルのヴィルヘルムの丘にあるヘラクレス像 der Herkules auf der Wilhelmshöhe bei Kassel. 現ヘッセン州の州都、かつてのヘッセン方伯・選帝侯国(後ヘッセン大公国)の首都カッセル西方の広大なヴィルヘルムスヘーエ公園にある。八角形建物にそそり立つ尖塔の天辺に立つこの銅像(像の丈だけで八・二五メートル)とその下に延延と連なる人工滝——市中心部から遠望で

- きる——は、ヘッセン＝カッセル方伯カール（在位一七二七—一七三〇）が国費を傾けて作らせた（一七〇一—一七）もの。カールは大規模な軍隊を創設、当時の諸侯と同様、兵士を援助金と引き替えに外国に貸し出した。けだし傭兵貸貸業である。
- (153) 昔話のあのシユビーゲルシユヴァーフ *der Spiegelschwab im Volksmärchen*. ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著/鈴木満訳・注・解題『ドイツ昔話集』（一八五七）試訳（その六）——「武蔵大学人文学会雑誌」第四十二卷第二号、平成二十二年十二月——所収「一 シユヴァアーベン七人衆の昔話」に登場するシユヴァアーベン人の一人ミヒェルの綽名。無理に訳せば「シユヴァアーベン男の鏡どん」。昔話中の解説によれば「シユビーゲルシユヴァーフは、鼻を自分の上着の前袖で拭く習慣のせいで、そこが「漬がくつついて」なんかこう鏡みたいにびかびかしとるので、こういう清らかな名前を貰ったわけ」。
- (154) お伽話にある通り *wie im Kindermärchen*. 妖精ないし小人といった類の超自然的存在が人間の娘にあらかじめ恩を売っておいて、自分との結婚あるいは娘が初めて産む子の引き渡しを要求。ただし、自分の名を言い当てることができれば、それを履行しないでよい、と告げる昔話を指す。ドイツでは、KHM五五番「ルンベルシユティルツヒェン」*Rumpelstilzchen*（金田鬼一訳「がたがたの竹馬こぞう」、英国では、J・ジェイコブズ編「イギリス民話集」一番「トム・ティツ（ト）・トツ（ト）」*Tom Tit Tot*が日本で容易に読めよう。フランスでは、シャルル・ペローの姪マドモワゼル・レルチュエ・ド・ヴィランドン（＝ヴィランドンの女性継承者たる令嬢）マリ＝ジャンヌが民話を素材として書き上げた物語集に収録されている「リクダン・リクドン」*Ridin-Ridon*がおもしろい。こうした「名前当て」を主題とする民話に興味をお持ちの向きは、鈴木満著「昔話の東と西 比較口承文芸論考」（国書刊行会、平成十六年）所収の小論「名前の魔力 フランスお伽話『リクダン・リクドン』考」をお読みください。
- (155) 雛菊占 *das Orakel der Gänsehume*. 「あのひた／あのひた、あたし／ほくを愛してる」*Er / Sie liebt mich*. 「愛してる」*Er / Sie liebt mich*. 「愛してない」*Er / Sie liebt mich nicht*. 「愛してない」*Er / Sie liebt mich*. と唱えながら、雛菊あるいはマーガレットの花弁を一枚一枚筆で折って行く恋占いはドイツ語圏では有名。ただし、*（ト）*で小人が言うのは、同じ手法で少女が将来の配偶者の身分・職業を占うこと。
- (156) 豌豆を叩いて莢を取っていた *draschen …… Erbsenfrucht …… aus*. 実が完熟するまで畑に置いてから収穫、更に乾燥させ、乾いた莢を殻で打って、莢と実を分ける仕事をしていたらしい。実は乾いた豌豆としてスープその他に使う。かつては足らずがちの穀類の補いとして乾いた空豆などとともに（とりわけ貧しい者に）常用された。
- (157) 打穀が済むと豌豆を空中に投げ上げ（て莢と分け）た *nach dem Ausdraschen wurfelen sie die Erbsen*. 打穀した穀物や豆から夾雑物を排除する原始的な手法。かつてヨーロッパや日本では普通「箕」のようなバスケット状の選別用具に入れ、煽るように中身を放り上げ、軽い小片となっている殻や莢などの夾雑物を風で飛ばし、落ちて来た穀物や豆を再びそれで受けた。しかし、こうしたバスケット状選別用具ではなく、長い柄のついたシャベル状の器具を用いてしゃくいた地域、時代もある。「箕」でやるの

- とは反対に、重い穀物や豆はいくらか遠くの床に積もり、軽い夾雑物は手前に落ちるのである。この話では、選別用具に豆が溜まるのではなく、納屋の床に打穀場に落ちるはず、となつていたので、後者が当て嵌まる。
- 投げ上げ円匙 Wurfschäufel. 前掲注参照。尤も現行独和辞典では「箕」と訳されている。
- (159) ベルンスハウゼン Bernshausen. 現ニーダーザクセン州ゲッティンゲン郡の町ゼーブルクの一部。かつては村。
- (160) ゼーブルク Seeburg. 現ニーダーザクセン州ゲッティンゲン郡の小さな町。ゼーブルク湖を間に挟んでベルンスハウゼンと向かい合っている。
- (161) 実は白蛇 es war aber eine weiße Schlange. KHM一七「白蛇」Die weiße Schlange は白蛇の肉を食べて鳥獸の言ふことが分かるようになった青年の話である。
- (162) モーリンゲンの町 Fleck Moringen. 現ニーダーザクセン州ノルトハイム郡の小さな都市。一三三二年には既に都市となつている。神殿騎士諸卿 Tempelherren. 「神殿騎士修道会」についてはDSB一二七注を参照。なお神殿騎士修道会管区がモーリンゲンに置かれていたかどうかについては議論の余地がある由。
- (164) 悪魔の穴 Teufelskutte. 原文では上に記したように「Teufelskutte」となつてゐる。しかしこれは「悪魔の衣装」の意で、ここでは不適。「Teufelskutte」ではなく「Teufelskitt」<sup>1</sup>と解釈して「悪魔の穴」と訳した。
- (165) ギッテルデ Gittelde. 現ニーダーザクセン州オステローデ郡の小さな町バート・グルントの一部。
- (166) シュタウフェン城 Staufenburg. Staufenburg. とも綴る。十一世紀初頭に築かれた、と推定される山城。ゼーゼン南方約六キロ、ギッテルデ北方約二キロの山の頂上にある。現在は壁のみが残る廃墟。現ニーダーザクセン州ゴスラー郡。ハールツ山地の外縁。鳥捕りと縛名されたザクセン公ハインリヒの囮場 des Sachsenherzogs Heinrich des Finklers Vogelfeld. 東フランク王国のカロリング朝がルートヴィヒ四世の夭折を以て断絶すると、王国の中核フランクエン公国のコンラート一世が諸公に選挙されて王位(フランクエン朝)に就く。しかし有力な公たち——ザクセン公、シュヴァーベン公との対立は継続、一方スラヴ、マジヤール、デーンなどの外部諸勢力の侵入にも悩まされ、実質的統一は成就しなかった。そこでコンラート一世は臨終に際し、敵対してはいたもののその力量を買っていたザクセン公ハインリヒを後継に指名した。王位に就くようハインリヒの許に派遣された王国の使節団がハインリヒを発見した時、彼は囮を使って鳥を捕獲するのに余念なかった、といわれる(そこで「捕鳥王」との添え名がある。この名はDSB一〇〇に既出)。かくして東フランク王国ハインリヒ一世(在位九一九—三三)が誕生。このザクセン朝は一〇二四年まで続く。ハインリヒ二世の子オットー一世はドイツ王(在位九三六—七三)としてアーヘンで即位、更にローマで教皇により戴冠、ローマ・東フランク皇帝(在位九六二—七三)となる。オットー大帝である。彼の帝国は後に神聖ローマ帝国と呼ばれるようになる。

- (168) 帝冠 Kaiserkrone. 前掲注に記したように、「帝国」Kaisereich が成立するのはハインリヒ一世の子オットー一世を待たねばならない。
- (169) ブラウンシュヴァイク公ハインリヒ Herzog Heinrich von Braunschweig. ブラウンシュヴァイク＝ヴォルフエンビュッテル公ハインリヒ Heinrich der Jüngere, Herzog von Braunschweig-Wolfenbüttel (一四八九—一五六八)。ブラウンシュヴァイク＝ヴォルフエンビュッテル公大ハインリヒの次子。愛人エーファとの間に十人の庶子を作った。
- (170) エーファ・フォン・トロット Eva von Troth. エーファ・フォン・トロット・ツ・ゾルツ Eva von Troth zu Solz (一五〇六頃—六七)。ヘッセンの貴族トロット・ツ・ゾルツ家の令嬢として生まれ、一五二二年十六歳でブラウンシュヴァイク＝ヴォルフエンビュッテル公の宮廷において女官となる。公との間に恋愛関係が生じ、一五二四年男児を出産したのを皮切りに公の子を産み続けた。
- (171) ゴスラール Goslar. 十一世紀初頭から十三世紀中葉に掛けて歴代の神聖ローマ皇帝がしばしば宮廷を開いた古都。現ニーダーザクセン州ゴスラール郡郡庁所在地。ハールツ山地の北西麓に位置する。都市の外縁にあるかつての鉱山ランメルスベルクとともに世界文化遺産。
- (172) 皇帝ハインリヒ四世 Kaiser Heinrich IV. DSB四四注参照。
- (173) コノ日ヲ榮<sup>ア</sup>エアルモノニナシタマイシハ汝<sup>汝</sup> hunc diem gloriosum fecisti. ラテン語。カトリック教会の聖歌の一つ「聖霊ヨ来タリタマエ」Veni Sancte Spiritus には見当たらない。よなたか「高教を」。
- (174) コノ日ヲ血<sup>ミ</sup>ドロノ争<sup>イ</sup>ニナセンハ我<sup>我</sup> hunc diem bellicosum ac cruentum ego feci. ラテン語。悪魔はわやわや主語 ego を入れて「このおれ様だ」と強調している。
- (175) ランメルスベルク鉱山 Rammelsberg. ハールツ山地<sup>ザクセン</sup>の北西端に位置する標高六三三メートルのなだらかな山で、既に三—四世紀、すなわち古代ローマ時代から採鉱が行われていたと推定される。尤も文書にこの銀鉱脈が記されたのは九六八年で、以来一七八八年鉱脈の涸渇が決定するまで千年以上に亘り鉱山としての稼動が続いたことは確かである。これだけ長期に経営された鉱山は世界に類がない。生産されたのは銀、銅、鉛、錫。
- (176) 皇帝オットー二世 Kaiser Otto II. ドイツ王・神聖ローマ皇帝(九七三—一〇三三)オットー一世、すなわちオットー大帝の子。ザクセン朝<sup>三代</sup>第三代。
- (177) ハールツ山地 Harzwald. 「ハールツゲビルゲ」Harzgebirge とも。ドイツ北部、現ニーダーザクセン州、現ザクセン＝アンハルト州、現テューリンゲン州にまたがる二二二六平方キロの中級山岳地帯。最高峰はブロッケン山(標高一一四一メートル)。保養・観光

- (178) 光に好適な小規模の町が数多く点在、山麓にはゴスラール、ノルトハウゼン、クヴェードリンブルクなど中規模の都市が幾つつかある。アンドレーアスベルクとハールツゲローデ *Andrasberg und Harzgerode*。聖<sup>聖</sup>アンドレーアスベルクは現ニードーザクセン州ゴスラール郡の小都市ブラウンラーゲの一部となった上ハールツの小さな町。ハールツゲローデは現ザクセン・アンハルト州ハールツ郡の小都市。東と西にかなり隔たっているこの二つの地名を併記するのは的外れ。
- (179) ゴーゼ川 *Göse*。現ニードーザクセン州を流れるオカー川の支流で「水路」とも呼ばれる。ゴスラール市内を流れる小川。味わたった者には名高い同市の麦酒「*Göse* deren berühmtes Bier, die Göse, wenn sie schmeckt. 中世にはゴーゼ川の水で醸していたのでこの名がある。炒燥しない大麦、小麦、燕麦のモルトを原料として上面酸酵させた白ビール。食塩と香草を添加し、ホップは少ししか用いない。酵母と乳酸を豊富に含んでいるので、酸っぱい風味を持つ。ゴスラール産ビールとして既に一五七〇年に言及されている。
- (180) フランケンベルクの教会墓地にある *auf dem Frankenbergischen Kirchhof*。ゴスラール市内で最も高いフランケンベルクにある聖<sup>聖</sup>ペトルス・聖<sup>聖</sup>パウルス教会の墓地。
- (181) 惣管理 *Communio*。ラテン語「コムニオ」*communio* (「共有」「共同関与」)の訛であろう。
- (182) そこて約千人が落下する岩石のため惨死した *und wurden bei tausend Menschen vom einbrechenden Gestein erschlagen*。少なくても百人の坑夫が巖塊に埋もれて命を落とした一三七六年の坑内事故を指す、と思われる。
- (183) まだ一つ石の碾き臼が足りないじゃないか、と指摘した *entdeckte dieser, daß noch ein Mühlstein fehle*。悪魔ともあろう者がそんな手抜きをするわけではない。DS一八四では、狡い粉挽きが隙を窺って石臼を一つ転がし落とした、と記している。
- (184) グルーベンハーゲン採鉱場の *dem Grubenhagenschen Bergwerk*。「グルーベンハーゲン」*Grubenhagen* は、ブラウンシュヴァイタールューネブルク公国の分かれで、現ニードーザクセン州に当たる地域の領主となったグルーベンハーゲン公爵家ないしその一族。すなわちこの坑鉱の所有者。
- (185) シヤルツフェルス城 *Burg Scharzfels*。現ニードーザクセン州南部オステローデ・アム・ハールツ郡の小さい町シヤルツフェルト・アム・ハールツ近傍にある中世の城塞。突元と聳える巖山のとっぺんに築かれ、しかるべき将兵と充分な食糧・水を備えれば難攻不落だったろうと思われる。一七六一年六千のフランス軍に包囲され、僅かの弱兵しか守備していなかったため十日間で陥落。フランス軍は四日占拠しただけで、有力なドイツ軍の接近を知り、城を爆破して撤退。以来廃墟となっている。
- (186) 汚辱の城 *Schandenburg*。シヤルツフェルス城に対抗するため築かれた中世の堡壘。一五九六年にその名が言及されているが、築造年月日、築造者、築造要因は不明。現ニードーザクセン州オステローデ・アム・ハールツ郡の小都市バート・ラウターベルク

- Bad Lautenbergの二部となつたかつての町バルピス近郊にある。
- (188) オスターハーゲン村 Dorf Ostringen. 現ニーターザクセン州オステローデ・アム・ハールツ郡の小都市バート・ラウターベルクの一部。
- (189) 山の精、山小人、さては山の修道士 Berggeist. Bergzwerge und Bergmönche. いずれも鉱山の坑道内に出没して坑夫たちをかちかちたり、恩恵を施したり、気に染まないことをされた場合には死傷させたりする。これら超自然的存在はもとより自由に巖を通り抜けることができる。さまざまな恰好をしているが、修道士の法衣のような衣装を纏い、頭巾を被っている巨大な精もいて、これはスイス奥地グラウビュンデン・アルプスおよびハールツ山地では山の修道士と呼ばれる。山の修道士の伝説としてはDS二、DS三を参照のこと。
- (190) アインベック Einbeck. ベヒシュタインは上記のごとく綴っているが、Einbeckの書き間違いか誤植と思われるので、片仮名表記はこれに倣つた。アインベックは現ニーターザクセン州ノルトハイム郡の中都市で、かつてハンザ同盟に属し繁栄した。同市特産のビール「アインベッカー」は一三七八年以來有名で、ルターも「最高の飲み物」と言っている。このビールについて詳しくはDSB二一六を参照のこと。
- (191) ラウターブルク Lauterburg. 現ニーターザクセン州オステローデ・アム・ハールツ郡の小都市バート・ラウターベルク Bad Lautenberg である。
- (192) だれが悪魔のものになるか籤で決めねばならぬ müssen ..... loosen, wer ihm verfallen soll. 「籤で決める」とはあるが、挿絵では骰子を二個振っている。
- (193) 一組の余所者 ein Paar Fremde. 初版以降では ein Paar と小文字になっている。これだと「二、三」の意。しかし、「二人」でなければ意味が通らぬ。従つて、初版通り、と考へざるを得ない。
- (194) ヴェネツィア人 Venezianer. 言わずと知れた北イタリアの都市国家ヴェネツィア共和国から来た人間。中・近世の質朴なドイツの民衆——それも山の民ならなおさら——とは次元が違うほどしたたかな連中だったことである。
- (195) 茉天刺那 Dost. マジヨラム。紫蘇科の多年草。香草として肉料理その他に多用される。古代ギリシア、ローマでは、幸福を呼ぶとして結婚する男女がこれで作った花冠を被った。この話では「褐色の」とあるので、乾燥したものである。このドイツ語でいう「ドスト」Dostあるいは「ドステン」Dostenと「ドラント」Drant(鋸草)の二種は魔除けになる(DSB三〇一参照)と見え、兇悪な男の水の精の許に呼ばれた産婆がこれを身に付けた、あるいはそれらの中に踏み込んだために災いを蒙らずに済んだ、との伝説がDS六五として二つ収録されている。

結びに一言。

DSB三四一には往時のドイツ辺境方言で記された韻文が出て来る。これについてはまたしても日本有数のドイツ語学者たる元同僚新田春夫特任教授にご高教を請うた。春休み、夏休みとベルリンでご研究中であるにも関わらず、貴重なお時間を割いて事細かくご指導くださった。まことにもってありがたいことである。

DSB三九〇では、ミサの詠唱に悪魔がラテン語で怪しからぬ対句を附けているが、これの主語 ego について青山学院大学文学部西村哲一教授——親愛なる元同僚西村淳子教授のご配偶——から実に詳細な文法的説明を戴いた。訳にうまく反映させたかったのだが、対句という制約があるので、思うように行かなかった。西村先生ご夫妻、再再のご懇篤なご教示、まことにありがとうございます。

DSB三九四の後半は興味深い。中・近世のドイツ人、とりわけ都市住民ではない素朴な農民や鉱山労働者らにとつて、遙か南方、分裂してはいるが先進国イタリア北部にある、それも大層有力な貿易都市国家の首都ヴェネツィアは目眩くような絢爛たる存在だったであろう。水上にそそり立つ都市貴族の数の宮殿、強大なガレー船隊が齎すその豪富、夜更けても煌煌と華やいでいる大廈高樓には、高貴な姫御寮と思いきや、しかるべき対価を払えばなんとでもなる典雅な遊び女の群れ、僻遠の地の産物である香辛料や食品、衣料、宝飾品の溢れる市場。——聖マルコを守護聖人として推戴するこの異国の大都市からスイスやドイツの鉾山に奇妙な男どもがやって来て、金銀財宝を持ち去る。彼らは黒魔術に通じている。こうした主題のドイツ語圏の伝説がまだまだ数あることを次の論文で知った。ヨーロッパ文化学科嶋内博愛准教授「山のヴェネツィア人」——所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十五巻第三・四号、平成二十六年三月——である。ここに記して学恩を謝すしだいです。

訂正 いずれも分載試訳(その七)

- ① 一五三ページ(目次) 二九八 池から出て来た馬 Gaul aus dem Pfuhl. ↓ 二九八 池から出て来た馬 Gaul aus dem Pfuhl. \*DS203 Das Teufelsbad zu Dassel.
- ② 一八一ページ 後ろから六行目 ローラント柱<sup>ノレ</sup> ↓ ローラント柱<sup>ノレ</sup>
- ③ 二二〇ページ 後ろから五行目 十本 ↓ 十対
- ④ 二二二ページ 後ろから三行目 ローラント柱<sup>ノレ</sup> Rolandssäule. ↓ ローラント柱<sup>ノレ</sup> Rolandssäule.